
入れ替わるトワトキラリ

トモカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

入れ替わるトワトキラリ

【Nコード】

N2341Q

【作者名】

トモカナ

【あらすじ】

ごく普通の草食系男子高校生、内倉永久うちくらとこはある冬の夜に死に掛けている少女に出会う。その少女はクラスメイトの完璧美少女、大宮煌おおみやきりだった。

煌を助けようとした永久は、何故か煌と入れ替わってしまう。

そして煌の身体になった永久は、煌の裏家業を無理矢理やらされる羽目に　！？

プロローグ

僕は目の前にいる少女に、確かに見覚えがあった。

そのことに気付くのに多少のタイムラグがあったけれど。

顔以前にその全容に衝撃を受けて、頭の中がしばらく真っ白だったのだと思う。非日常的光景を目の当たりにしてしまうと、現実を受け入れられない脳が逃避を始める。

これは夢じゃないだろうか、と気弱な僕は考えていた。

甘い考えを打ち砕く、鉄錆のような匂いが鼻について現実に引き戻された。

僕の知っているであろう少女が、全身血にまみれて、倒れていた。

週末。僕は寒々とした深夜に、夜の街へと出ていた。

次の日が休みだからって、夜遊びするぜやっほーってわけじゃない。夜遊びするようなスポットもない田舎街だ。右手に提げているビニール袋の中身の為に、渋々歩いているのだ。自然に溜め息が漏れる。

『突然だけどおねえちゃんね、肉まんが食べなくなっちゃったの』

自室でぬくぬくと寝ていたら、たたき起こされた。満面の笑顔でふとんを持ち上げている姉の顔を見て、僕は恐怖に打ち震えた。

姉の唐突な気まぐれ指令は、いつものことだ。

は？ 明日まで我慢しろよ、寒いよ畜生。なんて僕には口答えをする勇氣はない。僕を下僕だと思っているだろう姉を泣かせてやることが、目下ささやかな夢だ。心の中ではブツブツと文句を垂れつつ、しかし従順に上着を着込んでいる時に、更に姉から上乘せされた言葉。

『肉まん冷めてたら、殺すから』

凍てつく冬空の下、外へと放り出された。

土曜日で幸いだった。明日学校だったらこの苦行は辛い。

僕は徒歩十分程の場所にあるコンビニまで走り、姉待望のホカ力肉まんを購入した。売り切れだったら店員に泣きついているところだった。肉まんを購入できなかった時のことを想像するだけで、更に寒さが増す。

人気のない街路を白い息を吐き出しながら、早足で帰っていた。

僕の足音だけが、規則的に響く。僕の住む街ははつきり行って田舎であり、早い時間から街全体が暗闇に落ち、静寂に包まれる。コンビニの無駄に明るい灯りが遠のいていくと、あとはぽつぽつと小さな街灯が道を照らしているだけだ。建ち並ぶ住宅も店も、人の気配を感じられないくらいに暗闇に包まれている。

だから、その小さな呻き声はすぐ耳に届いた。自然、足が止まってしまった。

「……は、あ……くっ」

声が聞こえた方へと目を遣る。ビルとビルに挟まれた隙間、細い路地になっっている場所から、その声は聞こえてきた。

僕の歩いていた大通りの街灯は路地に届かない。先が見えない。闇に吸い込まれそうな空間だ。いつもは視野にも入れずに通り過ぎていくような横道だ。

僕は逡巡した。

呻き声は、か細い女の子のものに聞こえた。

早く帰らないと姉が怖い。姉超怖い。

でも……こんな深夜に女の子が苦しんでいる声なんて、大事かもしれない。

正直気になった。好奇心と、少しだけの騎士精神、というやつだ。情けないくらい小さな自覚はあるけど、それぐらいは持ち合わせている。

少し迷った末に思い切って路地へと足を踏み入れて、

その光景を目にしたのだ。

「ちょ、うわっ、きゅ、救急車……！」

少女の服は原型を留めていないくらいに引き裂かれて、破れてしまっている。露出している肌には、無数の裂傷。深い切り傷からは大量の血液が溢れ出してきている。重ねて、重ねて少女にとめどなく赤色が上塗りされていく。

まさかここまで深刻な事態に遭遇するとは、予想していなかった。僕は今までに見たことのない血の量を目にして、眩暈を覚えた。そして生臭い血の臭いが充満する空間に耐えられず、込み上げた吐き気。気持ちが悪い。冬の冷たい風が吹く中なのに、全身に汗が浮かんでいた。

混乱に陥って、青ざめて立ち尽くしながらも、僕は少女を観察し続けてしまっていた。

その時になって、気付いた。

「……大宮、さん……？」

その少女は荒い息を吐き出しながら、肩を大きく揺らし、うずくまっている。少女が僕の言葉にはじめて反応を示した。

ガラス球のように虚ろだった眼が、初めて僕の方へと向く。一体どこに傷口があるのかわからないくらい、血にまみれた少女が朦朧としているらしい意識で、手を伸ばしてきた。

彼女はクラスメイトで、僕のクラスの委員長でもある大宮煌おおみやきいじだと思っ。多分。

確実にそうだと思えないのは、その少女の髪が

「うわあっ」

足を掴まれた。僕の喉元からは情けなくも悲鳴が飛び出した。直後に反省した。重傷を負っている少女に対してあげる声じゃない。しっかりしろ。相手はおそらく瀕死の状態で、助けを求めているんだ。

僕は気持ちを入れなおし、腰を屈める。

「大宮さん、大丈夫!？」

「……き、み……永久^{とわ}、くん？」

「待ってて、今救急車を」

「ちょうどよかった」

「え？」

上げかけた腰が、止まる。

少女は、口の端を吊り上げて、笑った。怪我しているのに。どう見たって、死にそうなのに。

僕の手首が彼女の伸ばしてきた指に掴まれた。想像を絶する力強さで引っ張られた。

「ちょ！」

地面に転がされてしまった。アスファルトに背中を打ち付けられた衝撃に、息が一瞬止まる。

事態を把握する間もなく、仰向けになった僕の身体の上に、ずると少女が這い上がってくる。

足を掴まれた時に感じた恐怖は、やはり間違いではなかったのかもしれない。

その少女の血に染まった顔面、ギラギラと光る眼。そして、冷酷な笑み。

何より、その少女は大宮煌の特徴の一つでもある、腰まである艶やかな黒髪ストレートではなくて。

闇夜に光る　金色の髪だった。

自分の知っている少女とはかけ離れた、存在。

「その身体、ボクにちょうだい」

煌が言った。

「お、おおみや、さ　！」

直後、唇を塞がれた。

柔らかい感触を強く押し付けられ、口の中にひろがっていく血の味。

なんという最悪なファーストキスなんだ。泣きそうな気分になった。そして、動揺以外の何かに反応して、鼓動が激しく脈打つ。どくどくどく、血が激しく身体を駆け巡り、目の前が眩んでいく。意識が遠ざかっていく。反転する世界。滲んでいく、煌の顔。

失っていたのは一瞬、だと思う。

重たい瞼を上げ、薄い視界の中で僕を見下ろしている存在に気付く。

身体がありえないくらいの痛みに襲われていた。どこが痛いのか

わからないくらい、全身に駆け巡っている。激痛に悲鳴を上げかけ、けれどその眼が捉えたものに悲鳴すら忘れる。

月明かりの下で。

僕が、僕を見下ろしていた。

「……え？」

掠れた問いかけが、喉から漏れ。

更に驚愕。それは僕の声ではなく、女の子のもので。

「ボクの使命の為に、今死ぬわけにはいかないんだ。ごめんね、大宮さん」

出血と痛みで薄れていく意識の中、僕が言い放ってきた。

何が起こっているのか分からない。

僕を見下ろす僕がにっこりと笑みを浮かべ。それは、罪の意識をカケラも感じさせない笑顔だった。

激痛で言葉すら出てこない状態で悟る。どうやら僕はこのまま、死ぬのだ、ということ。

「その為にキミの身体をもらったから」

ああ、そうか。

今僕を見下ろしている僕は……おそらく大宮煌なのだ。

入れ替わった、ということなのか。

把握と共に、意識は朦朧と薄れていく。僕の顔もぼやけていつて少し懂れていた僕のクラスメイトは、容赦なく僕を殺すつもりらしい。

今更知った。

大宮煌は、最低最悪な女だ。

第一話 変身 美少女清掃員？

生きていた。たぶん。

それが第一の感想。瞼を開いた視界に映ったのが、僕の実の姉の顔だったから。

死んでしまつてまで姉に支配されている状況ではないことを願う。

「あ、起きた？」

姉の表情が、何故だかいつもより一割り増しほど優しくに見える。僕と三歳年の離れた姉、久遠くおんはのぞきこむようにして、問いかけてきた。

僕はぼんやりとしたまま頷く。どうやら全て夢だったらしい。そうだな、肉まんを買いに行つていきなり女の子と入れ替わつて死に掛けたなんて、ありえない。

寝転んだまま視線だけ巡らせると、ここは姉の部屋のようにだった。間取りや広さは僕の部屋と全く一緒だけど、部屋の匂いが僕の部屋とは明らかに違う。清潔感のある香りが漂っている。寝かされているベッドのシーツの色やカーテンの色も違う。

なんで僕はおねえちゃんの部屋で寝ているんだ？
身体を起こそうとし、姉に肩を押し留められた。

「まだ寝てた方がいいわ」

……やっぱり優しい。表情も慈愛に満ちている。こんな姉の顔を見るのは何年ぶりだろうか。僕は感慨深くなった。

そうだ、数年前までは優しい姉だった。いつからだろうか、彼女のSの血が目覚めてしまったのは。

「今日は泊まっていていいから、ね？」

うんうん。

そういえば昔はよく一緒にベッドで寝てた。布団に潜ってくすぐりあって、じゃれあって。姉のいい匂いと温もりに包まれて、幸せを噛み締めて眠……泊まる？

僕の疑問符が浮かんだ表情に気付いたのか、姉が微笑みかけてきた。

「何も心配することはないのよ」

髪の毛を撫でられる。姉の細くしなやかな指に撫でられ、僕は頬が熱くなった。

やはりここは天国なのか。

いや、昔は究極のシスコンだった僕の願望が生み出した幻？

「あ、の……え、あ？」

声を出して、誰が喋っているんだと横を見る。

相変わらず慈愛の表情に満ちた姉。温かな眼差し。しかし姉が口を開いた気配はない。

「あー？」

自分の声だった。驚愕にガバツと身体を起こした。

「な、なななな！　なんだこの声は！」

鈴のように可愛らしく高い声が、自分の耳に届く。あれ、そういえば意識を失う前もこの声だったような。

僕は慌ててベッドから降りる。嫌な予感がざわざわと胸を駆け巡っていた。

姉の部屋の片隅に置いてある姿見の前へと、走った。

鏡に僕の全身が映る。

「うわああああ！」

叫んだ。叫ぶしか、ない。

「落ち着いて！ 錯乱する気持ちはわかるけど！ 大丈夫、大丈夫だから！」

背後から姉に抱き締められた。僕の混乱は極まった。あね、あねあねあねの豊満な胸がもろに背中にあたっている！

「おおおおば」

「大丈夫、もう何も怖いことなんてないわ。私の名前は久遠って言うのよ。あなたに害を与える存在じゃないから」

後ろからぎゅっと強く抱き締められている。姉の息がくすぐるように首筋を撫でた。

ぞくり、と身体が震えてしまった。そして、混乱したままもう一度鏡を確認し。

頬を紅潮させて、美女に抱き締められているのは、自分のよく知っている少女。

大宮煌、だった。

僕の通う星霜高校の見慣れたセーラー服を着ている。プリーツカートから伸びる細くて長い足。紺色のハイソックス。髪の毛は腰まで伸びる、艶やかな漆黒のストレート。ぱっちりとした大きい眼

が、瞬きを繰り返している。凝視している。まるで自分が見つめられているようで、僕は更に頬が熱くなっていた。そうすると鏡の中の美少女も赤面していく。

「夢じゃなかった……」

呆然と呟く。その声はやはり、女の子のもの。

でも怪我はどうなった？ あの出来事が夢じゃないのなら、煌は大怪我をしていたはず。しかし鏡に映る煌は傷どころか、シミや痣一つ見当たらない肌理細かい滑らかな肌だ。

改めて観察してみて、その少女のどこにも欠点が見当たらないことを知る。怪我也気になったけれど、服装も闇の中ではつきりとはわからなかったが、制服ではなかったはず。何故セーラー服を着ているのだろうか。

「悪い夢を見たと思えばいいのよ」

姉が僕の前に回りこんできて、今度は正面から抱き締めてきた。

姉は今の僕より少し背が高い。柔らかい感触が触れ、姉の肩まであるさりと伸びた髪の毛からの香りが、鼻腔をくすぐった。

僕はその色香にうっとり和我を失いかけた。

直後に正気に返る。姉の肩を押して、その身体を離れた。

「え、えーと！ おねえちゃ、いや、違つ、と、とにかく！　なん
で僕はここにいますか？」

姉の表情は柔らかい。おそらく僕を知らない女の子だと思つての、優しい表情なんだろう。それにしただって眼差しが温かすぎる気もするけど。

「私の弟がね、あなたのことをこの家まで運んできてくれたのよ。おぶって」

「おとう、と、ですか」

「クラスメイトだつて言つてたから煌ちゃんも知っていると
思う。
内倉永久うちくわくしとわっていうの」

「トワ……」

「知ってるでしょ？ 目立たない弱そうな子だけど」

悪かったな。どうせ僕は目立たないし弱そうだし特技は妄想だ。知ってるなんてもんじゃない。僕が内倉永久なんだから。

言いかけて、僕は口をつぐむ。女の子の姿でその事実を述べたとしても信じてもらえるわけがない。信じてもらえたとしても、今まで抱擁を自分の弟としていたことを知った姉の反応が恐ろしい。証拠隠滅で殺されるかもしれない。

「あの、久遠さん。その助けてくれたトワ君は、どこにいるんですか？」

まず事情を問うべき相手は、僕と名乗る謎の人物に、だろう。

先ほどの出来事が夢じゃないのなら、僕の身体に入っているのはやっぱり大宮煌なんだろうか？

姉が言うには、内倉永久は……ええい、ややこしい。トワ、と呼ぶことにする。トワは僕を連れて、一緒に自宅に帰ってきたらしい。だったらすぐにでもトワと会えるはず。

「自分の部屋にいるわ」

想像通りの姉の言葉を受け、僕はすぐさま扉の方に向かいかけて手首を掴まれて、止められてしまった。僕は姉の方へ首だけ振り向かせた。

「気をつけて。永久はしょぼいし草食系というのもおこがましいくらいヘタレだけど、一応男の子だから」

「泣いていいですか」

弟のことを語る姉の眼に、鋭さが帯びた。豹変したといってもいい。

「永久に会いに行くなら一緒に行きましょう」

「いついやいや一人で行きます。ちょっとトワ君と二人きりで話したいことが」

久遠の眼に更に鋭さが増した。こわい。いつもの自分を見る姉のソレだ。

「まさかあなた、永久と付き合ってる、とかじゃないわよね？」

「いえいえいえ！ そんなまさか！」

僕は袈裟に身体の前で両手を振って否定した。姉の表情が和らぐ。

「そつだよね。永久となんて、まさかねえ。ありえないわよねえ。永久はありえないわー」

馬鹿にしたような言い方に、さすがに僕でも少しムツときた。
そこまで僕を完全否定することないじゃないか。

僕は半眼になって姉を見つめる。

「おねえちゃ、いえ、久遠さんはトワ君のこと、よっぽど嫌いなん
ですね」

「愛しているわ」

「ああああいー!？」

叫んでしまった。

さらりと飛び出した姉の宣言に、僕は目を剥き、姉をひたすらに
凝視してしまう。

姉はうつとりと恍惚の表情を浮かべていた。

「永久のことが可愛くて可愛くて虐めたくて虐めたくて虐めたくて
……!」

「……」

おねえちゃん、あなた歪んでは思ってたけどそこまでですか。

「だから、ね」

姉が一步僕へとすり寄ってきた。怪しげな眼差しを向けられる。

「とつくんは私のオモチャなんだから、手、出しちゃダメよ?」

耳元へと唇を寄せられ、吐息と共に囁かれた。
ぞくぞくぞくと、身体が震える。

「し、失礼しましたー！」

耐え切れなかった。急いで退出した。

ばたん、と後ろ手に扉を閉める。大きく息を吐き出す。心臓がバクバクと高鳴っている。

「愛してるとかオモチャとか……」

姉は完全に僕を別人だと認識して、言葉を繰り出していた。
いちいち考えていたら身が持ちそうにない問題発言ばかり聞いてしまった。姉の本音を垣間見てしまった気まずさを、とりあえずは横に追いやる。

今は姉よりも、大きな問題が隣の部屋にいる。

思考を切り替えて、隣の、自分の部屋の前へと足を進めた。

扉の前に立つと、少し怖気づいた。

おそらく僕の身体がこの先にいるのだろう。見たくない現実を突きつけられるかもしれない。

自然と表情が強張ってしまっていた。

自分の身体に入っているのは、大宮煌、なんだろうか。

「大宮煌、か」

大宮煌という女の子を思い浮かべてみると、再び鼓動が高鳴った。
大宮煌は僕とクラスメイトの女子だ。けれどそれだけの女子じゃない。星霜高校新入生代表として入学式の挨拶をしたその時から、校内で知らない人間はいないぐらいに既に有名人だった。超絶な美少女が、凜とした声と毅然とした態度で答辞を読み上げる様に、先

生、生徒一様に見惚れていた。もちろん首席合格の彼女は、学年首位。スポーツも万能。芸術方面も多才。

何よりも彼女の魅力は、その可愛い顔に似合った綺麗な心、だと思っていたんだ今日までは。

誰に対しても笑顔で優しく、頼れる存在。

「あれは悪い夢だったのか、な……」

普通の煌を思い出すと、やはり先ほどの非情冷酷な態度のトワは別人だったように思う。

やはり僕の見た悪い夢だったのではないだろうか……現状、大宮煌の身体に僕の精神が宿っているらしいことだけは、確かなものだけれど。

もし煌の本性が先ほど見たソレならば、心打ち砕かれる男子生徒は数多あまただろう。

僕だって、ショックだ。恋愛感情を抱くには遠すぎる相手だけど、多少なりとも懂れていたんだ。

『その身体、ボクにちょうだい』

あの時確かに、トワはそう言った。非情な笑みを浮かべ。

僕は色々な思考を打ち払うように、大きく頭を振った。

思い切って、ノックもなしに扉を開け放った。

「……！」

予想はしていたけれど、やはり衝撃。

言葉すら出てこない。

自分の身体が、ベッドに寝そべっている。

扉が開け放たれたことで、閉じていたトワの瞼が上がる。

その両耳にはヘッドフォンが付いていた。トワは香気にも音楽を聴いていたらしい。

「なに日常を満喫してるんですか！」

思わず声を荒げていた。その声で、ようやくトワが立ち尽くす僕の方を見遣ってきた。

「やあ大宮さん。意識が戻ったんだね」

まるで動じた様子のないトワが、軽く言ってきた。ヘッドフォンを外して、笑顔まで向けてくる。

「僕は太煌じゃなくて、内倉永久です」

僕はトワを睨みつけ、低く言い放つ。クラスメイトと言えど、僕はほとんど女子と会話をしたことがない。緊張から敬語になってしまふ。

「知ってるけど、そう呼ばないとややこしいでしょう？　ボクはキミのことをこれから大宮さんと呼ぶから」

トワの皮をかぶった煌が、肩を竦めて言った。

「やっぱり……君が太煌なんですよね？　なんで僕の身体が君のものになったんですか？　なんで大宮さんは大怪我してて、しかも金髪で……どうして入れ替わった僕は生きてるんですか？」

あの時。身体が入れ替わった僕はトワに見下ろされ、激痛に意識を手放した。

完全に死んだ、と思ったのに。

「まあまあ。そんなに一度に聞かれても答えられない」

トワがよつと軽快な動きで身を起こした。

「確かにボクは大宮煌だよ。でも今は内倉永久の身体だから、キミはボクのことをトワって呼んでほしい」

「……嫌「呼べ」」

僕は不満げな表情を消して、すぐさま頷いた。有無を言わさない凄まじい強制力だった。怖かった。

トワが満足気に微笑みを浮かべている。

「えーと、次はなんで身体を奪ったか、だったよね」

「死に掛けてて僕の身体を奪って生き延びようとしたように思えたんですけど」

「ご名答だよ、大宮さん」

「……僕が死んでもよかったってことですか」

「うん。もちろんキミを犠牲にする気満々だった」

僕は頭を抱えた。トワは恐ろしいまでに笑顔のままだ。

「今更本性を隠してもしようがないしね」

やはり彼女は、腹の中が真っ黒だった。

クラスメイト代表として煌には良い子でいてほしかった、と声を大にして叫びたくなった。僕は泣きたい気分で顔を上げてトワを見つめる。トワはこの状況に全く動じていない様子だ。

「ボクはある方法でキミの身体と入れ替わった。そして大宮煌の身体は死んでしまう筈だった。キミの精神だか魂だかごと。でも何故か蘇生した。ちょっとボクにも理由がわからないんだ。でも死ななくてよかったじゃないか」

「元に戻してください」

僕はベッドに近付いてトワへと詰め寄る。しかしトワは全く表情を変えず、

「無理」

あっさりと告げてきた。

「はあっ？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

それは煌の声なんだけど、耳に馴染んでしまったのがなんだから悔しい。

「なんで無理なんですか！？ 君がなんかやって身体が入れ替わったんですよね！？ だったら元に戻る方法だって」

「この方法が使えるのは一度だけなんだ。まあ、究極魔法みたいな感じ？ 悪いけど諦めて」

「僕にこのまま一生女の子の身体でいろって！？ いや、無理無理無理！」

動揺と混乱で声が上がってしまっている。

僕は頭の中が吹き荒れる嵐状態でパニックのまま、トワの肩を強く掴み。

「僕の身体を返してください！」

叫び、トワの身をベッドへと押し倒した。

自分の顔を間近で見て、鏡でも見ているような気分になる。

あの時煌はキスして、自分と入れ替わった。だったらもう一度キスすれば入れ替わるのでは？

安易な希望に縋り、その顔を寄せていく。

「うっ」

途中で気分が悪くなった。

自分の顔にキスするのは、やっぱり嫌だ。

それにしても、特徴があまりない顔だ。なんて自分の顔ながらに思う。まあ悪くはない、と思いたい。

トワが、別人のように魅力を最大限に引き出した微笑みを見せた。

「無理だって言ってるのに。それに、さ」

「うわぁっ」

トワに手首を掴まれ、強い力で引かれる。簡単にベッドの上に倒されてしまった。

ばふ、と僕の身体でシーツがはねた。
いつのまにか立場が逆転している。
手首を掴まれたまま。トワに見下ろされ、

「今はボクが男の子の身体なんだから、力でかなわないと思うよ？」

言い放ってきた。

僕はぐつと唇を噛み締めた。敗北感が心に溢れた。

僕は視界が潤んでいくを感じた。こんなことで泣きそうになつて
る僕は、やっぱり姉の言う通りにしよばくてヘタレだ。情けない
と。その時

がちやりと扉が開けられた。

僕とトワはその体勢のまま、扉の方へと目を向けた。

姉、久遠が立っていた。

「永久ああああ！！ アンタ何やってんのよおおお！！」

姉が炎上した。ように見えた。

僕は光速でベッドから降りた。条件反射で姉の前へと走り、土下
座した。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

土下座している頭をげしげしと足で踏みつけられた。いつも通り
のパターンだ。

「そんなので許されると思っての！？ このヘタレが！ 阿呆め
！ 大体肉まんはどこいった！ ……ってアレ、間違えた。あなた
は煌ちゃんじゃない」

姉の攻撃が止み、僕は顔を上げる。そういえば僕は煌だった。無駄に攻撃対象になってしまった。

情けないまでに眉が下がっているだろう表情を、姉が柔らかい表情で見下ろしてきた。

「ほら、立って煌ちゃん」

姉が優しい声で手を差し伸べてきた。僕はその手をおずおずと遠慮がちに取る。

僕が立ち上がると、その横で姉がトワを強く睨みつけていた。

「煌ちゃんが暴漢に襲われて×××な目にあっていたところを助けてきた奴のことじゃないわ!」

「な、暴漢ですと!?!」

姉の吐き捨てた言葉に、僕は大仰に反応してしまい。

「かわいそうにかわいそうに!」

そしてまた姉に抱き締められてしまった。

……姉の優しすぎる態度の理由がようやく判明。

何を姉に吹き込んだんだ、と、トワの方を見遣る。トワは肩を竦めている。

「えーと、襲ってきたのは大宮さんの方だし?」

やっぱりこの子、最悪。

「な、ななんということを! えーと久遠さん、いや、違うんです

「！」

僕は焦りのままに言い放ち、首を何度も振る。
抱き締められたままだったので、姉の身体が震えているのが伝わってくる。

再び、姉が耳元に口を寄せてきて。

「今度誘惑しやがったら、クロス」

囁かれた。

標的にされた。

今度こそ泣いた。

「あ、大宮さん。明日から忙しいよ。たくさん教えなきゃいけないことがあるから。問題は山積みだ。まあ今日のところは時間も遅いし、ゆっくり寝て」

トワが爽やかな笑顔で告げてくる。

「寝るって……どこで？」

僕はえぐえぐと泣きながら問いかけた。

「もちろん私の部屋でよ。さ、行きましょうか。煌ちゃん」

姉の部屋にベッドは一つしかない。

「一緒に寝る、んですか？」

「そうね、ちょっと狭いけど。女の子同士だから問題ないでしょう」

「？」

……そりゃ昔はよく一緒に寝たけども。

姉の匂いに包まれて、ぬくもりを感じながら幸せを噛み締めて。でも、今は、十七歳の健全男子高校生で。やっぱり姉と一緒にベッドで寝るのは色々問題があるような気が！ 気が！

ずるずると引きずられて、僕に抵抗の余地はなかった。

ちよつとは何もかもに逆らえるようになりたい。戦えるようになりたい。

なんて願望は願望のままで。

結局は安らかに寝息を立てる久遠に抱き枕にされている状態におさまっている。

まったく眠れそうにない。

「とつくん……大好き、うにゅー……」

その甘い寝言に身悶えながら。

「煌ちゃん、クロス……」

低く鋭い寝言に身を震わせ。

これって天国なのか、地獄なのか。

第一話 変身 美少女清掃員？

眩しい朝日がカーテンの隙間からこぼれ差し込み、部屋の中を照らしている。ちゅん、ちゅんと小鳥の囀りが耳をくすぐる。

爽やかな日曜日の朝だ。

ぬくもりの残る布団を名残惜しく思いつつ、ベッドから身を起こした。

自分の柔らかな頬に触れる。続いて頭を触ってみると、指からこぼれおちていく、さらりとした長い黒髪。

「戻ってないね」

問題は、僕が女の子になってしまったということだけ。

僕は姉の部屋で一人、空しく呟いた。

姉、久遠の姿はもう部屋にない。時計を確認すると八時だった。

眠れないと思いつつもすっかり寝てしまった自分の図太さに呆れる。セーラー服のままで寝てしまったので、皺が寄ってしまったている衣服を軽く伸ばし、改めて自分の身体を確認した。

大宮煌の身体だ。女の子の身体をこんなに間近で見るのは、初の経験だ。ごくり、と喉が鳴ってしまった。

その時になって、首から提げていたペンダントに気付いた。服の中に隠れてしまっていて今まで気付かなかった。細い鎖を引っ張って、取り出してみようかと見下ろす。そこで胸部の膨らみに注目してしまい。慌てて目を逸らした。

まずい、これは耐え難い誘惑だ……！

きよろきよろと周囲を確認。部屋には僕一人。

男の子だもん。十七歳だもん。興味ないわけ、ないじゃないか。どんな感触なのか想像するだけで鼓動が高鳴る。セーラー服の上から大きく張り出した胸は、夢のような柔らかさに違いない。ふわふ

わか、ぷにぷにか。涎が垂れかけて、口元を慌てて引き締める。

もう一度胸を見下ろしてみた。セーラー服の胸ポケットには分厚い手帳が入っている。生徒手帳だろうか？

「ちよつと確認を……」

仕方ないんだ、仕方ないんだ。なんの手帳なのかを見るだけだ。僕は頭の中で言い訳を繰り返し、わなわな震える指を、胸へと伸ば

「おはよう大宮さん」

「ひいひいひい」

がちやりと扉が開け放たれ、僕は瞬時にスライディングで布団の中へと身を隠した。けれど遅れてしまった反応に、一連の動きは全部トワに見られてしまっていた。

扉の前に腕を組んで立っているトワを、布団を被ったままでこそりと隙間からのぞき見てみる。

「何してるのかな？ 大宮さん」

トワが顔に笑みをはりつけたまま、問いかけてきた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

とりあえずベッドから降りて、土下座した。

先延ばしにしたかった現実的な問題がある。けれど、生理現象に

は逆らえないのは当然のことだ。

僕は涙目になってしまっているのを感じながら、落ち着きなくトワの後ろから階段を降りて行く。

ダイニングに着くと、姉が毎朝の日課であるトーストと卵を焼いて、食卓に並べていた。

「あ、おはよう煌ちゃん」

姉が笑顔で明るく挨拶をしてきた。弟以外の人物には、基本人当たりのいい人物なのだ。昨夜の出来事ももう記憶の彼方のようにだった。

「おは、よう、ございます」

僕は頭を下げ、落ち着かなく食卓の周りをうろつろした。ソワソワ。

「どうしたのソワソワして？ 座って。コーヒーでよかった？」

「……はい」

僕は無意識にいつも自分の座る椅子を引き、腰掛けた。ソワソワソワ。足がもじもじと動き続けてしまっている。

「ボクもコーヒーで」

姉に声をかけながら、正面にトワが座ってきた。普段の僕はパジャマで寝癖がぼさぼさのまま、朝食を食べる。日曜日なら尚更だ。一日パジャマのままなんてこともある。けれど目の前のトワは既に着替えを終えていた。

少し癖のある猫毛も櫛できちんと通したのか、セツトされている。白いシャツに、コットン素材のパンツ。日曜の朝なのに、トワは清潔感に溢れていた。いつも同じよれよれの服ばかり選んでいたけど、そつえばこんな服も持っていたなあ、なんてぼんやりと僕はトワを見つめ

「うわあああああ！」

直後、僕は叫びとともに、立ち上がった。

「お、おお大み……じゃなくて！ トワ！ まさか君自分で着替えたんじゃ」

「自分で着替えなかったら誰が着替えさせてくれるんだろう。おねえちゃんに？」

「な、何言ってるのよアンタ！ 私にき、着替えさせてほしいなんてそんな、い、いいかもしれないわ……ハアハア」

恍惚とした表情を浮かべつつ、コーヒポッドを傾ける姉。コーヒが溢れ出てしまっている。

トワはにっこりと姉に微笑みかけていた。

「じゃあ次の着替えからはおねえちゃんにお願いしようかな」

「それだけは勘弁してください！」

僕は涙目になって訴えた。最悪だ。自分の身体が弄ばれている気分だ……！

姉は妄想に身を悶えさせ「私の×××として、ずっとお部屋で×

×……」ながら、台所の方へと戻っていった。×の部分は脳内から消去した。

姉が消えて二人きりになると、僕は冷や汗を浮かべながら、トワへと顔を寄せる。

「ぜ、ぜぜんぶ見た？」

僕はもじもじと足をくねらせつつも声をひそめ、問う。ソワソワソワソワ顔が熱い。

「だってこれから内倉永久として生きていかなきゃいけないわけだし。こういうことは早めに慣れておかないと」

「なんでそんなに順応性が高いんですか！僕はこの身体でいることを認めたわけじゃ」

「ちなみにシャワーも浴びた」

「うわー！ ばかー！」

全部見られた。恥ずかしすぎる。死にたい。あの時死んだ方がマシだったかもしれない。僕は食卓に突っ伏し、喚く。

「……仕方ないじゃない」

トワの呟きがぼつり、と僕の頭上から降ってきた。

僕は顔を上げた。今までの平坦な感じじゃなく、少し感情のこもった声に、聞こえた。

だけど僕が確認したトワの顔は、平然としたままだった。

トワはコーヒーを一口すすってから、僕の方を見遣ってくる。

「ところで大宮さん、さっきから何でもぞもぞしてるの？」

「……うっ」

トワの言うことは正しい。仕方ないんだ。生理現象には逆らえない。

「君、はもう済ませたんですよ、ね」

かなり限界に近く、僕の瞳は潤む。ソワソワ途切れ途切れに、言葉を吐き出すソワソワ。

「ああ。ずっと我慢してたんだ？」

「だってだって、そりゃあこれから何度も行かなきゃいけないわけだけど、いいんですか？ この身体は君のものだし、僕は、僕はあ
っ」

「これ、どうぞ」

トワがポケットからさつと取り出してきたもの。僕の滲んだ視界にはソレが瞬間なんなのか、わからない。

目をこすって涙を拭い、改めて視点を定めた。

それは細長い、白い布だった。……これで目隠しをしろ、ということか。

「行つてらっしゃい」

トワの言葉を受け、僕は白い布を奪い取って猛烈にダッシュした。

「これ以上我慢できるかあああ！」

白い布を目にあてて、後頭部できゅっと縛り。

完全に遮断された視界で。

トイレに駆け込んだ。

「キミという人物が少しずつわかってきた気がする」

横を歩くトワが、僕に向けて言葉を発してきた。

「女の子に免疫がない純情少年。加えて優しすぎるね」

僕はトワを少し見上げる形になってしまう。歩幅も違うので、早足にしないとついて行けない。

朝食を終えてから、二人で家を出た。トワが「家に送るよ」と提案してきたからだ。

家の中にいると姉が絡んできて、まともに会話ができない。僕としては色々と聞きたいこともあったので、甘んじてその提案を受け入れた。大宮煌として家に帰ることを承諾したわけじゃない。まだこの身体になった自分を認めたわけじゃないんだ。

というわけで僕は姉に上着を借りて、トワと二人で午前中の街中を歩いている。

空は晴れ渡っているけれど、肌寒さに身体が縮こまる。特に足。空気に晒された腿とスカートが揺れる度に入り込んでくるひんやりとした冷氣。初めての感覚に、歩き方自体おかしいものになつてしまいそうだった。

「僕は君が全然わかりません。なんで平然としていられるのか……」

僕はトワへと恨みがましいジト眼を向けてしまふ。

「全部説明、してくれるんですよね」

言っと、トワがニツコリと微笑みかけてきた。自分の顔なのに、別人のように見える。キレイすぎる笑顔に頬が熱くなった。中身が違っただけでイケメンに見えてくる不思議だ。

「キミが知りたいのは、大宮煌が何故内倉永久と入れ替わったか、だよな」

トワが歩きながら、軽くその事実を口にした。

「その理由は昨日聞きました」

大宮煌の死にそんな身体を捨て、偶然現われた内倉永久の身体を手に入れる為だと平然と言ったのけたのだ。僕が死んでも構わなかった、とも。

僕は口を尖らせながら、トワをじっと見上げた。

「君は何者なんですか？」

そもそも、そこから入らなければいけない。

何故大怪我をしていて、金色の髪で、僕の身体と入れ替わることでできたのか。普通の少女ではないことだけは確かだ。

「ボクは平凡な普通の女の子だよ。あ、女の子だったよ、か」

「普通の平凡な女の子は魔法少女みたいな入れ替わり能力を持って

いないと思うんですけど」

「まあ、その能力は裏のお仕事の関係、かな」

「裏のお仕事……？」

十七歳の女子高生が裏のお仕事と言うと、何かいかがわしい職業を想像してしまう。僕は慌ててそれを振り払い、トワを見つめる。トワは相変わらず超然としていた。

「キミに引き継いでもらわないといけないし、仕事のことはきちんと説明する。ボクの家に行ってからそのことは話すよ」

「引き継いで？　ちょっと待って、なんで僕が君の都合に合わせなきゃいけないんですか」

「さっき言ったこと、覚えてる？」

トワに言われ、僕は首を傾げた。

「キミという人物が少しずつわかってきた気がする」

トワは先ほどと同じ言葉を繰り返す。

「優しすぎるんだよ、キミ」

僕は無然として、立ち止まってしまう。

大宮煌と僕はクラスメイトとしての浅い関係しか築いていない。昨日今日だけで僕のことを理解したと言われても、納得ができない。

「キミはボクの仕事をやってくれる。絶対に」

「だから、なんでそんな勝手なことを……」

「信じてる」

トワが振り返ってきて、僕の両手を握った。

正面からじつと目をのぞきこまれ、僕の鼓動が早鐘を打っていた。ちよつと待て、落ち着け。なんで自分の顔にときめいているんだ。

トワの真摯な眼差し。その瞳には曇りが無い。今日の前にいるのは、内倉永久じゃない。

この瞳は　煌のものだ。

「きら」

り。と思わずその名前を紡ぎそうになった、その時。

突如、僕の言葉を掻き消すように、獣の雄叫びが街中に響き渡った。

地の底から這い出てきたような、現実を引き裂く音。

鼓膜が震えた。

途切れることなく、その大音量の獣声は続いた。

第一話 変身 美少女清掃員？

僕ははっとして、上空を仰いだ。

トワも握り締めていた僕の手を離して、周囲に視線を巡らせている。

その間にも、獣の雄叫びのような音はずっと聞こえていた。

「タイミング悪いなあ、まだ何も話してないのに！」

苛立った様子でトワはぼやき、眉間に皺を寄せている。

僕も絶え間ないサイレンのような咆哮に耳を塞ぎたくなりながら、周囲を見回した。

今僕たちが立っているのは人通りの多い街道だ。しかしその声に驚いているのは僕らだけのようだった。通行人は表情も変えずに歩いている。ちょうど通りかかっていたファミリーストランのガラス越しに見える店内では、ランチの前で慌ただしく店員が動きまわっていた。客がぼつぽつと店の入り口に吸い込まれていく。

誰も、気付いていない。こんなにすごい音が、聞こえていないのか……？

「ついてきて」

「え、ちよっ」

トワが強引に僕の手首を掴んできて、走り出した。僕は足を縛れさせながら、引きずられる。

「普通の人には見えないんだよ。ボクはずっとその見えない奴らと戦ってきた」

「は？」

僕は息を切らせながら、トワを見上げる。トワは全力疾走で、ついていくだけで必死だ。

トワの眼は真っ直ぐに前を見据えていた。今まで以上に真剣な横顔だった。

「時間がないから手短に話すね。その見えない奴らと大宮煌は戦うんだ。変身して」

「へっ変身ですとお！？」

「胸ポケットに手帳が入ってるでしょう？ それを出して」

トワの顔は大真面目だったし、厳しい口調だった。ふざけて言っている様子には見えない。

「変身ってどういう」

「いいからボクの指示に従え」

「はい……」

分厚い手帳は確かに大宮煌のセーラー服の胸ポケットに入っている。トワの言葉を受け、僕は空いている方の左手で制服の胸ポケットに手を伸ばした。胸に触ってしまわないように気をつけながら、手帳を取り出した。

強気な相手に逆らえないのは、姉からの調教の成果かもしれない。

「確認して」

トワが少し表情を緩めて言った。こんな状況に関わらず、嬉しそうだ。

胸に触れないように注意している仕草を見られていたらしい。僕は赤面してしまったのを感じながら、トワを睨みあげる。

「片手じゃ手帳開けないです。離してください、ちゃんとついていきますから」

「りょーかい」

やはり嬉しそうな、トワの弾んだ声。

「三ページ目、開いて」

僕はきゅつと唇を結び、走りながらも手帳を開いた。擦り切れてボロボロになった手帳は何度も同じページを開いたらしく、パラパラ捲るとすぐにトワの指示通り三ページ目とまった。それに目を落とし。

「……っな、なんじゃこりゃあああっ！！　む、むむむ無理です！」

「十四歳の頃からボクはやってるよ。大丈夫！」

そんな爽やかな笑顔で振り返って親指立てられても。

「いや、そりゃ絶対できないってことはないけど、なんていうか、これは、恥ずかしすぎます！」

完全に男を捨てるといのか。

目の端に涙が滲んでしまっている状態で、先を走るトワの背中へと声を浴びせた。

「信じてるよ、永久くん」

「……」

今度は振り返らずに、トワが言ってきた。

大宮さん、と呼び続けていたトワが僕の名前を紡いだことに、大きく心が揺らぐ。

でも、でも

「僕は巻き込まただけだし！ 君の事情は関係ないです！ 出来ない！」

「……そう。まあ、そうだよな」

思い切って言い放ってしまった、心臓が張り裂けんばかりにドキドキしていた。強気で吐き捨てたわけじゃなくて、何かもう色々と限界だった。言ってしまったから、かなり後悔が胸に押し寄せてきた。

トワは振り返らない。

「キミが戦えないって言うならしょうがない。ボクが戦う」

「な、トワ！？」

トワは、更に足を速めた。あつという間に大きく距離が開いてしまった。背中が小さくなっていく。

そしてトワは咆哮が聞こえてくる先、うらぶれた細道へ曲がっていき、その姿を消した。

「戦うって……それ、僕の身体じゃないですか」

僕は立ち止まり、一人呟いていた。

羞恥もあったけど、恐怖で足が竦んでいた。

戦うなんて、僕の辞書にはない言葉で。

産まれてからこの方、一度も僕は何かに立ち向かっていった経験がない。そんな僕が命をかけて戦う？　ありえない。

トワの言うことが正しければ、細道の先に恐ろしい何かがいるんだろう。実際身が竦むほどの恐ろしい獣の声は聞こえ続けているんだ。

そしておそらく十四歳から戦い続けている大宮煌は、自分の身体を犠牲にしてしまうほどの傷を負った。

血まみれになって死にかけていた大宮煌に、僕は遭遇してしまっただから。

「なんで……」

なんで死にかけてたのに。ひどい怪我を負ったのに。彼女は迷いなく、突き進めるんだ。

『ボクの使命の為に、今死ぬわけにはいかないんだ』

『……仕方ないじゃない』

『ボクが戦う』

トワ　煌の言葉、その意味。

ぎゅっと拳を固め、震えを無理矢理に追いつた。

「僕も大宮煌がわかってきた気がしますよ、畜生！」

僕は駆け出した。余計なことは考えないようにした。頭の中を真っ白にしなきゃ、動けない。

細道の入り口へと辿り着いたそのタイミングで

「うわっ！」

「きゃあっ」

トワの身体が、僕へとぶつかってきた。

トワ自身が体当たりをしてきたわけではなく、吹き飛ばされた身体をちょうど受け止めてしまったらしい。

僕は尻もちをついてしまい、お尻へ直にくらったアスファルトの固さに顔を歪めた。スカートってなんて不便なんだ。利点が一つもないじゃないか。

僕の上に乗りがかかっていたトワの身体がずるり、と横に倒れていく。

「大丈夫ですか!？」

「あれ、大宮さ、ん……」

トワは苦痛に顔を顰めつつ、僕を見上げてきた。ようやく僕の出現に気付いた様子だった。

「逃げなきゃ危ないよ?　ここはボクが止めるから早く行くんだ」

トワは片膝を立て、よろよと身を起こした。頬に走った浅い切り傷以外、怪我は見当たらない。何かに吹き飛ばされて、少し身体を痛めた程度のようなだった。

僕はとりあえず軽傷のトワを確認できて、安堵の息を漏らす。

そしてトワの肩越しに、細道の先を見た。

最初は犬がいるかと思ったけど、違う。

牙を剥き、陽が差さない薄闇の中で紅い眼を光らせる、影が具現化したようなもの。現実には存在するものには見えなかった。

犬に似ているが遥かに巨躯なソレがぐるぐると呻き、警戒した色で僕らを見つめている。

「イヌガタだから、動きが速くて厄介だ。でもこれ以上先に進ませるわけにはいかない」

トワはふらつきながらも、立ち上がった。

「ボクはこの街を守るんだ」

「ト……」

トワじゃない。

内向的で保守的な内倉永久は、こんな瞳を持っていない。

やっぱり僕の中にいるのは、煌。彼女は強い意志と、曲がらない信念を持つ女の子、なんだ。

「早く逃げて、大宮さん。ボクは慣れてるから、大丈夫」

振り返ってきたトワは、笑みを浮かべていた。

その顔を見て　僕の中で何かが弾けた。

無心になれ、無心になるんだ！

僕は震える足を無理やりに進め、トワの前に回りこんだ。

「僕の身体を返してもらっ前に君に死んでもらっちゃ困るんです！だから！」

トワの身を庇うように両手をひろげる。

「おおみやさ」

「煌は引っ込んでください！ 戦うのは僕です！」

僕は勢い任せにその名前を呼び、前だけを見た。

いつも受身で、流されるまま。この状況だって、結局は流された上でのことだけど。

女の子に守られて、逃げろって言われて。怪我までしてるのに。これ以上、見ないフリなんて出来ないじゃないか。やってやる。

戦うべき相手を強く睨みつけ。僕は手帳の中身を思い出す。

『一、装着しているペンダントを右手で強く握り締めましょう。』

僕はセーラー服の胸元へと右手を突っ込み、ペンダントを引き出した。

ふにやりと胸の感触が指先に触れ、頬が熱くなる。鼓動が高鳴る。取り出したペンダントは金色の星の形だった。それを強く握り締めた。

『二、精神集中。目を瞑って叫んでください。』「清掃開始！」 恥ずかしがってはいけません。大声でね。』

僕は瞼を下ろす。考えるのは、目の前の敵を討つことだけ。
恥を捨てろ、恥を捨てろ、恥を捨てろ。

「清掃開始！」

心のままに、大声をあげた。

『三、装着している衣服が全部脱げます。動揺しないようにね（笑）』

これを手帳に書いた奴は絶対面白がっているに違いない。僕は瞼の裏に感じる強い光を感じつつ、思う。

目は閉じたままにした。しかしわかる、衣服が、光とともに解けていく。

裸になって落ち着かない気分は、しかしすぐに違う衣服に包まれていくことで解消される。

衣服が全て身についたのを感じ取り、ようやく僕は瞼を上げた。

身につけている衣服は、なんとオレンジ色のつなぎの作業着。

ぎよつとしたが、なんとか冷静さを保つ。

たなびく髪色は、輝く黄金。その長い髪の毛は変身とともに高い位置でポニーテールに結ばれていた。

『四、ここからです！ 変身完了に必要な不可欠な言葉を！ はい絶叫！ 以下セリフ』

「美少女清掃員キラキラ、参上！」

もうやけくそで絶叫した。

『五、ポーズも忘れずに。以下ポーズ見本絵』

僕は手帳に書いてあったポーズに従い、右手を腰にあて、左手の人差し指を標的に向けて、腕を伸ばした。何故か右の片足を軽く上げて。このポーズに果たして意味はあるのか。そして、従う必要が……？

ああ、もうここまでできたんだ、なるようになれ！

「宙の星よ！　僕のもとに輝き、煌け！　街を汚す悪い子は、キラキラが片付けちゃうんだから！　メッだぞ！」

僕は笑顔でウインクを決めた。

高揚した気分、早鐘を打つ鼓動、朱色に染まる頬。今僕は、最高に輝いている！

一拍おいて。

……やっぱり死にたくなった。

第一話 変身 美少女清掃員？

細道の先に居る黒い獣は、今にも僕らに襲い掛からんと唸り声を上げている。

影に溶け込みそうな、黒く長い体毛。不気味にざわざわと揺れ、明瞭としない形。

はつきりとわかるのは僕らを見つめる紅い眼と、大型犬の二倍はありそうな巨軀。見られているだけで背筋が凍る。

そして僕の背中には、通りを歩く人が何あの子道端で恥ずかしいこと叫んでるの的な目が向けられているに違いない。振り返らずとも、わかる。

泣きたい。実際すでに半泣きだ。

「こんな街中で騒ぎを起こしたら警察とかに通報されるんじゃない？」

いつそ警察がこの獣を片付けてくれ。淡い希望を胸に、トワを振り返る。

トワはあっさりと首を振った。

「一般人には見えないんだってば。奴らは人目につかないところから現われる。この道から一步でも出しちゃいけない」

「出したらどうなるんですか？」

「ちゃんと前を見て！」

トワが厳しく言い放ってきた。

僕は慌てて前に向き直る。

獣が目前に迫って来ていた。

四本の足が地を蹴り、猛然と突っ込んできている！

「わぁあばー！」

僕の中では変身したら滅茶苦茶強くなつて、あっさり勝利を収めるという予定だったのに。特に力が湧き上がってくるとか勝手に身体が動いてくれるとかそんな都合のいい展開にはならなかった。

恐怖に身が竦んで、ただ立ち尽くすことしかできない。

「避けて！」

トワの言葉に、僕は獣の突進をかるうじて亀のように屈んで避けた。

トワが叫ばなかったら、動くことすらできずにいた。僕を飛び越えてしまった獣は足を止め、すぐさま凄まじい速さで振り返ってくる。

完全に僕を標的にしている赤い眼。今度こそ食いつかんとしているのか、牙を剥いて吠え、跳び上がった。

「どうしようどうしよう！」

僕はパニックで喚くことしかできない。

変身したのに！ 恥ずかしいこと叫んだのに！ いきなり殺されそうだ！

「キラキラビームって叫んで！ 両目に指をピースの形であてて！」

トワの言葉に、一瞬固まりかけた。

これ以上恥ずかしい言葉を叫べ、と言うのか？

眼前に迫る黒い何か。鋭い牙、飛び散る唾液。

「ああもう！ 知るかああ！ キラキラビームうう！」

自分の目からビーム出た。なんとありえない光景。

「ぐおうあつ」

獣がえび反り、壁へと自身の四肢を叩きつけた。

凄まじい光線に目が眩んだらしく、眼のあたりを掻きむしって呻き悶えている。

僕は乱れた呼気のまま、トワの方を必死の形相で仰ぐ。トワは緊迫した表情のまま、駆け寄ってきた。

「目からビーム出たんですけど！ 目からビームが！」

僕は立ち上がり、興奮したまま叫ぶ。涙声になっていた。

「そりや美少女戦士だもん、目からビームくらい出るよ」

もう嫌、この身体。

「でもキラキラビームは目くらましにしかないから、直接的なダメージにはなってない。立ち直る前に、武器を出すよ！」

「ぶ、武器ですと？」

「手帳の次のページに書いてあったんだけど、読まなかった？」

トワが鋭い声で問いかけてくる。

僕は相手に強く出られると、何か悪いことをしてしまったかのよ

うに小さくなってしまう。そんな自分がちょっと情けなくも思う。

「……変身のとこしかまだ読んでません……」

声が小さくなっていく。視線は自然に地面へと。

横でトワが嘆息したのが聞こえ、僕の身体がびくりと揺れた。

「いやそんなに怯えなくても責めないけど。ただ、武器を出さないと」

「ぐおおあああ！」

想像以上に獣の復活は早かった。僕は視線を慌てて獣へと戻す。超速で僕の至近距離に達してきた獣が大きく口を開け、吠えた。

「ひいいい！ もうダメですううー！」

僕は後ずさり、壁際に背をつけて凍りついてしまった。これ以上、逃げられない。

尖った牙が、僕の身体に喰らいつこうと迫り来る。襲い掛かる恐怖に、目を瞑ってしまった。

万事休す。

あの大きな牙に喰らいつかれ、喉元を搔つ切られるに違いない。すごく痛いんだ。昨夜助かったはずなのに、やっぱり死ぬかもしれないんだ。

「……あれ？」

直後にくる筈の痛みが……来ない。

恐る恐る、薄く眼を上げてみる。開けた眼が、そのまま大きく見

開いていく。

「っ、トワ!？」

トワが僕の前に立ちはだかっていた。

両腕を前に突き出して、狂ったようにもがき暴れる獣を必死に押さえ込んでいる。その右腕は、獣に噛み付かれていた。

「う、あああ！」

トワの口から痛みに堪えきれなかったのか、悲鳴が飛び出した。

トワの腕に食らいつき、肉に牙を食い込ませる、獣の荒い息遣いが眼前にある。

紅い眼が僕を見ている。

怖い。怖い……！

こんな恐怖に対峙したのは産まれて初めての経験で、ただただ、身体が動かない。頭が真っ白になる。

やっぱり僕は、戦えない……！

「大宮さん！　しっかりして！」

トワが叱咤の声をあげてきた。

「いきなり戦えなんて言ってゴメン。無理しなくていいから、逃げて……っ」

「でも、でもトワが……」

「大丈夫だから！　もう充分だから！」

痛い思いをしているのは、トワの方なのに。

トワは額に大粒の汗を浮かんでいる。唇を噛み、表情を歪めながらも、僕を仰いでくる。

その眼の中の光は、変わらずにあった。この子は戦える。たとえ自分の身体じゃなくても、ままならなくても、戦い続けられるんだ。その間にもトワの腕に獣の牙が深く、深く食い込んでいく。白い長袖シャツが血で赤く染まっていく。

僕は切れそうなくらい、ぐっと唇を噛んだ。

何を血迷っていたんだ。

この場に走ってきた時に、覚悟はもう決めたはずなのに。

大宮煌の身体になってしまった僕は、戦わなきゃいけないんだ。

「っ、よし！」

気合を入れなおす為に、僕は自身の頬をぴしやりと張った。真っ直ぐに前を見る。目は閉じない。

もう一度キラキラビームを出そうにも、間にトワがいる。閃光がトワにあたってしまうとも限らない。

迷ってる暇なんてない。

きよろきよろと周囲を見回してから、僕はその場をすり抜け、駆けた。

その間にも獣に押し掛かれたトワに牙が襲い掛かっている。

僕は姿勢を低くし、落ちている木の棒を拾い上げた。長いものじゃない。強度も少し湿り気を帯びて柔らかい。見渡す限りにはそんなものしか見つからなくて。

「うわああああ！」

棒を自分の身体の前に突き出して、僕は叫びながら獣へと突進した。

ほぼ体当たりだった。獣に当たった棒はぐにや、と簡単に折れ曲がってしまった。

ただ黒い体毛が固く、ざわざわと揺れる。トワと獣を引き剥がすことすら出来なかった。

全く損傷のない獣が、ただ害なすものに対して、振り返ってくる。

「お前の敵は、こっちです！」

僕はやけくそで言い放った。涙目だったし、声は震えていた。でも、戦うって決めて変身したんだ。トワを、守るんだ。

「大宮さん……」

「こんなことで僕の身体を死なすわけには　　うわあっ」

言葉の通じない獣は待つてくれない。標的を僕に変え、その四肢を跳躍させてきた。

覆い被さろうとする獣を前に、僕が持つのは折れ曲がった木の棒のみ。

それでも、もう目は閉じない。

頭の中にあるのは、ただ目の前の敵を討つことのみ。

目に力を込め、必死で真っ直ぐに獣を見据えた。

僕は戦うんだ！　もうこれ以上、負けたくないんだ！

その意思と共に、右手に持つ棒が、熱を帯びたのを感じた。光が溢れ、棒が伸びていく。

「え、えあ？」

獣がその光に慌てた様子で身を翻し、地面に降り立った。

僕から少し距離を開け、警戒の色を眼に宿している。

「なんなんだあ!？」

棒から放たれていた光が収束していく。全て消えると、棒は白く長い柄になっていた。

掲げているその先には、毛足が長く分厚い繊維の束がバサリと揺れる。

その繊維の束が揺れる度に、光の粒子がきらきらと周囲に舞い散った。

「武器、だ、よ」

立ち上がれない状態のトワが少し離れた場所で、言葉を発してきた。嬉しそうに口の端を吊り上げていた。

「すごいよキミ。何も教えてないのに、出せちゃった」

「これが、武器……？」

いや、これ、どう見たってモップじゃない？

見た目は完全に一般的なモップそのものだ。埃じゃなくて光が舞ってるけど。

しかし折れた棒よりはマシだ。僕はそのモップの毛先を獣へと向けた。

途端、力が身体の奥底から湧き上がってくるのを感じた。

「今、キレイにしてあげる」

僕は無意識に、その言葉を紡いでいた。身体の奥底から漲る力が、

勝手に自分の口を動かしていた。

自然と微笑みが浮かんだ。

獣へと駆ける足はどこまでも軽く、跳躍は凄まじい飛距離。

「キラキラモップー！」

やっぱり恥ずかしい言葉を叫び。

い竦む獣へとモップを思い切り叩きつけた。

「うぐああああ！」

獣が悲鳴を上げた。

光の粒子が獣を包み、その姿が掻き消えていく。

あっさりと、瞬時に獣は消えてしまった。そんな存在は最初からなかったように。

僕は地に降り立ち、荒い息と共にモップをおろす。

「清掃 完了」

僕は紡ぐ。陽が翳る細道は、日常の姿へと戻った。

第一話 変身 美少女清掃員？

「清掃 完了」

僕の唇が勝手にその言葉を、告げた。

張り詰めていた分、へなへな、と一気に力が抜けていく。今更に震えが戻ってきて、その場に腰をおろした。おろしたというか、腰が抜けた。

同時に柄を強く握り締めていたモップが消え、オレンジの作業着はセーラー服へと戻っていく。

黒色に戻った髪の毛がさり、と肩に落ちてきた。

「完璧だよ、大宮さん」

身体を引きずって、トワが歩み寄ってきた。

その手を差し伸べられる。

血まみれの右手。この子はなんでいつも血塗れなんだ、と僕は涙目で見上げた。

「思った通り、ボクの代わりに戦ってくれたね」

「だって仕方がないじゃないですか……あの場合、放っておくわけにもいかないです」

「言ったでしょう？ 優しすぎるんだよ、キミは。普通だったら逃げてると思う」

「僕だって逃げたかったです……」

「入れ替わったのがキミで、本当によかった」

トワに、無邪気な笑顔を向けられてしまった。今までで一番の、純粋な笑顔だった。

本当に嬉しそうにそんな風に言われると、頬が熱くなってしまう。僕なんかでも、少しは人を助けることができたのかな。

僕はトワに差し伸べられた手を取り、立ち上がった。

二人で大通りへと戻っていく。

大通りに出ると、人々の姿は全く変化なく日常世界に溶け込んでいた。

通りを歩く人はセーラー服の美少女と、腕が血塗れで薄汚れた男の子に少しだけ奇異の眼を向けつつも、関わり合いたくないと言わんばかりに目を背けた。早足で去って行く。

車道には車が幾台も走り、目の前を通り過ぎていく。空は冷たい空気で澄み渡った、快晴の薄い青色。

長閑な冬の休日だ。

「あんなことがあったのに……」

認めて欲しいわけじゃないけど、何か釈然とせずに僕は息を吐いた。

「ボクらが戦っているのは、暗部が形になったもの。そういう部分は誰しも目を背けるでしょう？ だからボクたちの清掃は、人々の目に留まらない」

トワの言葉を受け、僕はその横顔を見遣る。

「きら、……トワはなんでそんな戦いを？」

「まあ家業みたいなもの。行こうか、大宮さん」

トワは軽く言っ、歩き出した。その背中を慌てて追いかける。
トワの指先からぱたり、と血の雫が地面に落ちた。

あまりにも平然としているので忘れかけていたが、トワは獣に怪我を負わされている。長袖シャツの袖周辺はぐしゃぐしゃに破れ、まだ止まっていない血液がシャツの色を赤黒く染めている。

「ひどい怪我だ！　すぐに病院に行った方がいいです！」

「うん、行くよ」

「え？」

振り返ったトワは笑みを浮かべて、

「ボクの家、病院だから」

さらりと言っ、てのけた。

「なるほど」

どうやら行き先の変更はないらしい。

歩く道中、トワが簡単に大宮煌の裏家業だという清掃業のことを説明してくれた。

この街は大昔から、異形の怪物が産まれてしまう土地らしい。地球規模の磁場が関係しているのだ、負の感情の吹き溜まりだのどうたらこうたら。難しい話は僕には理解できなかった。非現実すぎて、

脳内が拒否反応を示したのかもしれない。

そして今日僕が実際にした異形の怪物。その怪物たちを総じて、リフューズと呼んでいるようだ。

^{リフューズ}異形に対抗するべく生み出されたのが『清掃員』。歴史は平安時代にまで遡るとか。大宮家の先祖も、清掃員として戦ってきたらしい。形を変え、人が変わり、ずっとそうやって清掃員は異形と戦ってきた……のだそうだ。

リフューズが現われた時には、生誕の咆哮をあげる。産まれ落とされたリフューズは赤ん坊と同様だ。しばらくはその場で産声をあげている状態で、動かない。その声を清掃員は聞き取って、変身。動き出す前のリフューズを清掃。それが清掃業の大まかな流れとなっている。

清掃員が生み出す武器じゃなければ、リフューズをキレイに片付けることはできない、とも聞いた。

「……理解できた？」

隣を歩くトワが聞いてくる。

僕は眉間の皺が寄ってしまったている状態で、うーん、と唸っていた。

「頭の中がパニックです」

「まあ、簡単に言えば敵と変身して戦う美少女清掃員。それが大宮煌ってこと。それだけを把握できてれば問題ないよ」

「……一つだけ気になることが。さっきも聞いたんですけど、あいつらが人目につくところに出てきたらどうなるんですか？」

僕が聞くと、トワの表情は厳しいものへと変わった。

「食べる」

「食べ、るって……何を？」

トワは深く息を吐き出した。憂いに満ちた表情で、僕の方を見つめてくる。

「さっきみたいなイヌの形のリフューズなら、現実世界にいる犬を見つけて、食べるんだ。ばくん、と一口で。そして、成り代わる」

「……まじですか」

「キミは気付いていないだけで、そうやって成り代わってしまったものが幾つもある。そして異形に成り代わられると、負の感情のみを持つモノになってしまうんだ」

「狂犬病になったみたいな感じですか？」

「まあ犬だけならそれだけですむだろうけどね」

そう言うからには、リフューズは犬の形だけではないんだろう。僕は自然と身震いを起こしていた。また戦わなければいけないのだろうか。

青ざめてしまっているのを、悟られてしまったらしい。トワが肩をすくめた。

「そんなに頻繁に現われるわけじゃないから安心して。今回は昨日の今日だったけど、大体一週間や一ヶ月に一回程度だよ。目的があるわけでもなく、そうやって唐突に産まれ落とされるゴミ屑みたい

なものを片付ける雑用だから、清掃員なんて言うんだろっね」

「そ、そうなんですか」

次にリフューズが現われる前に、なんとかして元の姿に戻ろう。
僕は決意をしっかりと固めた。

「しかもボクの受け持つ区画は比較的雑魚が多いし、慣れれば清掃も簡単だよ」

「受け持つ区画？」

「ついたよ、ここ」

トワが立ち止まり、告げた。話は中断となる。

僕もトワの視線を追って、その建物に目を留めた。

平屋造りの、個人経営の病院みたいだ。裏に一戸建ての家屋がくっついて建っていた。裏側が住居スペースなんだろう。

入り口に大宮医院、という看板が掲げられていた。通りかかった時に、何度も目にしたことがある。この病院のお世話になったことはないけれど。

大宮煌の家だったとは。しかも想像以上にご近所さんだったことに驚きを覚える。

その小さな病院の敷地内へと、トワが踏み込んでいく。

「あの、トワ、家族の人になんて言えば……」

やはりここは大宮煌を演じなくてはいけないんだろうか。僕は途端に怖気づき、もじもじと身体の前で指を絡ませた。

「そういえばボクもキミのご両親と会ってないんだけど、どういう事情で？」

逆にトワに聞き返されてしまった。

「僕の父親は一年前から海外勤務なんです。それに母親がついていつてて」

「ああ、ご健在なんだね。それはよかった。で、今はあの素敵なお姉さまと二人暮らしなわけだ」

「素敵かどうかは……美人は美人だと思いますけど……」

「キミの家の事情は把握したよ。これから内倉永久として生きていかなきゃいけないんだし、色々聞いておかないとね」

笑顔を向けてくるトワに、僕は憮然としてしまう。

「僕は元に戻るのを諦めてないです。絶対に、元に戻る方法はあるはず」

「まあまあ。ちなみに、ボクの家族だけど、両親共にいないんだ」

「え？」

簡単に言っただけのトワに、僕は驚きの目を向けていた。トワは笑顔のままだった。

「おばあちゃんと二人暮らしだから、そんなに気張らなくても大丈夫だよ。それに」

トワはコートのポケットから、さっと携帯電話を取り出した。

「全部話してあるし」

「な、なんですと!？」

トワが取り出した携帯電話は、僕のものじゃない。
ゴールドに光る携帯電話には、可愛らしく小さな星が連なったストラップがぶら下がっている。

「それってもしかして」

「うん。ボクの。昨夜入れ替わってすぐに預かっておいたんだ。仮にもボク、女の子だし。無断外泊はまずいでしょ?」

「で、男の声で連絡した、んですか？」

「うん」

当たり前のように頷くトワに、僕は言葉を失う。

突然知らない男から「大宮煌は内倉永久の家に泊まっていく」との言葉を電話口で受けた家族は……想像するだけでぞっとした。

もしかして内倉永久の身体、今度こそ殺されるのではないだろうか。

僕は脱力しつつ、更に重くなった身体を引きずるようにして、大宮医院の中へと踏み込んだ。今更後戻りもできない。

日曜日は休診日だ。受付カウンターにも、待合室の人も人気はない。トワは慣れた様子で院内を歩いて行く。

僕とトワは病院に入ってすぐの短い廊下の先、診察室の前へとた

どりついた。

トワが怪我をしていない方の左手で診察室のノブをまわす。

「こんにちは」

挨拶をしつつ、中へと入って行く。僕も恐る恐る、続いた。

中にいたのは 煌の言うとおり、おばあさんだった。

六十を越えているだろう、皺に覆われた顔と、小さく華奢にやせ細った身体。銀色の長い髪を軽く後ろで縛っている。

白衣と聴診器を身につけているので、大宮医院の医者は煌の祖母なんだろうと悟った。

「やあ煌。えーと、あんたが煌ってことで、いいんだね？」

あばあさんは、トワの方をじっと見つめて、呆れたように肩をすくめて言った。

「そっだよ、おばあちゃん」

「え？ え？」

見つめ合うトワとおばあさんの間に立ち、僕は二人を交互に見遣る。

「初めまして、内倉永久君。大宮煌の祖母で沙良と言います。沙良さんとも呼んでくれ」

おばあさん、沙良さんは立ち上がり、僕に向きなおって頭を下げてきた。

「え？　もしかして全部話したって、その、全部？」

「そうだよ。入れ替わったことも、全部話した」

トワの言葉に、僕はその場にへたり込みかけた。

なんてことだ。ま、まあ事情を知っている人間がいる方がやりやすいんだろうけど。

しかも殺されずに済むのは助かった。なんとか気を持ち直し、沙良さんへと向き直る。

「ほら座りな煌。手当てしてやるから」

トワは沙良さんの言葉を受け、向かい合った椅子に腰かけた。

沙良さんは老人とは思えない手さばきで、テキパキとトワの腕に治療を施していく。僕は感心しながらそれを見守っていた。

「煌は本当に何しでかすかわかったもんじゃないねえ。悪かったね、永久君。巻き込んでしまつて……大変だっただろ？」

視線は作業に専念しつつも、沙良さんが僕に向けてか、優しく声をかけてきた。

「あ、は、はい」

僕は胸が熱くなつてしまった。

第三者に同情的な言葉を言われ、今の僕がすごく辛い立場なのだと知ってもらつて……肩の力が抜けた。

熱くなつた目頭をゴシゴシと拭う。

昨夜から大変だったんだ、本当に。

血まみれの大宮煌にキスされて。死んだと思つたら女の子になつ

ちゃって。姉は壊れてるし。トイレにもまともに行けなくて。変な怪物は出てくるわ、変身はさせられるわ、戦わされるわ。

「おばあちゃんにだけは言われたくないな。ボク以上に何しでかすか分かったもんじゃない」

トワが不満気に言い放った。水を差され、僕は顔を上げる。

「ちなみにその胸の手帳の中身を書いたのは、おばあちゃんだよ」

「　　！　　あ、あなたも同類ですかああ！」

僕は思わず叫びが喉から出て、身体が後ずさる。

沙良さんは皺を更に深め、笑んでくる。

「これから頑張って一緒に戦っていこうな、永久君」

「　　うわああああ！」

僕は堪らずに絶叫。逃げ出そうと診察室のノブを掴み、その手にトワの手が覆いかぶさってきた。何その動きの速さ。

「もうキミは運命からは逃れられない」

「嫌だあああああ！」

僕は抗えない運命に、ただ絶叫するしかなかった。

トワは包帯を巻いてもらって一通りの治療を終えると、あっさり

と帰り支度を始めた。

「じゃあボクは自分の家に帰るから」

「いや、君の家はここだと思っんですけど！　おいていかないでください！」

「うーん？　じゃあここで一緒に暮らす？　おねえちゃん、なんて言うかなあ」

「帰りなさい！」

というわけでトワは診察室の入り口へと歩いて行き。
途中で思い立ったように、振り返ってきた。

「もしかしてまたリフューズが現われたら、ボクも駆けつけるから。携帯で連絡してくれてもいいし」

僕はぽいつと放り投げられた大宮煌の携帯電話をキャッチした。

「逃げないでね？」

「……わ、わかってます！」

思いつきり心を見透かされていたらしい。僕は顔を赤くしつつやけくそで頷く。

「じゃあ明日、学校でね」

学校、ですと……？

ばたん、と扉が閉じられた。

去って行ったトワが閉めた扉を見つめ、僕は呆然と立ち尽くしてしまった。

まだ問題はたくさん残っていると思い知る。これからが、本当の試験かもしれない。

ぽん、と肩を叩かれて振り返ると、沙良さんが立っていた。

「くさいな」

「な、失礼な！」

「清掃業してきたんだろ？ 清掃業の後は汚れを洗い清めない」と

「た、確かに昨日から入ってないですけど！ ふ、風呂は勘弁してくださいさあああ！」

心の準備がまだ、いや、そりゃいつかは入らなきゃいけないんだけど！

僕は半泣き状態で、抵抗のかいなく襟首をずるずると沙良さんに引かれ。

お決まりになった白い布を目に巻かれて、沙良さんに洗ってもらうという苦行を成し遂げた。

僕はお風呂に入れてもらったほかほかさっぱり気だるさで、大宮煌の自室へと入った。

「つ、疲れた……」

ついでに沙良さんは着替えもしてくれた。僕は完全に視界シャツ

トダウンだったけど、風呂も着替えも慣れるまでは恥ずかしすぎる。けど、私服姿になって気持ちは軽くなった。煌のベッドへと転がる。……いい匂いがした。

やっぱり大宮煌は可愛いし、鏡を見る度に鼓動が高鳴ってしまう。そんな大宮煌の身体に、僕はなまってしまっているんだ。うつとり、と顔が緩んでしまっていた。

「　っ違う違う！　しっかりしろ！　惑わされるな、大宮煌は悪魔だ！」

僕は頭を何度も振って、正気を取り戻す。

僕の手にはセーラー服の胸ポケットから取り出した手帳がある。何気なく、パラパラと手帳を開いてみた。

『武器の出し方。』

「あ」

そういえば、トワが言っていた。手帳に書いてある、と。そしてそれを書いたのは沙良さんだということも知れた。何者だ、あのおばあさんは。

『なんでもいいから手に持ってください。そして必要なのは敵に対して、負けないという強い気持ち。それに加えて愛と勇気があれば、あなたの手にあるものは美少女清掃員の武器になります。愛と勇氣だけが　さ！　規制』

「勇氣と……愛？」

僕は首を傾げつつ、疲れでものごとをうまく考えられない。

はたして。あの場に愛は、あつたのだろうか。

第二話 恋する 美少女清掃員？

「永久君は、恋しているかい？」

視界が遮断された暗闇世界の中で、ハスキーボイスが耳に届いて僕の鼓膜を震わせた。

低いけれど、濁りを感じさせない透き通った声。その声の持ち主である沙良さんからの問いかけに、自然に身体がギシ、と固くなっ
てしまった。

……は？ 恋？

沙良さんの言葉は、唐突だった。昨夜から何度も沙良さんに翻弄されている。それは朝がやってきても変わらない状況、らしい。

「こ、恋ですか……？」

僕はどもりながら聞き返す。

布地を腰まで引き上げられた感覚。ホックをパチンと留められた音。腿にスカートのプリーツが触れ、揺れる。

「うん、恋」

なんで、恋なんだろう。

そんな会話よりも重要なことはいくらでもあるはず。沙良さんは僕が何度問いただしても、大宮煌と内倉永久が入れ替わった方法や、元に戻る方法を教えてくれない。沙良さんならば長年美少女清掃員と関わってきたのだから、元に戻る方法を知っていると思う。けれど僕の詰問は全てののりくらりとかわされてしまうのだ。そして僕を動揺させることばかり言ってくる。

釈然としないながらも、聞かれてしまうと思考は自然に恋愛の方

向へとうつつていつてしまっていた。

妄想がホワホワと脳内を駆け巡っていた。

胸が熱くなり、頬が赤くなっていつてしまうのを自分でも感じた。

「ニヤニヤしすぎて気持ち悪い。美少女が台無しだ」

妄想終了。

「ああどうもすいませんでしたっどうせ僕は！」

すっぽりと服を頭から被せられて、言葉は遮られてしまった。

沙良さんに導かれるままに袖に通していく。脇のジッパーを上げる音がし、ぽん、と肩襟を叩かれた。

「はい、できたよ」

「……ありがとうございます」

僕は拗ねて唇を尖らせたまま、後頭部で固く結んだ縛り目を解く。白い布がはらり、と床に落ち、視界が開けた。

目の前の姿見に映ったのは、とてつもない美少女だ。

セーラー服を着て、腰まである黒髪の一部をリボンで縛っている。背後に美少女の祖母、沙良さんがにやりと笑みを浮かべて立っていた。

「恋する気持ちは人を強くする。美少女清掃員の心得だよ。手帳にも書いてあるから後で確認しときな」

「心得？」

「ま、永久君は恋してるみたいだから、いずれわかるさ。頑張りな、思春期」

「……女の子になって、何を頑張れと？」

大宮煌の身体と入れ替わって、三日目に突入した。

ついに本日、学校に行かなければならない日となってしまった。

登校拒否児の気持ちになった。

私生活の上では沙良さんという心強い味方が手に入った。風呂や着替えは沙良さんが手伝ってくれている。しかし学校には沙良さんのような味方はいない。トワは到底味方に思えないし。彼女の腹黒さはスペシャル級だ。

学校でどんな困難が待っているのか……想像もしたくない。

「いつてらっしゃい。頑張りな、永久君」

沙良さんが玄関まで送ってくれて、僕の肩を軽く叩いてきた。

玄関から外に出ると、風が冷たく突き刺さる。僕はセーラー服の上にコートをしっかりと着込み、カバンを片手に沙良さんを振り返る。

沙良さんは個人経営とはいえ、一人で病院を切り盛りしている。

事情は聞きづらいので聞いていないけど、大宮煌には両親がいない。沙良さんが一人で煌のことを育ててくれているらしい。

年齢を感じさせないパワフルな人だ。素直に感心はできるけど、油断ならない人物でもある。何せあの超腹黒女、大宮煌の祖母なのだ。何を腹に抱えているのかわからない。

「行ってきます」

沙良さんに向けて頭をさげ、重い足取りを前へと進めていく。目指すは、学校だ。

快晴の月曜日、僕らの通う星霜高校はここから余裕で徒歩圏内だ。僕は道すがら、吐き出した息が白くなって出ていくのを見つめた。

「行きたくない、なあ」

ぼつり、と呟きが漏れてしまう。憂いの眼のまま、前を見て、
どくん、と鼓動が跳ねた。

「……？」

思わず自分の胸を見下ろしてしまう。大きい。いや、そんなことはどうでもいい。なんで今、脈が乱れたのだろう。知っている人物だったから？

前を歩く人物に目が留まって。僕は先ほどの脈の乱れを忘れて、自然に頬が緩んでいくのを感じた。

軽くなった足取りのまま、駆けていく。

前を歩く人物の背中に向けて、鞆をぶつけていった。

「よっ！ 刹那！ 朝会うなんて珍しいね」

「……は？」

振り返った人物は怪訝そうに表情を歪めて、僕を見つめた。

三日前には会った筈なのに、遠い昔のことに思えた。ここ二日間が濃密すぎた所為だ。

彼、辻刹那は僕のクラスメイトで、親しい友人だ。もつとも僕が自然体でいられる相手に、気を使いあうこともない。タイプのには僕と刹那は真逆なんだけど、何故か気が合う。こんな風に軽口を叩

ける相手が少ない僕にとっては、刹那は心のオアシスと言ってもいい。

「相変わらずだるそうな奴だね！ 月曜日くらいもつと気合入れな
つて」

僕は刹那の横に並び、笑いかけた。鋭いけれど気だるそうな眼、僕よりも長身でスマートな体型、陽に透けると茶色く、柔らかそうな猫毛。そして端正な顔立ち。正直、悔しいくらいに刹那は美形だ。友人ながら横顔を見上げると羨ましい。……というか、あれ？ 何故か動悸が激しい。病気か？

「俺と大宮さんって、そんなに親しかったか？」

刹那は冷たい声を投げかけてきた。

「は？ 何を大宮さんなんて余所余所しいな。……大宮さん？ 大宮さああああん！？」

ずざざざーつと後ずさった。

それはもう、光速で。

「い、今のナシで！ 失礼しましたー！」

しまった。友人の顔を見て、完全に自分に戻ってしまった！ 今の僕は太宮煌なんだった。誰が見ても。何度目か知れない打ちひしがれに、アスファルトの地面を見おろし、大きく息を吐き出す。刹那は僕のその様子を少しだけ立ち止まって見ていたが、特に何も言わずに去っていった。

深く突っ込まれなくてよかった。刹那は他人に興味がないから、

あまり気にしていないだろうけど。それでも、今の僕の拳動は怪しすぎた。

「僕バカすぎる……」

「うん、大バカだね」

背後から浴びせられた鋭い声。僕の独り言に反応が返ってきて、再び鼓動が跳ねた。

振り向くと、無然とした表情のトワが立っていた。

「あれ、トワ。ここはトワの通学路じゃないですよ」

「キミがちゃんと学校に行くかどうか心配で回り道してきたんだ。そしたら、あのバカすぎる現場を見ちゃったわけだよ」

どうやら一部始終見られていたらしい。僕は頬が熱くなってしまった。

「そ、そりゃ、バカだったとは思いますが」

「バカだよ。大バカ」

トワは冷淡な物言いで、凍りつきそうな瞳を僕に向けた。実際凍りついた僕の横を、トワが大股に通り過ぎていく。

……少し首を傾げた。

トワはなんであんなにも怒ったんだろうか。トワが感情を露にしたのを、初めて見たかもしれない。

何にせよ、油断は禁物だ。先ほどのような気の緩みは許されない。僕は完璧美少女、大宮煌として振舞わねばいけないのだから。今か

ら行く学業の場は、戦場と思うくらいの気概で立ち向かわねばなるまい。

僕は手に持つ鞆をぎゅっと握り締め、気合を入れなおした。戦いは、これからだ。

そしてここは、戦場だ。

「おはよおおおお煌いい！」

「やつほ煌！ 今日の日本史のノートうつさせてー」

「大宮さん、おおおお、おはようございます！」

「きらりちゃん！ もー！ なんでそんなに可愛いのにー！」

「おはよ！ 今日煌なんか元気くない？ なんかあったの？ 吐け吐けー」

学校に辿り着き、校門を潜った途端にだ。

生徒たちが目まぐるしく声をかけてくる。何人に声をかけられたか分からない。思い知る。彼女、目茶苦茶に顔が広い。

僕はただ、愛想笑いを浮かべるしか出来ない。

トワは僕の少し前を歩いている。わかっていたけど全く助けられそうな気配はない。最終的にたくさんの女子生徒に囲まれて、集団となってしまった。僕は集団の中心に立たされて、俯きがちに歩いていく。

クラスメイトの女子ですら、まともに会話した経験がないのに。

確かにいつも大宮煌は女の子たちの中心にいたけども。僕がその役割を担えるとはとてもじゃないが、思えない。

唐突に、背後に立つ女子が僕の脇に腕を差し入れ「ひぎゃあああ
あああっ!？」

む、胸揉まれた。

布を切り裂いたような悲鳴を上げてしまった。

な、なな何で突然胸を揉まれたんだろうか。ドキドキしながら
振り返る。

「お、何その可愛い反応! 萌え研究?」

同じクラスの女子だった。なんかエロイ目してた。彼女のこんな
顔見たことない。

クラスメイトの女子はわきわきと身体の前で手を蠢かしている。
女子同士ってそんな激しいことしてるの? 普通なの?

目が潤むが、ぐつと堪える。ここで泣いてしまつては負けだ。こ
こは戦場なんだ!

「相変わらず巨乳なんだもん。柔らかくてつついっ触っちゃうんだ
よねー煌の胸」

「で、出来れば触らないでほしいです」

「そんなに赤面しちゃって別キャラでも開拓中なの? 何気にすっ
ごい可愛いんだけど。ねね、煌、一組の二ノ宮君の話聞いたー?」

ころころと表情を変える女の子たち。忙しい。

……正直、ついていけない。僕はこっそりため息を漏らした。

ようやく校門から正面玄関にたどり着き、下駄箱で室内履きに履
き替えた。その間も絶え間なく話しかけてくる女子たちに、空返事
を繰り返していた。

女の子って大変だ。改めて、大宮煌の身体でいることが苦痛に思

えてくる。

それでも、僕は今大宮煌なのだから。仕方ない。仕方ない、思
ってしまう自分の意思の弱さが悔しい。

僕は重い足取りで階段を上がり、廊下を歩いていく。

自分のクラスへと視線を遣ると

女子生徒が教室入り口から出てきた。

「あ」

「あ、おはよう煌ちゃん」

ほんわり、と柔らかく笑いかけてきた女の子。

僕は思わず立ち止まってしまっていた。

保田あさひ。やすだ彼女もクラスメイトだ。

雰囲気そのままの、ふわふわとした肩上で揺れる髪。身長は煌よ
りも低く、華奢だ。

彼女は煌と一緒にいるのをよく見かける。多分、大宮煌の一番親
しい友達だ。

僕自身は一度も会話を交わしたことがない。僕も保田さんも積極
的なタイプではないから。

保田さんがパタパタと室内履きの音を立て、小走りに近寄ってく
る。

僕の前に来ると、満面の笑顔を浮かべた。まるで花が開いたよう
な。

「お、おおおはよ」

「ふふ、どうしたの？ 今日の煌ちゃん、なんだか可愛いね」

「かわっかかかああ！」

駄目だ。

大宮煌として、普通に会話するべきなんだろうけど。うまく言葉が出てこない。息が詰まる。

まさか、こんな風に話す日がくるなんて想像してなかったんだ。

あさひは目立つ女の子じゃない。みんなの中心として輝く煌の横で、ひっそりと柔らかな笑顔を咲かせていたような女の子だ。僕の反応に軽く小首を傾げ、その大きな瞳で見上げてくる。実は彼女もすごく可愛らしいということは、あまり周囲に気付かれていないのだ、と思う。

「おはよう、大宮さん、保田さん」

硬直している僕とその前でニコニコしているあさひの元に、教室から出てきたトワが声をかけてきた。

「内倉君、おはよう」

あさひがトワへと向き直り、ぺこりと頭を下げた。

「早く教室に入らないと、ホームルーム始まっちゃうよ」

トワの言葉の通り、廊下にはもう殆ど生徒たちは残っていない。僕を囲んでいた女子たちも、いつの間にか教室の中に入って行ってしまっていた。

「あ、そうだね。ありがとう。行こう、煌ちゃん」

あさひの手が、僕へと伸びてきて。
ぎゅっと手を握られた。

「……っ」

僕はあまりの衝撃に目を瞑る。心臓がその右手に移動したのではないか、というほどに右手がばくばくと脈打っていた。

耐え切れずに、ばつと強く手を引いてしまった。

きよとん、としたあさひの顔。直視できず、俯く。

右手を胸のところで強く握り締める。熱い。顔が、手が、胸が。

「煌ちゃん？」

「ご、ごめん先に行つて。ちょっと、トイレ」

「……うん」

あさひが怪訝そうな表情を浮かべた後に頷き、ぱたぱたと教室へ入っていくのが視界の端に映った。

「キミ、そんな状態で大宮煌としてやっていけるの？」

まだ残っていたトワが呆れたように声をかけてくる。

「僕は太宮煌じゃありません！」

僕はトワをきつと睨み、言い放ってしまった。

昂ぶった感情のまま、トワへと歩み寄る。こんな風に他人に怒りをぶつけてしまったのは、初めてかもしれない。それでも、止まらなかった。

なんで、なんでなんで僕のフリして話しかけてきたんだ。

それは僕の声なのに。僕の身体なのに。
僕は太宮煌じゃなくて、内倉永久なのに。

「僕は太宮煌として生活することを認めたわけじゃないです！ そりゃ、確かに現状はそうするしかないけど、でも……」

勢いがあつたはずの言葉尻が窄んでいく。こういう場面で強気に出れない自分を呪う。

トワは表情一つ変えないで、肩をすくめた。

「でも、何？」

廊下に予鈴が鳴り響く。

そろそろ教師がやってくる。僕は教室の方を見て、息を深く吐き出した。

「……もういいです。教室入ろう」

どうにもならないのは解っている。結局トワに中途半端にぶつけた感情を自分でもどうすることもできず、拗ねたような言葉だけが出た。

僕はトワを直視できないまま、教室へと足を進める。

「あさひのことが好きなんだね」

僕の背中にかけられた、トワの言葉。特に感情がこもっていたわけじゃない。でも、無性に腹立ちを覚えた。

『永久君は、恋しているかい？』

ああ、そうだよ。

僕はクラスメイトの保田あさひにどうしようもなく恋している。

一度も会話を交わしたことなんかない、一方的な片想いだ。

さっきの会話が、内倉永久と保田あさひの初めての会話だったんだ。

僕はトワを振り返ることもせずに、教室へと入って行った。

第二話 恋する 美少女清掃員？

休み時間に入る度に、たくさんのクラスメイトが僕の元へとやってきた。大宮煌は常に生徒たちに囲まれている人気者だ。

女子たちにはいつもと少し違うことを、不審に思われたりもした。今日は体調が優れない、とかなんとか誤魔化して乗り越えた。

今日だけならこの言い訳でも大丈夫だろうけど、日に日に大宮煌が別人のようになってしまったことを、きつと周囲は勘付いてしまふ。

「……はあ」

やっぱり僕は太宮煌になりきれない。一刻も早く元の身体に戻る方法を探すべきだ。

休み時間を報せる憂鬱な鐘の音が聞こえてくる。

改めて、絶対に元に戻ってみせる、と心の底から思った。自然と俯いてしまっていた顔を上げ、決意を眼に込めた。

「太宮太宮！」

また来たよ。今日朝から一番うつとおしい奴が。笑顔で手を振りながら、僕の座る席へと走り寄ってきている。

学園のアイドル太宮煌は、もちろん男子からの人気も確たるものだ。

煌になってみて知った。他人からの恋慕の眼差しが、こんなに分かりやすいものだったとは。

煌はそんな飢えたサルたちにも、わけ隔てなく相手をしてきたんだ。笑顔と軽口、頼りになる言動。太宮煌を意識して演じてみようとしても、やはり僕なんか演じられる人物ではない。ただ愛想笑

いを浮かべるくらいが関の山だ。

「なんですか、友枝君？」

「球技大会が近いことだし、やっぱり放課後に俺たち二人で残って色々話し合うべきじゃないかなあ」

友枝ともえだいち壱はこのクラスの副委員長だ。つまりは委員長の大宮煌のパートナーだ。話しかけられるのは、仕方ないことなんだけど。

「放課後に二人きり。人気のない教室。偶然触れてしまった手を、恥らう大宮」

「妄想は口にすべきじゃないと思いますけど……」

「きゃ、ごめんなさい友枝君！ ちらりと俺を盗み見る大宮と目が合って、俺は自然に大宮の頬に触れていた」

聞いてない。

「そして二人は自然に顔を近付けていき、唇が触れ……ふへへへへ」

友枝は男くささを感じさせない、可愛らしく人懐こい笑顔が特徴的だ。気さくなお調子者タイプで、話はしやすそうだ。

母性本能をくすぐる可愛い容姿で、クラスの女子からの人気も高い。本日の女子からの情報収集結果。ちなみに内倉永久は一度も話題にのぼらなかった。悲しくなんかないやい。

内倉永久の時の僕は、友枝とほぼ接点がなかった。友枝はきつと僕の存在すら知らないに違いない。虚しくなんかないやい。

トワをちらり、と横目で見遣ってみた。机に本をたてて読書をし

ていた。苦勞がなさそうで羨ましい光景だ。

刹那は机に突っ伏して寝ている。いつもの光景だ。

保田さんは……一生懸命机に向かって書き物をしている。そういえば彼女、休み時間はいつも何か書いている。僕ぐらいしか気付いていないだろうけど。

「顔が赤いぜ大宮。そんなに俺と居残るのが嬉しいのかよ？ 参ったなあ、こりや参った参った」

「……」

「もう付き合っしかないだろ俺たち」

友枝が大宮煌を好きなのは、ここ数時間でよく分かった。けどこの場合、僕は一体どう反応すればいいのだ。迷ってる間に両手をがっしりと握られてしまった。

「な、何ですか？ や、やめてください」

「ああっ今日の大宮はなんつーか奥ゆかしさが堪えないんですけど！ なんか抱き締めて頬ずりしたくなる小動物みたいだ！」

こいつ死ねばいいのに。

僕には珍しく負の感情が胸を渦巻いた。頬を引き攣らせている僕に、更に顔を近づけてくる友枝。

「ひいっ」

思わず小さな悲鳴がこぼれた。涙が目の端に浮かんでしまっ

「可愛すぎるぜ大　嫌がつてるだろうっとおしいんだよ変態が」

がす。友枝の頭に本の角が刺さった。

僕は大きく目を見張る。

友枝の後ろに立って恐ろしい言葉を発したのは、トワだった。いつの間に來たんだ。

クラスメイトたちも、予想外の闖入者にざわり、と騒ぎはじめ。一気に注目が集まった。

「い、痛いだろうがあっ！　何すんだよお前誰だ！」

後頭部をおさえ、怒りの表情を露にしている友枝がトワへと振り返った。

僕はアワアワして言葉も出てこない。口をぱくぱくするしかない。

何考えてるんだ、トワ。

トワは軽蔑の眼差しで友枝を見下ろしている。

「ボクは内倉永久だ。お前がさっきからベタベタ触ってる大宮さんの代弁者だ。女の子が嫌がつてる態度くらい理解しろ」

どこまでも強気な上から目線。内倉永久にこんな顔が出来るなんて、僕自身知らなかった。

「はあ！？　なんでお前が大宮の代弁者なんだよ！？　関係ないやつは引っ込んで……なさいよ？」

友枝は顔を赤くしてトワに向けて言いながら、後ずさっていた。迫力で完全に負けているのは誰しも分かる。トワ、怖い。ライオ

ン対肉のようだ。

「キミごときがボクにたてつくのかい？ この内倉永久に？」

「な、な、なんだよそんなに怒らなくてもいいだろ？ ちょっと大宮に触ったくらいで」

「黙れ変態。大宮さんに土下座して謝れ」

なんでそこまでさせる。

結局、どこまでも情けない顔になってしまった友枝が、僕に向けて頭を下げてきた。

そして教室の入り口まで逃げていき、遠くから僕たちを振り返ってきた。

「くそう覚えてろよ内倉！ 仕返ししてやるからなあっ！」

まさに負け犬の遠吠え状態で、トワに向けて言い放ってから逃げていった。

僕の前には腕を組んで立っているトワがいる。僕はずっと座ったままで、目が点になってた。どうしてこうなった。

「ハッ、雑魚が！」

鼻で笑ってるよこの人誰だよもう。

「本性を隠さなくていいのって楽だなあ」

清々しい笑顔のトワ。クラスメイトたちから拍手が起こった。初めて内倉永久が注目され、輝いた瞬間だった。

……心の底から、元に戻りたくなかった。

やっと一日の半分を消化し、昼休みに突入した。

クラスメイトたちが各々、昼食準備を始めている。

机を引っ張り、くつつけてお弁当をひろげている女子グループたち。学食へと行く生徒や、購買部へと走る生徒たちを僕は横目で見届けた。

そういえば、大宮煌はいつもどうやって昼食を食べてるんだ？

記憶を掘り返してみるが、思い当たらない。沙良さんにお弁当を渡されたので、ここで食べればいいのだろうか。

僕自身は両親不在の為、毎日購買部へと走っている。だから昼食時は、周囲に気を配っている余裕がないのだ。

気になってトワの席へ視線を遣ると、驚いたことにカバンからお弁当を取り出していた。

それを持って、トワが僕の席へと近付いてくる。

「大宮さん、行こうか」

ごくごく軽い口調でトワが言ってきた。

「え？ え？」

僕はまた目が点に。口も半開き状態だ。

教室内も再びざわめく。いつの間にランチタイムと一緒に過ごすほど親しい関係になったのだ、とても思ってるんだろう。

「ど、どこに行くんですか？」

「中庭。いつもそこで食べてるんだよね、大宮さん。今日は僕もお

弁当を作ってきたんだ」

「あ、そうなんですか……」

僕はカバンからお弁当を取り出した。トワの言葉に従うなら、僕は中庭でお弁当を食べるべきなんだろう。椅子を引いて立ち上がり、巾着に入ったお弁当を胸に抱えた。

クラスメイトたちの視線が痛い。変に関係を勘繰られている気がしてならない。

「煌ちゃん、行こ」

「うわあああつ」

隣に保田さんが立っていた。すごく驚いた。

僕は仰け反ってお弁当を落としそうになって、慌てて持ち直す。

「え、ええと、保田さんも一緒ですか……？」

保田さんが僕の言葉を受けて、ぷくつと頬を膨らませた。あ、可愛い。

「いつも一緒だよ？ お昼休みは一緒に過ごす約束だもん。忘れちゃったの？ それに保田さんって何？」

保田さんに軽く睨まれて、僕はばたばたと大袈裟な動きで身体の前で手を振った。

しまった、弁当シャッフル。中身が死んだかもしれない。でも今はそんなことより、保田さんに睨まれている状況の方がおおごとだ。

「ごめんなさいっちょ、ちょっと今日は熱でもある、のかなあ」

「煌ちゃん具合悪いの?」

一歩近付いてきたあさひが自然な動きで腕を伸ばし、小さな手の平をおでこにあててきた。

「にゃあ」

変な声が出た。

もう僕、正常な思考回路じゃない。なんだこれ、なんだこれ。

「ちょっと熱いかなあ」

「大丈夫大丈夫大丈夫」

ぎくしゃくと保田さんから離れる。その動きのまま教室の入り口へと向かった。

「右手と右足一緒に出てるよ大宮さん」

のんびりとしたトワの声が背中にかかってきた。僕は振り向くともできないまま、早足で歩いて行く。

廊下は出ると、ひんやりと冷たい空気を感じた。頬がどうしようもなく火照っていたので、逆に助かった。

僕の後ろから、トワと保田さんがついてきている気配を感じる。並んで歩くんなんて、緊張しすぎて出来ない。中庭に行く為に、急いで階段へと向かう。

「今日は内倉君も一緒に食べるんだね」

保田さんがトワへと話しかけた声が届いて、僕の耳がぴくりと反応する。

「あさひと一緒に食べたかったんだ」

「あさひ……」

僕は堪らずにトワと保田さんを振り返った。いきなり呼び捨て！？

「あ、ごめんね。突然呼び捨てなんて失礼だよね」

トワが嘘臭い笑顔を浮かべて言っている。

保田さんは少し目を丸くしていたが、すぐにトワの笑顔につられてか、ほんのり笑顔になった。ニコニコニコ。ほのぼのとした雰囲気だ。二人の間に流れている。保田さんの魅力は、やっぱりこの柔らかい笑顔だ。いつ見ても、心が温かくなる。

「ううん、全然気にしないよ。内倉君ってすごく親しみやすい人だったんだね、なんか嬉しい」

「ボクのことトワって呼んでくれていいよ」

「え、あ、うん。じゃあトワ君って呼ぶね」

二人のやり取りを聞き、温かくなっていたはずの心が冷えていく。僕はぐつと唇を噛んでしまっていた。

保田さんに永久君と呼ばれるのは嬉しい。けどそれが自分でないことが、悔しい。

僕が訴えたところでトワは飄々としているに違いない。もしやわ

ざとか。休み時間の友枝とのやり取りといい、今の保田さんのやり取りといい、僕に嫌がらせをしているように思えるのは、僕の被害妄想なんだろうか。

僕は腹に力を入れ、もやもやした感情を追い払う。歩みを再開させた。それでも乱れた気持ち、更に足を速めている。

廊下の曲がり角を、前方確認もせずに折れた。

「うわぁっ」

思いつきり、誰かと衝突してしまった。僕は尻もちをついてしまっ
う。

ぶつけた鼻をおさえながら、顔を上げると。

あ、刹那じゃないか。

「ちゃんと前見て歩けよ。けっこう間抜けだな」

僕がぶつかっても全く微動だにしなかった刹那は、僕の二の腕を掴んできた。

ひよい、と身体を助け起こしてくれた。

「あ、ありがとう刹那」

「どーいたしました」

刹那は僕の方を一瞥だけして、その横をあつさりと通り過ぎていった。僕の表情は翳ってしまっていた。刹那にとって今の僕はただのクラスメイトなんだ。仕方ないんだろうけど、胸にぽっかりと穴が開いた気分になった。

そして刹那はトワの前に立った。

「こんなところにいたか永久。学食行くぞ」

刹那が言い、トワの腕をガシッと掴んだ。トワが目を丸くしている。

「え、でもボク今日はお弁当……」

「知るか。俺は今日学食なんだ。学食で弁当食え」

「でも、あの、大宮さんたちと」

「何ごちゃごちゃ言ってるんだ。腹減ったから早くしろ」

刹那は腕を掴んだまま、ずるずると無理矢理にトワを引きずって行ってしまった。

遠くなっていくトワの頬が、赤くなっているのを見て。

「あ」

ようやく気付いた。ああ、そうか。トワはやっぱり僕に仕返しをしていたんだ。

刹那を見た時の、大宮煌の心臓の反応の意味。僕が刹那と会話や接触をする度に、トワは僕と同じ心境になっていたんだ。

僕が大宮煌の友達、保田あさひに恋をしてるように、

大宮煌は僕の友達、辻刹那に恋をしてるんだ。

「なんて複雑な……」

思わず僕の口から、呟きが漏れていた。

「トワ君、行っちゃったね」

「あ、うん」

僕は隣に立つ保田さんを見る。

「じゃあ今日も二人でご飯食べようね」

ニコッと微笑みかけられて。

幸せすぎて、死んでしまいかもしれない。
不幸すぎて、泣いてしまいかもしれない。

第二話 恋する 美少女清掃員？

「美少女清掃員キラキラ、参上！」

金色の髪をたなびかせ、僕は叫ぶ。

「宙の星よ！ 僕のもとに輝き、煌け！ 街を汚す悪い子は、キラキラが片付けちゃうんだから！」

オレンジ色の作業着姿、引き攣った微笑、ポージングしながらウインク。

「メツだぞ！」

決まった。

夕刻、閑静な住宅街一帯は沈みゆく陽で見渡す限り一面が真っ赤に染まっている。

僕が立っているのは、住宅に囲まれた人気のない空き地。その場所では美少女が、ど派手な作業着姿で何か喚いてポーズを決めている異様な光景は繰り広げられていた。誰かに見られていないことを切に願う。一般人に僕の対峙している異形の化け物は見えないから、完全に僕の一人芝居状態だ。

僕はその場に落ちていた枯れ枝を拾いあげる。握り締めた枯れ枝は、長い鉄製の柄へと変化していく。何層にも重なった白くフサフサした毛束から、光の粒子を散りばめ、僕は駆ける。

「今、キレイにしてあげる」

不敵な笑みと共に言い放ち、一氣に対象物へとモップを振り下ろ

した。

「キラキラモップー！」

小さな異形は、^{リフューズ}悲鳴を上げる間もなく、消え去った。
空き地に静寂が戻る。寒々とした風が吹きぬけていく。

「清掃　完了」

その言葉を紡ぐと、僕の姿は作業着からセーラー服へと瞬間で様変わった。ポニーテールに束ねられていた輝く金色だった髪は黒に戻り、さらりとこぼれ落ちていく。

ほっと息をついた。失敗すること、危ない目に遭うこともなく全部終わった。

その僕の耳に、パチパチ、と空々しい拍手が聞こえてきた。僕はじと目で振り返る。

「美少女清掃員の姿がすごく板についてきたよ、大宮さん」

「……全っ然嬉しくないです！」

僕が上目遣いで睨む先には、トワが立っている。

そして僕は、相も変わらず大宮煌だ。

この姿になって一週間経ってしまった。僕は未だに内倉永久の身体に戻れず、大宮煌のままだった。元に戻る手段を探そうにも、手がかり一つない絶望的状况。加えて僕と入れ替わったトワは、元に戻ろうと思っていない。内倉永久としての生活を堪能している。

僕は美少女姿のまま、大きく溜め息を漏らす。

今清掃した異形は、ネズミの形だった。ネズミガタとでも言うのだろうか。いちいち恥ずかしいセリフを叫ばずとも、すぐに倒せて

しまいそうなもののに。

けれど、安心した面もある。美少女清掃員になって二度目になるリフューズの産声を聞き、僕は戦慄した。トワに引きずられて、強制的にこの場に連れてこられた時はどうやって逃げようかとばかり考えていたんだけど。

リフューズとひとくくりに呼んでいても種類は様々なようだ。空き地にいたリフューズはトワが言っていた通りの雑魚だった。小さくて攻撃性もほぼ備えていないようなリフューズだったら、僕にだって清掃できる。

この調子なら、清掃業を続けてもいいか……

「いやいやいやダメです！ 絶対に元に戻るんです僕は！」

強く頭を振って、恐ろしい考えを振り払う。

「さ、行こうか大宮さん」

「……うう、はい……」

トワが僕の気持ちなど全く素知らぬ態度で背を向けて、歩き出す。僕は訴えることもできずに、小走りにトワを追っていく。僕らの主従関係は完璧に構築されつつあった。

今は日課となっている、トワの家へと向かう途中なのだった。それを思い出して、僕の心は更にずしり、と重くなっていった。

トワの家に到着した。

僕はたたきで靴を脱ぎ、きつちりと揃えて置いた。

「お邪魔します」

ぺこり。

いや待て。ここは元々僕の家だ。何故自分の家でこんな恐縮しているんだ僕は。

「ただいまー」

横に立つトワは軽く言つて、家へと上がっていく。

僕は追いかける形で家の中へと踏み込んだ。

「いらつしゃい、煌ちゃん」

リビングから僕の姉である久遠が顔をのぞかせ、優しげな微笑を見せた。姉はいつも大人びたシックな服装だ。容姿だけは可憐で清楚なお嬢様然としている。

「今日は少し遅かったのね」

「こ、こんにちは久遠さん」

僕は立ち止まって、姉へと頭を下げる。

「寒かったでしょう？ ちょっと一緒にお茶でも飲みましょうか」

「は、はい」

姉に手招きされ、僕はリビングへと入っていく。トワは久遠に「ただいま」とだけ声をかけて、二階の自室へと上がって行ってしまった。容赦なく人質として置いていかれた。

大学生の姉はけっこうな暇人で、大抵家にいる。そして大宮煌で

ある僕は、訪問の度に彼女に捕まってしまう。ここ数日でのお決まりパターンとなっていた。

「紅茶でよかった？ それともコーヒー？」

「あ、紅茶で大丈夫、です」

キッチンの方へと引っ込んでいった姉を待つ為に、僕はリビングに敷かれた絨毯の上にぺたりと座る。

室内は暖房が効いていて暖かったので、着ていたコートを脱いだ。

落ち着かない気持ちで待っていると、トレイを手に持って姉が戻ってきた。

「いつもありがとう、煌ちゃん」

姉がローテーブルの上に湯気の立つ紅茶カップと、スコーンを並べながら声をかけてくる。

「いえいえ、そんな……」

「煌ちゃんが勉強を見てくれてるおかげね。今回の模試、すごく点数がよかったの」

「そ、そうですか。それは良かったです」

僕は視線を合わせることができず、愛想笑いをなんとか浮かべた。
……本当は逆なだけど。

毎日毎日僕がこの家に通っているのは、トワに勉強を見てもらう為、だ。しかし姉には学年首位の煌がトワに勉強を教えている、と

いう風に説明してある。姉は煌に感謝し、こうしてお茶を振舞ってくれる、というわけだ。

僕自身、成績は中の上といったところ。それなりに頑張ればいい成績も収められるのだけど、大宮煌の実力には到底叶わない。けど僕は今年首位が当たり前の大宮煌なので、トワに毎日毎日厳しく勉強を叩き込まれている現状だ。

居心地が悪い。姉に僕が永久だとばれるのではないかと、いつもこの時間はヒヤヒヤとしてしまう。

茶葉の香ばしい匂いが鼻腔を刺激した。僕は気持ちを落ち着かせる為にカップをそろりと持ち上げ、熱い液体を口へと傾けた。

「でもね、永久ね、最近別人みたいなの」

「ぶばあああつ」

「煌ちゃん大丈夫？」

紅茶を軽く嘔いてしまつて、鼻先に熱湯をくらつた。痛かった。僕は紅茶カップをおろす。危険だ、今紅茶を飲むのは危険行為すぎる。

「大丈夫です。そ、それよりも別人みたい、というത്？」

「つまらないの」

「……つまらない？」

僕がその言葉を繰り返すと、久遠は憂いの満ちた瞳を伏し目がちにし、ため息を漏らした。

「最近の永久、飄々としすぎてて、全っ然虐めたいと思えないの。なんていうか、同属の匂いを感じるわ。前はあんなに可愛らしくて反応の面白い子だったのに……虐める度にゾクゾクと快感に打ち震えたものだわ」

「さ、さいですかー」

どう反応すればいいんだ。僕は複雑な心境のまま、明後日の方向を見る。

「永久、もしかして大人になっちゃったのかしら」

「大人になった？」

「ねえ煌ちゃん。まさか永久とかがわしい行為なんて、してないわよね……？」

久遠が唐突に手をにゅうと伸ばし、僕の肩を掴んできた。僕の肩に細い指先が食い込む。

「いかがわしい行為って……はうっ！？ 大人になったってぞ、そういう意味ですかあああ！？」

「まさかまさか、アイツに押し倒されたりとか、脱がされたりとか、とか、×××とか……」

姉が際どい眩きを漏らしつつも、感情が昂ぶってきたのか掴んでいた肩を強く押してくる。

「く、久遠さあん！？」

僕はどさり、と絨毯の上に押し倒されてしまっていた。

「こんなことされたの……？」

上から見下ろしてくる姉の深い眼。サラ、と肩上で揺れる髪。我が姉ながら、凄まじく、怖い。そして凄まじく、美しい。

「いやいやいや！ そんなこと絶対にありませんから！ ありえない！」

「本当に？ こうして、脱がされたりとか、してない？」

「ひよえああああっ」

セーラー服の襟ボタンをぱちん、と外され、肩をむき出しにされてしまった。

「おねえちゃん落ち着いて！」

「こんな風に、触られたりとか……」

「ふわああああ！」

姉は言葉のまま、指先で鎖骨を撫でてくる。

僕はびくつと身体が震えてしまい、ずっと前から潤んでいた瞳で、久遠を見上げた。

「煌ちゃん、可愛いわ……こういう反応が見たいのよ、私は」

姉の恍惚とした表情に、僕はただひたすらに首を振る。

「やめてくださいやめてくださいいい」

「やめない」

姉はくすり、と口の端を上げた。背筋にゾゾ、と寒気が走った。Sの血覚醒モード突入だ！完全に我を失っている！

僕は半ベソ状態でブルブルと震え、抵抗すら出来ずに少しずつ服を脱がされていく。

助けて助けて助けてトワあああ！！

露になった肌に久遠が滑らかに指を滑らし、首筋に舌を這わせ

携帯電話から、メールの着信音が部屋内に響き渡った。僕のポケットのポケットからだ。

「あ、メールです！メールううあああやっほおおおい！」

助かった！救世主！

僕はすぐ様久遠を押しつけ、ばたばたと両手両足で這いながらコート元へと移動。ポケットから携帯電話を取り出した。

遠くで姉が舌打ちしてた。

ほっと胸を撫で下ろし、二つ折りになった携帯電話を開き、メール確認画面を出した。

『煌ちゃんこんにちは。明日お休みだし、一緒にお出かけしませんか？近くに出来た水族館に行ってみようよ』

それは、保田さんからのメールだった。

液晶画面を見つめたまま、固まる。

「一緒に、お出かけ……？」

保田さんと一緒にお出かけって……つまり、デート？

想像しただけで胸が躍る。しかし。僕は太宮煌として、保田さんと向き合わねばならない。一週間経ったというのに、未だに保田さんと友達らしく振舞えていない。

どうしよう、どうしよう。携帯電話を持ったままでうるたえてい

ると。
階段から降りてきたらしいトワが、リビングの扉を開け、顔をのぞかせた。

「遅いよいつまで待たせるの大宮さん、って……何、その格好？」

そっぴいえは僕、脱がされかけている状態のままだった。

第二話 恋する 美少女清掃員？

土曜日、僕は待ち合わせした駅前広場の噴水前で佇んでいた。

待ち人はまだ来ていない。きよろきよろと落ち着きなく周囲に視線を巡らす。街の一番栄えている部分だけあって、田舎街ながらも往来は活気付いている。晴れ空でも日々寒さは厳しくなっているけど、この場所は人いきれで寒さも感じない程だ。

そして、先ほどから何度ナンパにあっているのか数えるのも億劫になる。

下心丸出しの輩ども、大宮煌はそんなに軽い女の子じゃないんだ馬鹿め。……なんてはつきり言えれば苦労はないんだけど。

「ねえねえ、遊びに行こうよ。いいじゃんいいじゃん」

チャラチャラしてる二人組の男たちが、しつこく僕の周囲をぐるぐるまわっている。なんだその動き。犬か。

「だから、あの、友達と待ち合わせてるんです」

「女の子の友達だろ？　ちょうど俺たちも二人だし、その子も一緒に遊ぼうよ」

僕はムツと口を曲げる。保田さんも一緒に？　ますます冗談じゃない。

ああでも。どうやったら追い払うことが出来るんだ。しつこい奴らを前に、僕は必死で上目遣いに睨み上げる。

「うわあっそんな可愛い顔して見つめられたら、ますますどっかに連れ込みたくなるぜえ」

見つめてるんじゃないなくて睨んでるんだ！

なんで僕は何をしても弱そうになっちゃうんだ。こういう時本物の大宮煌だったら、上手く対処できるに違いない。トワを置いてきてしまったことを、少し後悔した。

……トワに邪魔されなくなかった、なんていう理由で、僕は今日の保田さんとのデート（？）をトワに内緒にしている。

トワに話したら、一緒に行くとか言い出しかねない。そりゃ保田さんと二人きりなのは緊張するけど、トワが間に入ってきてかき回されるよりはマシだ。

僕の身体じゃないのに、内緒で行動していることに多少の後ろめたさを感じてはいるけど。

トワだって、僕の身体で好き勝手な行動ばかりしているんだ。これぐらい許されるよ、うん。

「こんなところにいたのか大宮！」

唐突に後ろから肩を抱かれ、僕は全身を総毛立たせた。

「ひいひいひい！ 黙っててごめんなさい許してくださいいい！！」

僕は青ざめ、震えながら振り返る。

肩を抱いてきたのは、トワじゃなかった。よりもよって、友枝だった。なんでこんなところに。

「何謝ってるんだよ大宮！ 遅れてきたのは俺の方だぜ！ 気にするなっつて」

「え？ え？」

「で、キミたち、俺の彼女になんか用？」

僕は友枝に肩を抱かれた状態で、固まる。ナンパ男たちに向けて何言ってるんだこいつは。僕は友枝の彼女になった覚えなんてない。友枝の言葉に、僕たちの前にいたナンパ男たちが舌打ちして、悪態をつきながら去っていった。

「それにしても偶然こんなところで会うとは運命を感じるな俺たち。お礼はチューでいいからな、大宮」

僕は友枝の方を見る。唇を突き出してきてたから、心の中で抹殺しておいた。

しかしそうか、友枝は僕を助けてくれたんだと悟る。こいつでも役に立つことがあるらしい。

僕は一息つき、友枝から離れる。見た目はナンパ男たちと変わらないような服装だ。オシャレだけど、軽々しい。

「友枝君は、なんでこんなところに？」

「ちょっとした買い物。ところでさ、最近の大宮って」

「煌ちゃん！」

友枝の言葉を遮り、元気な声が横からかかった。僕と友枝は声の方向へと目を移す。

分かりやすくも、表情が明るくなってしまったかもしれない。僕はニヤけてしまいそうになった顔を慌てて引き締める。

保田さんが息を切らせながら、こちらに向かって走ってきている。

「ごめんね、待たせちゃって。あれ？ いっちゃん、なんでこんな

「どこにいるの？」

……いつちゃん？

「僕らの元へとたどりついた保田さんは、不思議そうに首を傾げて友枝を見ている。」

「偶然ナンパされてる大宮を見かけたから、ナイトとして助けに参上したのさぐへへ」

「ナイトはそんな笑い方しないと思う」

「親しげな友枝と保田さんを、僕は交互に見遣る。この二人、仲が いいのだろうか。」

「僕は少しもややもやした気持ちを抱えながらも、何も聞けない。」

「今日の保田さんはワンピースの上にファーのコートを着ている。私服姿を初めて見た感動で、思わずまじまじと保田さんを見入ってしまった。女の子の子にして、とてつもなく可愛い。」

「僕の方はというと、パンツスタイルの上に学校と同じコート。日曜日までスカートを穿いていられるか。……というか、少しでも男でいたい、という主張なのかもしれない。」

「煌ちゃん行こっか。バス乗り場であっちだったよね」

「保田さんが指をバス乗り場の方向へと指し示しながら、微笑みかけてきた。僕はこくり、と無言で頷く。」

「鼓動が高鳴ったまま、おさまらない。」

「落ち着け落ち着け。深呼吸を繰り返し、先に歩き出した保田さんの背中を追った。」

「友枝が当たり前のように、後ろにくっついてきてる気配を感じ取った。こいつ、ずっとついてくる気じゃないだろうな。」

……嫌だな。

「いっちゃん」

保田さんも気付いたのか、振り返って笑顔を見せてきた。

「今日はわたしと煌ちゃんの二人で遊ぶんだから、ついてきちゃダメ」

「あ、やっぱり?」

保田さんにきっぱりと言われた友枝が、立ち止まって後頭部をかいている。二カ、と笑顔を見せてきた。

「じゃあ今日のところは諦めますか! 大宮、今度デートしようない」

あつさりと友枝は引き下がって、背中を見せて手を振ってきた。僕はほっと息を吐く。

それにしても……僕、情けない。保田さんは、きちんと言いたいことを言えるのに。僕は友枝に助けられて、今度は保田さんに助けられて、結局何一つ自分から動いていない。

沈んでしまった気持ちを切り替える為に、僕は頭を振った。

今は保田さんとの時間を楽しまないと。

今日保田さんが誘ってきたのは、僕らの街の港側に出来た、新しい水族館だ。

規模は小さいものだが、この街の新たなレジャー施設として賑わっているという噂を聞いた。僕はまだ行ったことがなかったし、行く機会が巡ってくるのも思っていなかった。

僕らがバス乗り場にたどりつくと、駅から水族館へと出ている臨

時バスには既に行列が出来ていた。

時刻は十時。今から水族館は混雑する時間帯だ。僕と保田さんも行列の最後尾へと並んで、バスの到着を待つことにする。

「楽しみだね」

横に並んでいる保田さんが言う。僕は再びこくり、と頷くことしか出来なかった。

「最近の煌ちゃん、無口だよね」

「そ、そうですか？」

「うん。いつもいっぱいお話してくれるのは煌ちゃんの方だったのに」

「……ごめんなさい」

「ううん謝らなくていいよ。ただ、最近煌ちゃん、元気がない気がする」

もしかして、保田さんは心配して誘ってくれたのだろうか。

入れ替わる前の大宮煌の姿を思い返せば、確かに今の僕は別人のよう^{まじ}にテンションが低い。いや、別人なただけ。

「そんなことないです、元気ですよ！ 元気元気！」

僕は保田さんを安心させる為に、無理にでも口の端を上げて言ってみる。

「煌ちゃん」

保田さんがその名前を呼びかけてから、口をきゅっと結んだ。澄んだ眼が僕をじっと見上げてくる。ますますドキドキしてしまう。

「な、ななな何ですか？」

「……そんなに私、頼りにならないかな？ 悩んでいることがあるんだったら、なんでも話してほしいの」

保田さんが少し寂しそうに、目を伏せて言ってきた。

堪らなく、衝動的に、全てを吐き出してしまいたくなる。違うんだ、僕は太田煌じゃない。内倉永久なんだ、と。

でも、言えない。言えるわけがない。僕も俯いてしまっていた。バスが到着し、少しずつ列が動きはじめる。

僕と保田さんもノロノロと歩みを進めた。気まずい空気を作ってしまった。顔を見合わせられない。

なんとかバスに乗り込むことはできたが、満員で座席に座ることはできなかった。どころか、ぎゅうぎゅう詰めになった乗客で、まともな体勢でいることもできない。

「きやつ」

バスが発車したと同時に。がたん、と急速に動いた車両に乗客たちが大きく傾く。身体の小さな保田さんが潰されかけて、小さな悲鳴を上げた。

咄嗟に僕は両手を突き出し、保田さんの身体を包み込むようにして、壁に両手をつけていた。

「大丈夫ですか？ 保田さん」

「あ、ありがと煌ちゃん」

保田さんと、とてつもなく至近距離。保田さんのふわふわした髪の毛から、微かにシャンプーの甘い香りがした。

くらくらする。鼓動の音が伝わってしまうのではないか、と心配になる。息がかからないように、顔だけ背けた。必死に窓の外の流れる景色へと、意識を集中させた。落ち着け、落ち着け、落ち着け僕。

「なんで、保田さんなんだろ……」

また。先ほどと同じように、寂しそうな保田さんの呟きが耳に届いて。僕は思わず保田さんを見ていた。

間近で揺れる保田さんの瞳に、吸い込まれそうになる。

「前は私のことあさひ、って呼んでくれてたよね。そんなかしこまった敬語じゃなかったし」

「あ。う、うん。ご、ごめんなさ……」

「謝られると、余計に寂しいよ」

「……うん」

僕は、バカだ。

罪悪感と葛藤で頭の中がぐしゃぐしゃのままで、結局僕は保田さんに何一つ言葉をかけられなかった。

保田さんもそれからはずっと、顔を俯かせて、無言だった。

気まずいままバスが停車した。

バス出口から人々が吐き出されていき、ようやく僕と保田さんも距離を開けられる。降車していく人たちに混じって、僕らもバスを降りた。

解放感に、揃って息を吐いた。

その、直後。

水族館の方から、獣が吠えているような、凄まじい咆哮が聞こえてきた。

身の毛のよだつこの感覚。すぐにわかってしまった。リフューズの産声だ。

「こんな時に……」

思わず僕は呟く。

けど、思考は自然と切り替わる。トワや沙良さんにまんまと洗脳されてしまっているな、と小さく舌打ちした。

「ごめんなさい保田さん！ 僕、急用が出来ちゃって！ 失礼します！」

「え、煌ちゃん」

目を丸くしている保田さんの言葉を最後まで待たず、僕は保田さんに背中を向けて駆け出した。

全力疾走だ。

なんでこんな場所で、このタイミングで、リフューズなんか邪魔されなきゃならないんだ。

保田さんを悲しい顔にさせたままで、僕は何一つ出来ないままで悔しくて、堪らなかった。

僕は走りながら、コートのポケットに入っていた携帯電話を取り

出してみる。携帯電話に着信はない。リフューズが現れたとなると、すぐにでもトワから連絡があるかと思っただけ。

よくよく考えてみれば、この場所はまだにもトワの家と離れている。街の端から端くらいの距離なのだ。

さすがにトワでもリフューズの声が聞こえる位置じゃない、ということなのか。

トワに黙って出かけたことが裏目に出してしまった。戦えるのか、僕一人で。

僕は足を休めることなく、キツと強く前を見据える。大丈夫だ。清掃業はそんなに難しいものじゃないって、昨日思ったところじゃないか。トワがいなくなっただけで、出来る。

僕は胸に隠してあったペンダントを取り出した。

「清掃開始！」

星を手に握り締め、叫んだ。

僕は変身して、産声が聞こえた場所へと向かった。

負の感情そのものしか感じられないおぞましい声は、絶え間なく続いている。だからそれはすぐに発見出来た。

水族館の裏手にまわると、打ち付ける波音が聞こえてくる。

港の倉庫が建ち並ぶ人気のない場所だった。黒く蠢くりフューズを発見した。

僕は落ちていた鉄材を拾い上げ、武器^{モップ}へと変化させた。

目を細め、かたちをよく見てみると、おそらくサメガタのリフューズだった。巨大な魚のようなかたちに、突き出した背びれがある。水中でもないのに、蛇のように身をくねらせて前へと突き進んでくる。大きな口の中にぞろりと並んだ牙が見え、僕は自然と後ずさってしまった。

大丈夫、大丈夫。このモップで叩けば簡単に消えるんだから。気持ちを入れなおし、僕はモップを身体の前に翳した。

「今キレイにして わぁっ」

豪速。微笑む間もなく、サメガタのリフューズは猛然と突っ込んできた。

僕は咄嗟に反応できなかった。モップの柄に食らいついてきたリフューズに驚いて、握り締めていた柄を離してしまった。

ガラン、と地面にモップが落ちる。

速い……！

水中にでもいるかのように、そのサメガタの動きは目にも止まらなかった。

「ぐぉあああっ」

雄叫びを上げて、サメガタが僕へと押し掛かってきた……！

「わぁぁ！」

僕はあっさりと地面に倒され、後頭部を強く打ち付けてしまった。目の前にチカチカと星がまわる。

そうだ、キラキラビームを、と思った瞬間にはもう遅い。その巨軀に腕を押しつぶされ、目へと指をあてることもままならず。

視界の端に地面に落ちているモップが見えた。けれど、手を伸ばして届く距離じゃない。

なんてことだ。こんなにあっさりとやられそうになっている。

サメガタが牙で食らい付こうと、大きく口を更に大きく開いてきた。

僕はただ目を見開き、恐怖のままにそれを見ていることしか

「ピカピカキーク！」

可愛らしい声が、港に響き渡った。

僕に乗りかかっていたサメガタが、目の前から吹き飛んでいった。何者かに猛烈な跳び蹴りを食らったらしい。あまりに高速で、僕の目にも止まらなかった。サメガタのその身が遠く、転がっていく。

「え……？」

僕は身を起こす。

自分の前に、気付けば背中を向けた少女が立っていた。

呆然と、口が開いたまま、見上げた。

「美少女清掃員、ピカピカ見参！」

その少女は、高らかに言い放った。

真っ白なつなぎの作業着。そして、腰までの長く波打った薄桃色の髪。

「空の太陽よ！ わたしのもとに照り、光れ！ 街を汚す悪い子は、ピカピカがお掃除しちゃいます！ ぶんぶん！」

ウインクして微笑む少女は、天へと斜めに腕を突き上げ。やはり足は軽く曲げて上げていた。

その少女は

どう見ても、保田あさひだった。

「嘘だ」

見たくない現実に。僕の口から出た眩きは虚空へと、吸い込まれていった。

第二話 恋する 美少女清掃員？

「嘘だ」

もう一回言った。

ざざん、と防波堤に打ち付けてきた波の音が続いて響く。冷たい風が強く吹いてきて、潮の匂いを感じた。

少し歩いて行けば出来たばかりの水族館に、人は溢れかえっているはずだ。けれど倉庫の建ち並ぶ休日の港には、見渡す限りに人気はない。転がるサメガタのリフューズと、美少女清掃員が二人、以外は。

僕が座り込んだ状態で口をばくばくとさせていると、保田さんが僕を振り返り、につこりと口の端を上げた。

それはいつも見る保田さんの柔らかな笑顔。やはり、目の前に立つ美少女清掃員が幻ではない、と思い知る。

「この区画はわたしの受け持ちだから。わたしがなんとかするから。もう、大丈夫」

保田さんは強い声音で言って、再び前を見た。

僕から見える保田さんの横顔は、自身が蹴り飛ばしたリフューズを見据えている。口を真一文字に結び、力強い眼の中に光が宿っているのが見えた。それはトワの瞳の中に見た光と同じ。

やっぱり、彼女も美少女清掃員なんだ。誰も知らない異形の化け物と戦う、女の子。

そういえばトワが言いかけていた言葉を思い出す。清掃員には、受け持ち区画があるとか。

ここは僕がリフューズと戦わなければいけない区画ではなくて、保田さんが美少女清掃員として戦う区画、ということか。

リフューズがショック状態から立ち直ったのか、蠢きながら雄叫びを上げた。ビリビリと鼓膜が震える。

「来る！ 煌ちゃんさがって！」

保田さんの鋭い声が飛び、僕は急いで立ち上がった。命令のまま、保田さんの背後までさがった。

サメガタがこちらに向かって来ている！

それは視認が困難なほどの、電光石火の襲撃。

保田さんはその速度に臆することなく、ゼロ距離まで詰めて来たサメガタに、回し蹴りを放った。保田さんの小さな体躯のどこにそんなパワーが秘められているのか、蹴りが黒いリフューズにめり込む。

衝撃にリフューズが再び地を滑っていった。

強い。

僕はその数秒の立ち回りを棒立ちのまま観察し、知った。彼女、滅茶苦茶強い。

迅速に、保田さんは体勢を整えた。彼女の背中には全く隙が感じられない。

僕がまるで敵わなかった相手を、すぐにもやっつけてしまいそうな勢いだ。

けど、相手も強い。保田さんの攻撃のダメージをもともせず、跳んだ。まさかサメガタが跳ぶなんて想像してなかった僕は、愕然と空を仰ぐ。

「保田さん、上！」

僕は咄嗟に叫んで、

「きら」

保田さんは、あんなに強かった瞳に翳りを帯びて、僕の方に目を移してしまった。

しまった、余計なことを。

思った時には遅かった。

一瞬の隙。凄まじい跳躍力で保田さんへと一気に距離を詰めてきた、サメガタからの体当たり。

「きゃあああつ」

サメガタからの激突に、保田さんの身体が耐えられず吹き飛ばされ、地面に転がる。

アスファルトで頬をガリガリと擦りむいたのが目に飛び込んでくる。頬から流れる、赤い血。

その倒れた保田さんの身体に、更にサメガタが覆いかぶさっている。

ぷつり、と僕の中の何かが音をたてた。

「っ、うああああ!!」

血が沸騰するような昂ぶりに、叫び、疾走した。

身体の底から湧き上がる、何か。

「キラキラモップ!」

叫ぶ。地面に落ちていた筈の僕の武器は、何もない空間から再び、生み出した。

強く、握り締める。目の前がぐらぐらと歪んで見えた。

前へ、もっと前へ!

気付けば一瞬で、僕はリフューズの前へとたどりついていた。

「お前は僕のあさひに何してんだよおっ！」

猛る気持ちのまま、モップをサメガタへと振りかぶる。サメガタは殺気を感じ取ったのか、紙一重で身を擦らせた。

モップの毛束が地面を叩く。飛び散る光の粒子。降りかかったサメガタは僅かに後退した。自然に出る舌打ち。避けられたって、何度でもやってやる。僕は歯を食いしばり、サメガタと対峙した。もう油断なんてしない。

「あさひには、指一本触れさせやしない！」

僕は言い放ち、同時にサメガタの目前へと迫る。

「だあああああー!!」

サメガタへとモップを思い切り、薙ぎ払った。洗い流すように、光が横に流れていく。

その光に巻き込まれて、異形は一瞬で掻き消えた。反撃も悲鳴すら何一つ与えることなく。

「清掃 完了」

僕が言い放ち、全てが日常へと、戻る。

荒い息を吐き出して保田さんを振り返った。

保田さんは身を起こし、果然と僕を見ていた。目が合う。

「煌ちゃん、すごい……あんな速度でリフューズを消しちゃうなんて。でも、あの、僕のあさひって……」

「あ」

僕はようやく、正気に返った。顔から火、噴いてる、絶対。

「あああああ、あれはその、なんというか、言葉のあやと言いますか！」

頬に擦りむいた傷と、白い作業着を薄汚れさせた少女は立ち上がる。

その姿が私服へと戻り、髪色も髪型も日常のものとなる。僕にも同様の現象が起こっている。改めて不思議に思う。変身時、保田さんなんか桃色の上に髪の毛長くなっていた。どういう仕組みなのだろうか。なんて思考の現実逃避を試みても、言ってしまった言葉は消えない。

恥ずかしさのあまり、目が潤んでいる僕に向かって。

「すっごく、嬉しかった」

にっこり、と。

満面の笑みを浮かべた保田さんを見て、僕の胸がかあつと熱くなっていく。

いつだったか沙良さんに言われた言葉が脳裏をよぎっていた。

『恋する気持ちは人を強くする。美少女清掃員の心得だよ。手帳にも書いてあるから後で確認しときな』

もちろん、すぐに手帳を開いて読んでみた。

『美少女清掃員の心得その一。』

ぱらり、と次のページをめくると飛び込んできた文字。

『想いの強さが、美少女清掃員を強くします。恋する相手を想う気持ち、それが美少女清掃員のパワーとなりますよ！ 相手への気持ちが強ければ強いほど、それはもう無限大です！ 空だって飛べるはず！』

……さすがに空は飛べなかったけど。
今なら手帳に書かれていた意味が分かる。
僕は、大好きな女の子を守る為だったら
どこまでも限りなく、強くなれる。

幕間

ノックの後、がちやり、と診察室のドアを開いた。

「来たね、煌」

回転椅子をまわしておばあちゃん、大宮沙良がボクへと目を向けた。口の端を軽く上げて、目尻には皺を寄せ、微笑んでいる。

おばあちゃんは休日でも大抵は大宮医院の診察室で、仕事をしている。今日も例外ではなく、白衣姿はいつものままだ。

学校が休みの土曜日。大宮煌と内倉永久が入れ替わって一週間目になる。

その日の昼下がり、ボクは携帯電話でおばあちゃんから呼び出しを受けた。

トワの姉、久遠さんとテレビゲームに興じていた時だった。

レースゲームで完膚なきまでに久遠さんを叩きのめして、

『前は絶対負けてくれてたのに、トワのバカトワのバカトワのバカ』

なんて、恨みがましい眼を向けられていたから逃げ出す口実が出来てちょうどよかったんだけど。

泣きそうになってる久遠さんは、可愛らしいお姉さんだなと思う。永久くんがお姉さんを怖がっている意味が、ボクにはよくわからない。

「それで休日に突然呼び出すなんて、なんの用？　ちなみにボクは煌じゃなくって、トワだよ」

ボクはおばあちゃんの微笑を前に、肩をすくめた。

「そこまで徹底しなくなっただいいじゃあないかい。まあ、座りな」

不満げなボクの表情などお構いなしに、おばあちゃんは自分の前の椅子を指し示した。

ボクが座ると、正面からじいつと見つめられる。

「そついえば大宮さんは？ 家の方？」

おばあちゃんの心を見透かすような瞳に晒され、ボクは落ち着かない気分になった。きよろ、とわずかに視線が泳いでしまう。

なんていうか、ボクはこのおばあちゃんの真っ直ぐな目が苦手だ。誰にも本心なんて悟られないという自信があるのに、おばあちゃんにだけは心を読まれていやしいかと、胸がざわつく。

「永久君かい？ 朝ソワソワと出かけていったきりだね。友達と出かけるみたいなこと言ってたけど、何も聞いてないのかい？」

ソワソワと？ ボクに内緒でどこに出かけたんだろうか。

少し考えてみて、すぐに解答にたどりついた。

永久くんがソワソワとボクに内緒で出かける相手なんて、一人しか思いつかない。

「あさひか……ふーん、そうかそうか」

後で絶対それをネタに虐めようと決意した。

「妬いてるのかい？」

「何をバカな」

ボクが引き攣った微笑でおばあちゃんを見遣ると、おばあちゃんはどこまでも余裕の表情だ。くそう、血の繋がりを嫌でも感じてしまふ。

「ボクは大宮さんに美少女清掃員としての仕事を忘れてもらっちゃ困るだけだよ」

「永久君は巻き込まれてるだけにしては、頑張ってくれていると思うよ」

まあ、それは確かに感謝しないといけない。彼は、ボクの勝手な都合に巻き込まれただけなのだから。

少しの罪悪感がちくり、と胸に刺さった。でもそれを表情に一切出すようなマネはしない。ボクは微笑のまま、おばあちゃんと向き合う。

永久くんのが頭が浮かぶと、ずっと疑問に思っていたことを思い出した。

「ねえおばあちゃん、なんで大宮煌と内倉永久の身体が入れ替わった時、大宮煌の身体は復活したの？ 清掃員の入れ替わり能力は、死んでしまう身体を捨てて、新しい身体に成り代わるものなんですよ？ だったら大宮煌の身体は生きていられないはず」

「……私も実際に、清掃員の入れ替わりの事例を目にしたことがあるわけじゃないしねえ。おそらくは、彼の精神が自己再生能力を発動させたんじゃないだろうか」

「自己再生能力？」

「清掃員の完全覚醒能力に、そういうものがあると聞いたことがある」

ボクは絶句してしまふ。

おばあちゃんを見つめると、おばあちゃんは困ったように笑んだ。

「まさか、彼が完全な美少女清掃員になる素質を持つてる、なんてね。すごい偶然の奇跡じゃないか」

呆然としたまま、無意識に、膝においていた手が握り拳になっていた。

震えをおさえ、唇を軽く噛み締める。

俯いてしまっていたボクの頭上に、冷静な声音が降りかかってきた。

「キレイで純粋な精神が、完全な美少女清掃員に必要なもの。まあ、永久君と数日生活してみても納得は出来るさね。あの子、未だにお前の下着姿すら見られやしないんだから」

「……完全な美少女清掃員なら、ヒトガタを清掃することが出来る」

ヒトガタ。

その忌まわしきリフューズを清掃することが、ボクの使命。

この街に蔓延るそいつらを消す為だったら、ボクは自分の身体なんて要らない。

何があっても、どんなに汚い手を使っても、ボクはそいつらを消すことを決意したんだ。

自然と、ニヤリと笑みが浮かんでいた。

偶然とはいえ、ボクは完全な美少女清掃員の力を、この手中に収めたのだ。

最高じゃないか。

「煌、服を脱ぎな」

おばあちゃんの厳しい声が耳に届き、ボクは顔を上げた。
真っ直ぐで、逆らえないほどの強い瞳。

ボクはしぶしぶながらに、シャツのボタンを外していく。
シャツを開き、その胸を、おばあちゃんへと見せた。

おばあちゃんの表情が、強張った。今日おばあちゃんがボクを呼び出した意味が分かった。

清掃員の秘密に精通しているおばあちゃんには、やっぱり、気付かれていたのだ。

「おばあちゃん、ボクは、いつまでもっ？」

「……その拡がり方からして、一冬もつかどうか」

苦しげに目を伏せて、おばあちゃんが言い放ってきた。
それでもボクは、笑顔だった。

「それだけ時間があれば、充分だ」

ボクは胸をしまう。

大きな黒い痣が、心臓部分を中心にして、全身に拡がりを見せ始めている、その胸を。

「必ずボクたちの身近に、ヒトガタの司令塔が潜んでいる。そいつを探し出して、ヒトガタを一掃する」

ヒトガタを清掃する為に、永久くんを利用して、利用して、利用

しつくしてやる。

どこまで堕ちようとも、誰に許されなくても。

第三話 期待の新星 美少女清掃員？（前書き）

第三話は新規執筆の、完全に追加エピソードです。
色々やりたいことやりたい放題かもしれません。
グダグダになってしまったらごめんなさい！
そしてどんどん話が長くなっていく……！

第三話 期待の新星 美少女清掃員？

『美少女清掃員の心得その二。』

『命の危機に晒された時、美少女清掃員は生存本能が働き、健全な肉体と入れ替わる能力を使えます。しかしあなたはもう元には戻れません。そしてこの能力は、美少女清掃員の最大禁忌です。決して決して使わないでください』

僕はこれまでに何度も繰り返し読んだ手帳のページへと目を落とし、溜め息を吐く。

死にそうになっている大宮煌が、この能力を使って内倉永久と肉体を入れ替えたということは、理解できる。現実、僕は、大宮煌になっってしまったのだから。

他のページをめくってみても、入れ替わりのことについての表記はそこにしか書いていない。情報が少なすぎる。しかしやっぱりここに書いてある通り、入れ替わったらもう決して元には戻れないんだろうか。

「限界なんです！」

僕は元に戻りたい。男として生きてきたんだ。たとえ大宮煌が完璧美少女だろうと、これから一生大宮煌の身体でいることなんてごめんだ。

何か、何か方法があるはず。

なくたって僕が作ってやる。絶対元に戻るんだ、絶対、絶対絶対絶対僕は元に戻らなきゃいけない。

「……で、元に戻りたいから、ボクに協力しろって？」

僕が強く言い放った先には、トワがベッドに腰掛けている。
トワに向けて大きく頷き、開いていた手帳のページを見せた。

「沙良さんに何度聞いても、入れ替わり能力のことには言葉を濁すばかりなんです。でも探せば何か方法はあるはずです！」

ここはトワの部屋だ。元内倉永久の部屋、とでも言うんだろうか。冬休みが近くなってきた今日この頃。恒例となっている、放課後勉強会の時間。僕はいつも通りセーラー服のままでここへとやってきて、部屋に入った。さあ勉強の開始だ、という状況になっずと押し黙っていた口を開いた。

元に戻りたいから、一緒に方法を探そう、と。

真剣で切実な僕の眼差しの前で、トワは表情一つ崩さずにいる。

「いい加減諦めたら？ 手帳に書いてあるんなら、もう無理なんだよ」

「でも、でも」

「しつこい。何を躍起になってるの？ キミ、あさひと密会なんかして大宮煌の身体で青春を謳歌してるじゃないか。楽しそうなんだから問題ないでしょう？」

ぴしゃり、と遮ってきたトワの辛らつな言葉に僕は固まった。
なんで知ってるんだ。

数日前に僕が保田さんと二人で出かけたことは、トワには秘密にしていた。

あの日のことを思い出す度に、僕の胸は熱くなる。
保田あさひが僕と同じで美少女清掃員だってわかって、その彼女

を守る為に戦った。怪我をした保田さんは仕方なくすぐに家に帰っちゃったけど、僕にとっては二人で過ごしたすごく、すごく貴重な思い出のページだ。

美少女清掃員の保田さんも可愛かったなあ……

天真爛漫な笑顔を思い出す度、僕の顔は緩んでしま

「って問題アリアリなんです！　だって僕は女の子として保田さんと一緒にいたいわけじゃないですし！」

「つまり、男として彼女と付き合いたいと？」

「い、いやそんな恐れ多いことは思っていないことはないですけど」

「どっちだよ」

「だ、大体トワはなんで彼女が美少女清掃員だって黙ってたんですか！？　知ってたんですよ！？」　保田さんは僕が美少女清掃員の姿になっても全然驚いてなかったし！」

「黙ってたっていうか、話す機会がなかったただだよ」

それで済まされる問題なのだろうか。簡単に言っただけのトワの飄々とした態度は相変わらずで、いつも僕ばかりが必死だ。

保田さんが美少女清掃員だって知った時の僕の衝撃を、半分くらいわけてやりたい。

そこまで考えて、ハッと僕は表情を強張らせた。

「ま、まさかまさか保田さんって大宮煌と内倉永久が入れ替わっていることを知ってる、とかないですよーね！？」

「うつん。話してない」

トワはあっさりと首を振ってきた。僕はほっと胸を撫で下ろす。保田さんも美少女清掃員ということは、入れ替わり能力については知ってるはずだ。もしかして僕が本物の大宮煌じゃないとバレていたとしたら、すごく気まずすぎる。ますます保田さんに合わせる顔がない。

「その手帳に書いてある通り、入れ替わりの能力はタブーなんだよ。バレたら色々まずいことになる。特にあさひには」

「なんで保田さんにバレるとまずいんですか？」

「彼女の家系は清掃員の研究機関なんだ。入れ替わったことがバレたらボクらは人体実験でバラバラにされる」

「えええ！？」

「嘘」

「嘘ですか！」

再び胸を撫で下ろした。本気でバラバラにされることを想像して、青ざめてしまったじゃないか。

「まあそうじゃなくても入れ替わってることはおばあちゃん以外には知られたくない。面倒なことになりそうだし」

僕もそれには同意だ。強く何度も頷いた。たとえば僕の姉に入れ替わってることがバレたりしたら、一体どんな恐ろしい事態が待ち

受けているか分からない。

トワが立ち上がった、僕に歩み寄ってきた。

僕は反射的におどおどとしてしまい、近くなったトワを見上げる。

「キミはあさひが好きだから、このままじゃ嫌なんだよね？」

トワが優しい声音で問いかけてきた。そんなにはつきり保田さんが好きとか言われてしまうと、頬が熱くなる。

それでも僕は、こくん、と頷いた。

「あさひと手を繋いで一緒に歩いたりとか、デートしたりとか、抱き締めて髪を撫でてみたりとか、キスしたりとか、部屋に連れ込んでそれ以上のことだってしたいとか思ってるんだね」

淡々と言ってくるトワの言葉で、僕はどんどん真っ赤になっていく。耳まで炎上中だ。そして僕の頭の中は無意識に保田さんとの妄想暴走モードスタートポワポワ状態でヨダレデタ。

「何も問題ないじゃないか」

さっとハンカチを差し出してきたトワ。僕は無言でそれを受け取り、涎を拭く。

「大宮煌の身体でも出来ることばかりだ」

トワは、満面の笑顔で言い放ってきた。

「何その素敵な百合展開」

僕は床に四肢をつき、打ちひしがれた。

予想はしていたけど、元に戻りたいとトワに迫っても無駄だった。トワは僕とは違って、運命を受け入れてしまっている。

「こうなったら百合展開でもなんでも構わないんですけどね！ それだけじゃなくて！ 僕は絶対に元に戻らなきゃいけない理由があるんですよおお！！」

僕は床にばしばし拳を打ちつけ、想いのたけを吐き出す。

「なんで？」

なんでこんなにテンションに差があるんだろうか。トワが慌てることって、あるのだろうか。僕は顔を上げて、キッとトワを睨みあげた。

「だって、だって来週は球技大会があるんですよ！？」

「は？ そんな理由で？」

「ぼ、僕にとってはとてつもない大事なんです！！」

僕は立ち上がり、トワへとずんずん迫った。

星霜高校毎年恒例の球技大会は、来週開催される。我が校伝統行事の球技大会は、二日間にわたって毎年異様な盛り上がりを見せる。僕が大宮煌として出る試合は女子部門のバスケ、バレー、ソフトボール、卓球。多すぎ。

クラス委員長として出場選手の割り振りを決める際、クラスメイトたちに祭り上げられた結果そんなことになってしまった。僕らのクラス、期待の星。それが大宮煌だ。

納得はできる。去年の球技大会で一番の輝きを見せていたのは、

大宮煌だったからだ。

大宮煌はそのクラスの女子部門を全優勝へと導いた。

僕はそんな彼女を遠くから眩しい目で見ていた記憶がある。

……だからね。そんな超人並の彼女の活躍を知ってる全校生徒たちの前で、僕が大宮煌として活躍……できるわけないじゃないかあ
あ！

「僕は、僕はあっプレッシャーで押しつぶされてしまいますうう。
もう登校拒否するう。世を夢んで死ぬうう」

限界を迎えた僕は涙で頬を濡らした。そんな僕の頭をトワが撫で
てきた。

「まあまあ。そんなメソメソ泣かないで。そういえばキミ、みんな
にそりやあもうすぐくすくすく期待されてたもんね。大して活躍で
きなかったら、みんな果てしなくがっかりするだろうね。ボクは男
だから何も手伝えないし、困ったねアハハ」

全然顔が困ってない。トワは意地悪だ、意地悪だ、意地悪だ。
打ちひしがれて泣き続けていると、トワが息を深く吐き出した。

「わかったよ。元に戻ることに關しては何も手伝えないけど、球技
大会は協力してあげる」

優しげに言ってくるトワ。

「ただ助けてくれるんですか……？」

「もちろん。だって、ボクらは運命共同体じゃないか」

「ありがとうトワー!!」

よかった、球技大会に希望が見えてきた！ トワが協力してくれ
たらきつと、なんかなるはず！ 僕はぱあっと笑顔になっていく。

「……キミ、詐欺にあいやすいと言われたことない？」

トワが具体的にどういう協力をしてくれるのかは聞き出せないま
ま 球技大会当日。

お腹痛いし熱がある気がするしやっぱり休もうと、ベッドにしが
みついていた僕は無理矢理に沙良さんに引き剥がされた。

えぐえぐと泣く僕を着替えさせ、沙良さんはいつも通りにセーラ
ー服の肩襟をぽんぽん、と叩いてくれた。この動作は結構僕に安心
感を与えてくれていたりしている。

沙良さんはすごく頼りになるおばあさんだ。今の僕にとって、一
番の味方でもあると信じている。

目隠しの布を外して、沙良さんを振り返った。

「行つてらっしゃい。頑張つてな」

目尻の皺を深めて言ってきた沙良さんに、こくり、と僕は頷き、
学校へと向かった。

もうここまで来たら腹を決めるしかない。と、いつもより更に重
い足取りで、星霜高校の門を潜った。

教室までの道のりが、遠く感じた。いつそ教室にたどり着かない
で、途中で異世界に迷い込んでしまうなんて展開が待ってやしない
だろうか。なんて、現実逃避の妄想を巡らせつつ、教室のスライド
ドアを開いた。

「あ、煌来た来た！」

「おう大宮！今日は頑張ろうな！」

僕の登場に、わつと華やぐクラスメイトたちの顔。僕はそんなクラスメイトたちの笑顔に、頬を引き攣らせた愛想笑いで手を振った。自分の席へと座り、俯きがちに、ちらり、とトワの席へと目を移した。

トワはもう登校してきて、地味に読書をしてた。僕の登場にもどこ吹く風状態だ。

ほんとに、ほんとになんとかしてくれるんだよね！？あの言葉に嘘はなかったんだよね！？信じていいんだよね！？と視線で訴えてみても、全くこちらを見ようとしらない。

……もう、ダメかもしれない、僕。

クラスメイトたちの劳いの声を遠くに聞きながら、僕の意識は薄れかけていた。彼岸への道をまっしぐらだ。

……気付けば、朝のホームルームの時間になっていた。

どこまで意識が飛んでいたのだろうか僕は。

ざわざわと落ち着かない教室内。

教壇にはいつの間にか担任教師が立っていた。

横には転校生が立っていた。

「え？」

なんだこの状況は。

球技大会当日に、知らない女の子が教師の横に立っている。

「えーおはようみんな！聞いてくれ！突然だが、海外から来た二日間だけの超短期留学生を紹介する」

熊のようにいかつい僕らの担任教師、駒沢先生が口を開いた。

隣に立つ転校生の女の子は、高校二年生には見えない小柄な幼児体型ながら、背筋をぴんと伸ばして威厳を見せている。

凜として整っているけれど、可愛らしく幼い顔立ち。そして腰まで伸びる、サラリとした銀色の髪を後ろで一つに束ねている。

僕はその女の子をまじまじと見入って、その目を大きく見開いていく。

「大宮の家にホームステイをしている従姉妹だそうだ。色々大宮に任せておけばいいな。ほら、自己紹介だぞ」

教師に促されて、その女の子は一步前へと出た。

「大宮沙良だ。短い期間ですけど、どうかみんなよろしく頼むぞ」

耳に覚えのあるすぎる、ハスキーボイスの後、一礼。

「ハアアアア！？ 沙良さああああん！？」

僕は絶叫し、がたんつと椅子を倒して思い切り後ろに、転がっていった。

第三話 期待の新星 美少女清掃員？

球技大会一日目。

朝のホームルームが終わった後すぐ、僕は沙良さんの手を強引に引いて、職員室横の女子トイレの中へと連れ込んでいた。この場所を選んだのは、誰かに話を聞かれる可能性が少ない所だったからだ。大宮煌の身体とはいえ、女子トイレで誰かと鉢合わせるのが気まじいことから、なるべく利用者の少ないここへと僕はいつも走っている。こんなところで役に立つとは思わなかったけど。

「なんだい永久君。いや、この学校ではキラリと呼んだ方がいいのかねえ。球技大会が始まってしまうぞ。こんなところでゆっくりしてていいのかい？」

僕はのんびりと語る沙良さんの手を離し、深刻な表情で振り返った。

僕の目の前にいる沙良さんは、何故か若い。皺一つ見当たらない、ピッチピチのつやつや肌だ。そして煌の祖母というだけあって、童顔ながらも超絶美少女だった。女子トイレで二人きりという状況に少しドキドキしてしまう……って、今はそんな状況じゃない。

「なんで、なんでこんなところに沙良さんがいるんですか！？」

僕が問い詰めると、沙良さんは肩をすくめる。

「なんでって、お前さんが球技大会の助っ人を頼んだんだろ？ わざわざ助けに来てやったのにその言い草はないだろ」

……トワだ。すぐに思い当たった。

沙良さんが現れたのは、トワの差し金ということだ。

確かに僕は球技大会でみんなからの期待が重すぎることからトワに助けを求めたけど、まさか沙良さんが助けに来てくれるなんて予想の範囲を超えすぎている。

トワはなんでいつも、重要なことを僕に話してくれないんだろうか。毎回毎回、僕は驚かされてばかりだ。知っていれば、椅子から転がり落ちて後頭部にこぶをつくることもなかったのに。

「この星霜高校の理事とは古い付き合いでねえ。無理を言って二日間だけの転校生扱いにもらったのさ」

「いや、そんな裏情報はけっこうどうでもいいです！ そんなことよりも突っ込みたいのは！ なんて沙良さんが幼児並に若返っているのかってことです！ まさか大宮煌の祖母っていう情報も嘘だったとかないですよね！？」

僕が唾を飛ばしながら必死で言うと、沙良さんが不機嫌そうな表情になった。口をへの字に曲げている。老女の沙良さんでは思わなかったけど、童女の沙良さんでは、その表情すら可愛らしい。

「幼児並ってどういうことだい。十七歳の頃の姿なんだよこれでもそして私は大宮煌の祖母だよ。この姿は仮の姿ということになるのかねえ」

沙良さんがブツブツと不満げに呟きを漏らしている。そして着ている星霜高校のセーラー服の下に隠してあったペンダントを取り出した。少し古びているけど、僕が常につけている星のペンダントと似ていた。

「この変身ペンダントを使用したんだ。昔は美少女清掃員だったか

らな。使えば今でも変身できるのさ。美少女清掃員って言うくらいだから、美少女に変身する、というわけだ。後は作業着からセーラー服に着替えれば、ほい、女子高生沙良さんの出来上がりさね」

へええ。

僕は感心して沙良さんの見せてきたペンダントをまじまじと見下ろした。そんな便利な機能までついているのか、この不思議ペンダント。

「すごいですね。どんな仕組みになってるんですかこのペンダント」

「知らん」

「いやそこは知っておいてほしかったです!」

沙良さんは僕の突っ込みを無視し、ペンダントを胸にしまった。

「それに、ここに来たのはもう一つ気になることがあったからね…さて、じゃあ行こうかキラリ」

「え? どこに?」

「私がなんの為に転校して来たと思ってるんだい? お前さんの代わりに大活躍してやるから、安心しな」

「さ、沙良さああああん」

そうだった。沙良さんの登場の衝撃で、僕の脳内からすっかりと吹き飛んでいたけど、今問題なのは球技大会だ。驚いたけど、目玉飛び出るかと思ったけど、沙良さんの登場は誰よりも心強い。トワ

にも感謝しなければいけない。

僕は涙で滲んだ視界に、不敵な微笑みを見せる沙良さんを見る。
僕よりも遥かにちっこい沙良さんが、背伸びをしてよしよし、と頭を撫でてくれた。

「キラリが出場する最初の種目はなんだい？」

「えっと、女子部門で第一回戦なのは、バスケです。そうだ、朝一だから急がないと」

「了解だ、急ごう。けどその前に、まずは、着替えないとな」

「あ」

そういえば、まだ大問題が残ってた。

女子トイレから小走りに出て行く沙良さんの後を追いつながら、僕の足取りはまたも重くなる。

実は僕、大宮煌の身体になってからの体育の授業は、全て体調不良を理由に休んでいた。

だって、だって

「おー遅かったじゃん煌い！」

「さっさと着替えて！ バスケの一回戦始まっちゃうよー！ って、なんで煌、後ろ向いてるの？」

クラスメイトの女子たちが、漏れなく全員着替えをする更衣室という聖域に立ち入らなければいけないからだああ！

沙良さんが開いた更衣室の扉の先には、予想通りにクラスメイト

たちが着替え中だった。

三百六十度、下着姿の女子、下着姿の女子、下着が、下着が歩いている！

僕は耐え切れずに、背中を向けて硬直していた。けど、逃げ出すことは許されない。

「煌早く早く！」

クラスメイトの女子に手首を引かれて、僕は更衣室の中へと踏み込んでいく。

ロッカーの中に制服をしまい、体操着へと着替えている女子たちの間をひたすらに俯き、かいくぐっていく。

目の前がチカチカする。鼻の奥が痛い。顔面が放火中だ。

「ここでは着替えるのを手伝ってやるわけにはいかないしな。まあ、そのうち慣れなきゃいけないんだ。いいショック療法じゃないか」

横を歩いている沙良さんが、簡単に言っただけ。

そんなに簡単に言われても、女子たちの着替えを平気な顔で直視できるほど、僕は菩薩ではない。

それに、僕のクラスには、僕にとってもっとも着替えを見てはいけない対象がいる。

だから余計に気が張り詰めて

「煌ちゃん！」

「ひいひい来たあああ！」

ほわほわと柔らかく、明るい声が背後からかった。その声を耳にしただけで僕は卒倒しそうになった。

「なんでオバケを見たみたいな反応するの？」

「いや、ごめんなさい！　なんていうか球技大会の前で緊張してますですよ！」

声をかけられて無視するわけにはいかずに、僕は目をぐるぐるとまわした状態で、恐る恐る振り返った。

よかった。保田さんはもう体操着に着替え終えていた。

僕に笑顔を向けてくる保田さんの着替えを見られなかったことを後悔なんてしてないよ決して。

「煌ちゃんでも緊張するんだね。今日は一緒に頑張ろうね！」

「は、う、うん！」

なんとか頷いて、僕はセーラー服の襟を持つ。

初めての目隠し布なしで、着替えをしなければならない。

しかも周囲にはクラスメイトの女子たちが着替え大開催中。しかも隣には保田さんがニコニコ。

球技大会始まる前に、僕、心臓がもたずに死ぬんじゃないか。ブルブルと震える手で、セーラー服の脇ジッパーを上げた。

ええいもうどうにでもなれ、とがばり、と脱ぎ捨てた。

沙良さんに朝装着してもらったブラジャーは黒でしたあああ！

なんとセクシーなああああ！！

ピシャアアツ、と落雷にでもあったような衝撃に、僕は硬直して奮えたまま、自身の胸を見下ろす。

しかもブラジャーからのぞく胸は、なんという盛り上がり方なんだ！　想像通りにクラスメイトの女子たちを超越している！

べしつと後頭部を殴られて、僕は正気に返った。

既に体操着に着替え終えていた沙良さんが、腕を組んで半眼で僕を睨んでいる。どうやら僕は、沙良さんにジャンピンググツッコミをされたらしい。

「胸を凝視して固まってる場合じゃないぞキラリ。は、や、く、着替える」

僕は沙良さんの迫力に、慌てて着替えを再開させた。やはり孫のあられもない姿を凝視されたのは気に入らなかった様子だ。沙良さんの恐ろしく鋭い眼を前に、僕はなるべく煌の身体を見ないようにしながら、やっと着替えを終えた。

そして一つの山場を越えたと、ホッと一息つく間もない。すぐに女子バスケの一回戦会場となる体育館へと、行かねばならないのだ。バスケに出場する保田さんとクラスメイトの女子たち、応援側の他数名、そして沙良さんを引き連れて更衣室を出た僕は、走った。後ろについてきてる転校生の沙良さんは、女子たちに大人気で、囲まれて声をかけられまくっている。沙良さんも満更でもない様子で、既に女子たちと打ち解けている様子だ。体育館に到着すると、既に対戦クラスの女子たちはスタンバっていた。審判には僕らの担任熊沢じゃなくって駒沢先生がいる。

「遅いぞ2年A組！ 早く整列しろ！」

叱咤されて、バスケに出場するメンバーがコートを中心へと走っていく。

沙良さんも一緒に走っていった。

僕は応援側のみならず一緒に、コートの端っこで立っていた。

「あれ？ なんで沙良ちゃん？」

バスケット出場メンバーの女子が戸惑いの声を上げている。

「煌、どうしたの？　沙良ちゃんじゃなくなっちゃって煌が出場するんだよね？」

僕はてへ、と笑顔で首を傾げておいた。

そういえば、僕の代わりに沙良さんが出場してくれるのはありがたいけど、僕の活躍を期待するみんなには、どう言い訳すればいいんだ。

「心配ないぞ！　私は煌の従姉妹なんだ。キラリと同様、いやそれ以上の実力の持ち主と言っていていい！　それに折角二日間の短期留学に来たんだ。キラリが私に活躍の場を与えてくれたのさ！」

沙良さんが言い放った言葉に、おお、とみんなが納得の声を上げた。

完璧だ沙良さん。僕は拍手を送って沙良さんを抱き締めたい気分になった。本当に沙良さんは、ありがたい存在だ。

そして、無事に試合開始のホイッスルが鳴った。

試合がはじまる。

ジャンプボールに立ったのは、沙良さんだった。出場メンバーの誰よりも背が低い沙良さんなのに、大丈夫なのだろうか。僕は応援側の女子たちと一緒に、ハラハラと見守る。

駒沢先生がボールを垂直に上へと高く投げる。

そして

「はあああああっ！！」

沙良さんは、対戦相手より頭一つ分は高く、鮮やかにジャンプ。ボールをべしっとはいた。

ボールは保田さんの手の中へ。

「あさひ、パスだ！」

なんとという駿足。

次の瞬間には、既にゴール下に移動していた沙良さんが、保田さんに向けて声を張り、手を上げていた。

保田さんからのロングパスは、沙良さんの手の中へとおさまった。そして、芸術的に美しい、レイアップシュート。

ボールはすんと、とゴールの中に吸い込まれていった。

ここまでほんの数秒。

保田さんと沙良さんをのぞく全員が、呆然自失状態で立ち尽くしていた。

「す、すごい！」

わああ、と興奮で沸き立つ僕らのクラス。

僕も素直に感動してしまった。沙良さん、すごく格好いい……！もう僕の出る幕なんてない。沙良さんがいれば、僕らのクラスは百人力だ。

隣のコートでは、他のクラス同士でバレーの試合も始まっていた。後でバレーの出場もあるけれど、その時もきつと代わりに沙良さんが出てくれるだろう。もう僕に怖いものなんてない。

本当によかった、安堵の息を吐き出した時。

後ろから肩をポン、と叩かれて僕の心臓は跳ね上がった。

観衆たちが試合に釘付け状態の中、僕は一人振り返る。

「よっ、大宮。なんで試合に出てないんだ？」

友枝壺が、気付けば僕の後ろに立っていた。僕はどうでもいい奴

の登場に、げんなりと緊張してしまっていた表情を崩す。

「沙良さんが出場するって言ったから任せてるんです。活躍見ました？　すごいですよ、沙良さん」

僕が自分のことのように自慢げに言っている間にも、沙良さんの快進撃は続いている。すばしっこくコート内を走り回り、次々にシュートを決めている。誰にも沙良さんを止められない。

「へーすごいな大宮の従姉妹」

「もちろんです！　友枝君は？　試合まだですか？」

「ああ、俺はまだ。せつかくだから大宮の華麗な姿を拝みに来たんだけど。残念だ、非常に残念だ。大宮の活躍見たかったなあ」

ドキリ、としてしまう。そういえば今回の球技大会で誰よりも僕を祭り上げてきたのは、この友枝だ。それだけ大宮煌の活躍を見たかったということだろうか。

「試合に出てないんだったら、ちょっと今からいいか？　試合に出るメンバーの割り振り確認をしてほしいんだけど」

「あ、うん」

僕は頷き、歩き出した友枝の後をついて、体育館を出た。

体育館の歓声が遠くなっていく。グラウンドの方ではサッカーの試合も始まっているだろうし、各会場で様々な球技が始まっている。寒い中でも球技大会のボルテージはどんどん上がっている状態だ。そういえば、なんでわざわざ外へと連れ出されてるんだろうか、

僕。

なんて今更に状況がおかしいことに気付く。

……気付いた時には、遅かった。

いつの間にか体育館の横にある体育館倉庫に、僕は友枝と一緒に入っていた。

ぴしゃり、と横に立つ友枝が倉庫の扉を閉めている。

体育用具が置かれている薄暗い倉庫は、更に暗くなってしまう。

「あの？　こんなとこになんの用事ですか友枝く」

唐突に、抱き締められた。

「好きだ大宮」

「はいいいい！？」

な、な、な！　何が起こっているんだ！　ぼ、ぼぼぼくは友枝に

正面から強く抱き締められている意味がわからない！

そのまま、押し倒されてしまった。

どさり、と僕の身体がマットの上へと倒されて。

覆いかぶさってくる友枝。

「知らなかっただろうけど、俺、ずっと大宮が好きだったんだぜ？」

いやそれは多分みんなが知ってると思うけど！

「君の気持ちはわかりました！　だけど！　順序が間違ってますよ

ね！？　とりあえず友枝君、離してくだ」

「だめだね。俺はもうガマンができねえ」

「ぎゃあああああ！！ そんな殺生なああああ！！」

頭の中は嵐が吹き荒れていて、もう正常な思考回路ではない。

この盛りのついた猿をどうすればいい！ そんなにがつしりタイプではないけれど、女の身体の僕よりは体格のいい友枝をはねのけることすらできない。

腕を掴んで押してみても、ビクともしなかった。

「本当に最近の大宮は反応が可愛いなあ。まるで別人みたいだ」

もうだめだ！ 友枝の目、なんかとろんとしておかしい！

僕の声聞き入れるつもりもなさそうだし、このままじゃ男に犯される嫌すぎるううう！

パニックで視界がぐらぐらしている。涙で目の前が霞んでいる。そして友枝の顔がゆっくりと近付いてきて……

「なーんてな」

耳元で、友枝が囁いた。

「……え？」

僕の見上げている友枝の表情が、スッと真剣なものに変化していた。

「お前さ、大宮煌じゃないだろ」

……は？

「誰か違う人間が、大宮煌のフリをしてる。……お前、何者だ？」

は？ は？ はぁ あぁ あっ！？

第三話 期待の新星 美少女清掃員？

照明の落ちている、薄暗い体育館倉庫内。球技大会のざわめきも、扉が閉め切られているので届いてこない。マットの上に散らばる僕の長い黒髪。緊迫した状態に、浅くなつた呼吸。白い体操着から盛り上がっている胸が上下している。季節的に冷たいはずの空気は、どくどくと激しく脈打つ鼓動と焦燥感から全く感じない。

そして僕に覆いかぶさり、両肩を押さえつけてきている人物
友枝の真剣な瞳だけがこの場で妙にきらめいて見える。

何コレ。

いや、うちのクラスの副委員長、友枝君が大宮煌にベタ惚れなのは周知の事実なんだけど。いつか友枝がこんな暴拳に出るんじゃないかと、密かに恐れてはいたんだ。友枝は自分の気持ちに真正直だし、僕とは正反対で積極的な奴だ。

でも、押し倒されたことは想定内であつたとしても、彼が口にした言葉は、僕の頭を完全に真っ白にさせた。

友枝は僕を押し倒して、なんと言った？

『お前さ、大宮煌じゃないだろ？』

彼の口は確かに、そう紡いだ。

僕が聞きたい。友枝、お前こそ何者だと。なんでバレたんだ。なんでなんでなんで。

「な、なーに言ってるんですかあ。友枝君つてば嫌だなあ、冗談キツイですよお」

背中には冷や汗がふつふつと浮かんでいる。それでも僕は出来る限りに軽い口調で、言ってみる。棒読みになつてしまった上に笑

顔は固くなってしまった。自分の演技力のなさを心の底から呪いたい。

友枝の表情は崩れなかった。それどころか、肩を押さえつけてきている手の力をぐっと強めてきた。

「っ、痛う……」

あまりの痛みに僕の表情は歪む。

「ふざけるなよ偽者。バレバレなんだよ別人だつて」

いつものお調子者の友枝とは思えなかった。真剣な眼差しの友枝は、怒っているようにも見える。

「バレバレって、何を根拠にそんなこと……」

僕の声は震えてしまっていた。友枝の迫力を前に、抵抗する気力すら起きない。

「俺はな、さつきも言った通り大宮に惚れてる。ずっと大宮のことを近くで見てきた大宮煌マニアだ。大宮の誕生日、スリーサイズ、血液型、趣味、休日の過ごし方、使ってるシャンプーのメーカーなどなど彼女の全部知ってるんだよ。多分お前よりもずっとな。そして大宮の落ちた髪の毛も収集してる」

「気持ち悪ッ」

友枝のストーカー並の執着っぷりには青ざめてしまう。まさか友枝、大宮煌が美少女清掃員だってことまで知ってるんじゃないだろうか。

けれどその言葉で、僕はあることに気付いてしまった。

……僕は、大宮煌のことを、何一つ知らない。

「教えてやるよ、偽者。大宮煌はな、人のことを呼ぶ時に絶対下の名前で呼ぶんだよ」

「あ……」

そう言われてみれば、そうだ。彼女は、親しい親しくないに関わらず、人の名前を名字でなくて下の名前で呼んでいるじゃないか。ただのクラスメイトな僕にだって親しげに「永久くん」と声をかけてきて、僕は何度も頬が熱くなった覚えがある。きっとそれは、彼女の魅力の一つなんだ。

そんな彼女の拘りに気付いている人物なら、僕が名字で他人を呼んでいることを不審に思うのは当然だ。

友枝だけじゃなくて、それは保田さんも感じているのかもしれない。僕は更に青ざめていく。

「それだけじゃない。口調も全然違う。それにな、大宮はいつつもそんなにおどおどなんてしてない。クラスのみんなも大宮が最近別人みたいだってウワサしてるぜ？ 変なキノコでも食ったんじゃないかって」

……やっぱり。周囲が気付かない方がおかしいんだ。

僕と大宮煌は全く正反対の立ち位置にいたのに、僕が大宮煌を演じられるわけなんてない。そのことを改めて、思い知らされた。長く時間が経過すればするほど、きっと周囲の不信感は強まっていつてしまう。

僕は喉をこくり、と鳴らした。

「俺はな、大宮煌が実は腹黒サディスト女だつてことも知ってる。隠してるんだろっけ、俺ほどの大宮マニアなら見抜けるんだよ」

友枝の言葉に、僕は呆然と彼を見上げた。

誰も気付いていないと思ってた。少なくとも僕は、大宮煌の表の顔しか知らなかった。

なんでだろうか　僕は、ぎゅっと唇を噛み締めていた。

「君はそれでも好きなんですね……」

「俺はその性格も全部含めて大宮が好きなんだ。だから、別人の前が大宮煌のフリをしているのが許せない。俺の好きな大宮は、常に受け身で人任せのお前みたいな奴じゃないんだよ！」

友枝は感情的に喚き、押さえつけてくる力をどんどん強めてくる。僕は表情を歪め、友枝を仰ぐことしかできない。

「お前は何者なんだよ！？　本当のことを言え！！」

どうしよう。友枝は僕を大宮煌じゃないと、完全に見抜いてしまっている。

それでも。

それでも僕は、自分の正体を話すわけにはいかなかった。

僕とトワが入れ替わっている事実を話してしまうと

「僕は大宮煌です。別人みたいになつたとしても、大宮煌なんです！」

僕が強く言い放つと、友枝が少しだけ怯んだ。込めてきていた力が緩む。

「嘘だ！ お前は太宮煌なんかじゃ ほげうあつ」

喚く友枝のわき腹へと、唐突に横から蹴りが入った。
友枝は無様に吹き飛んでいった。

「な……！？」

何が起った。

僕は起き上がり、周囲をきよろきよろと見回す。

視界が悪い中で、遠くわき腹を押さえて悶え転がっている友枝が見える。

その友枝へと容赦なく蹴りを入れた人物は、僕のすぐそばで立っていた。

「刹那！ なんでこんなところに！？ なんで友枝君を蹴ったんだ！？」

まさかの刹那の登場だった。

僕は驚きのあまりに目を剥き、立ち上がって刹那を見上げる。

刹那が気だるそうな瞳をこちらに向けてきた。

「暇だったから昼寝してた。うるさいから蹴った」

「うわーなんて適当な理由！」

刹那は一応体操着を着用はしているものの、ずっと体育館倉庫で寝ていた様子だった。寝癖で髪の毛ははねてしまっているし、目も腫れぼったい。

「あの、刹那はさっきの話……聞いてない？」

刹那に先ほどの会話を聞かれてしまったのはまずいかもしれない。
刹那にまで疑われてしまうことに……

「話？ 聞いてなかった。話なんてどうでもいいし」

まあ、そうだよね。刹那はそういう奴だ。

刹那がくぁ、と猫のように大きな口を開けて欠伸をしている。本
当にどうでもよさそうだ。

「てめえ、辻か……！ 何しやがる！」

復活した友枝が立ち上がって喚き散らした。ずんずんと勢いよく
刹那へと迫っていく。

「俺は今大事な話をしてたんだよ！ 関係ない奴は引っ込んで……」

刹那が程近くに寄ってきた友枝に、ギリリ、と鋭い一瞥を向けた。
先ほどまでの眠そうな眼ではなくて、ゾツとするほど迫力のある眼
に、僕までもが硬直してしまう。

「それはこんなところに連れ込んで、嫌がる女の子を押さえつけて、
強引に聞き出すほどに大事な話なのか？ あ？」

「ごめんなさい俺が間違っていました！」

ススススーと友枝が、体育館倉庫の入り口へと後ずさっていく。
友枝の気持ちは嫌というほどわかった。刹那の睨みは、凄まじく
恐ろしかった。こんな顔を見せた刹那を、初めて目にした。

「くそう俺は諦めたわけじゃないからなあっ大宮！ 必ず正体を暴いてやる！ そして辻！ お前も仕返ししてやるから覚えてろよおおっ！」

こんなことが前にもあった気がする。負け犬の遠吠えを喚き散らした友枝が、すぐごと退散していった。

友枝が消えて、僕と刹那は体育館倉庫に二人で取り残された。なんとなく気まずくて、沈黙がおりる。

僕は汚れてしまった体操着の埃をぱんぱん、と払い落とし、乱れてしまった髪を整えた。色々ありすぎて、僕の頭の中はぐしゃぐしゃに混乱している。

「二度目だな」

「……え？」

僕は刹那を見上げた。刹那はまだ眠そうだったけど、僕のことを見ていた。

「こうして大宮さんが襲われてるのに遭遇するのは、二度目だよな。大宮さんは可愛いんだからもっと自覚を持って行動した方がいい」

「……」

刹那はずっと無表情だった。けど。

僕は呆然と刹那を見つめ続けてしまう。刹那の口からそんな言葉を聞くとは思わなかった。他人に全く興味がないと思っていた刹那が、まるで大宮煌を心配しているように言ってきた言葉は、僕の胸中を更に複雑なものにさせた。

先に視線を外してきたのは刹那の方だった。
入り口付近からは死角になる、体育用具の裏へと戻っていく。

「二度寝するわ。俺の出場種目は午後からだったよな。出番になったら起こしにきて」

「う、うんわかった。助けくれてありがとう、刹那」

「どーいたしまして」

刹那の姿は見えなくなっていたけど、ひらひらと振ってきた手先だけが確認できた。

僕は体育館倉庫から外へと出る。力がうまく入らなくて、扉にもたれかかって大きく息を吐き出した。

いまだに心臓がどくどくと激しく脈打っている。半袖の体操着なのに、冷たい風が心地良いほどに身体が熱くなっていた。

友枝に正体がばれそうになったことでの動揺もあったけど、多分それ以上に

「あれ、大宮さん。こんなところで何してるの？」

「つつつ」

トワが僕を見つけて、駆け寄ってきている姿が目にとまった。

僕の表情は、複雑なものになっていたと思う。それぐらい、今一番会いたくない人物に会ってしまった気分だった。

「おばあちゃんが大宮さんの代わりに活躍してくれてるでしょう？
僕も今見てきたけど、女子バスケの優勝は確実だね。よかったね、大宮さん」

僕の前までやって来て微笑を浮かべるトワを見ても、僕は笑うことが出来なかった。

表情が固くなってしまうているのが自分でも、わかる。

「どうしたの？ 何かあった？」

「……」

僕は、問いかけてくるトワに応えることができなかった。
言わなきゃいけないのに。友枝に正体がばれそうなこと。刹那に助けてもらったこと。

「あのさ、トワ。トワは、なんで刹那のことが好きなんですか？」

僕の口から出たのは、言わなきゃいけないと思ったことじゃなかった。

「何を突然……そんなこと聞いてどうするのさ」

トワの頬にわずかに朱色が差した。

「教えてください。知りたいんです」

僕の真剣な眼差しを前に、トワは軽く息を吐き出してきた。気まぐすうちに、視線を泳がせている。トワがこんな表情をするのは珍しい。

「別に面白くもなんともないよ？ ボクさ……小学生的頃に、知ら

ない変態親父に襲われたことがあってさ。さすがのボクでもピンチだったんだけど。その時、刹那くんが助けてくれたんだ。いつでも人に興味のない感じなのに、大事な時にボクを救ってくれた。だから……」

ああそうか。やっぱり。

大宮煌が刹那に恋をしている意味が、すごくすごく理解できてしまった。

「刹那くんはきっと覚えてもいない些細な出来事だろうけど。ボクにとっては、大事な思い出なんだ」

「……」

「何で黙ってるのさ？ らしくないとか思ってるんでしょう？」

照れ臭そうに睨んでくるトワを見ても、僕はうまく言葉が出てこなかった。

「大宮さん？」

僕の様子に首を傾げているトワの横を、無言のままでも通り過ぎていく。

なんでだろうか。胸がもやもやして、むかむかして、頭の中はぐしゃぐしゃで整理がつかない。

刹那は、君にとっての大事な思い出を、きちんと覚えているよ。そのことを言ったら、きっとトワは喜んだんだろうけど。

何も、言えなかった。

僕は、大宮煌の全てを好きな友枝にも、大事な時に救ってくれた刹那にも、刹那との思い出を嬉しそうに語るトワにも、嫌な気持ちを

抱えてしまった。

苦しくて、笑えない。

僕は一体どうしてしまったのだろうか。

この気持ちは　なんなんだろうか。

その後も沙良さんのめざましい活躍を、僕はずっとぼんやりとしながら近くで観戦していた。全く僕が球技大会に身が入らない状態でも、沙良さんが全て僕の代わりに出場してくれたので問題はなかった。

女子バスケット部門を見事優勝へと導き、ソフトボールでもエースとして出場し、やはり優勝。

残るは明日に持ち越しになっている、バレーの決勝戦と卓球個人戦だけだ。

そして学校からの帰り道、僕は沙良さんと二人で、帰路についていた。

赤く染まる景色を背景に、閑静な住宅街をトボトボと歩いて行く。

「青春のやり直しをしているようで楽しいもんだなあ。明日も任せときな、キラリ」

全く疲れた様子がない沙良さんが、笑顔でガッツポーズを見せてきた。

横を歩く僕は、沙良さんの笑顔にもわずかに口元が歪んだだけだった。

ずっとうまく笑えない。僕の心は晴れないままだった。

「……今日はずっと元気がないんだね。どうしたんだい？　悩んでいるんだったら、話してみな。お前さんが今話せるのはこの沙良さんだけだろう？」

沙良さんの言葉に、僕は立ち止まってしまふ。

「僕は、最低です」

沙良さんの全てを受け止めてくれそうな柔らかい表情を前に、思わず、言ってしまった。

「友枝に正体がバレそうになりました。友枝は大宮煌のことを心から大好きで、だから大宮煌が別人だつて気付いちやつて。ピンチの時に刹那が助けてくれました。それなのに、僕はそのことをトワに言えなかった。それどころか、友枝にも、助けてくれた刹那にも、嫌な気持ちを持ってしまいました」

僕は吐き出す。

自分の整理のつかない気持ちを、そのままに。

「それだけじゃないんです。球技大会のことだつて！ トワに頼んで、沙良さんに全部任せきりで！僕は今日ほど自分が嫌になったことはありません！最低で、情けなくて！」

『俺の好きな大宮は、常に受け身で人任せのお前みたいな奴じゃないんだよ！』

友枝の放った言葉は、僕の胸に深く突き刺さっている。

友枝の言うとおりだ。僕は常に受身で、人任せで。こんなにも、自分が嫌になったのは本当に初めての経験だった。

数歩先を歩いていた沙良さんが立ち止まって、振り返ってくる。束ねている銀色の長い髪も一緒にくるり、とまわった。

銀色の髪は夕陽に映えている。

そして沙良さんは、挑むような瞳を僕に向けていた。

「だったら、なんで戦わないんだい？」

「戦う……？」

「君は自分が情けないことを、はじめて本心から悔しく思っている。そして、負けたくないと思ってるんだらう？」

ああ、そうだ。

僕は、負けたくないんだ。友枝に、刹那に。自分自身に。自分の気持ちに戸惑いながらも、僕はしっかりと頷いた。

「そういう時はね、戦うんだよ」

沙良さんがニヤリ、いつもの素敵な笑顔を見せてきて、僕は息を呑んだ。

逃げることばかり考えていた僕に、戦うことなんて出来るのだから。うか。

「お前さん、友枝壱に正体を隠し通そうとしたんだらう？ それも充分な戦いだよ。お前さんが、煌のことを庇ってくれてるって私は分かってるよ」

僕は頬が熱くなっていくのを感じた。

「大宮煌が内倉永久と入れ替わった目的は、自分の身体を捨てて生き延びる為。そのことを周囲が知ったら、私の孫は殺人者として映るだらうからね。黙っていてくれてありがとう、永久君」

「そ、そんな大層な理由じゃ……」

「沙良さんは知ってるよ。お前さんは、本当は強い子だ」

沙良さんの言葉に、僕は胸が熱くなった。

拳を握り締め、正面に立つ沙良さんを強く見据える。

「沙良さん、明日の試合　全部僕に出場させてください！」

僕が言い放つと、沙良さんが笑顔で親指をグッと立ててきた。

「その言葉を待っていた。君はもっと、もっと、強くなれるぞ」

僕は強い光を瞳に宿し、頷いた。

球技大会一日目、終了。

第三話 期待の新星 美少女清掃員？

教室のドアを開けたら、そこにはチアガールがいた。

「あ、煌ちゃん、沙良ちゃん、おはよう」

本日の保田さんはショートボブの髪の毛をちょこん、と二つに小さく縛っている。冬真つ盛りなのにノースリーブに、ミニのプリーツスカート。まさにチアガールだった。

「ど、どどどどうえ？」

動揺のあまり日本語を忘れてしまった僕に向けて、保田さんがほんわりと蕩けそうな笑みを向けてきた。

「今日はわたし出場種目がないから、煌ちゃんたちの応援するね！えへへ、似合うかな？」

保田さんが照れ臭そうに両手に持っているポンポンを顔に寄せて、上目遣いだった。

めっちゃ頷いた。

ガクガク何度も頷いた。

首が止まらなくなった。

「まずは落ち着けキラリ」

沙良さんに言われて、僕の動きがようやく止まった。

……というわけで、球技大会二日目。

見渡してみると教室内にチアガールは何人もいた。猫の着ぐるみ

や何かのアニメのコスプレ生徒もいるし、大きな応援幕を引きずっている生徒もいる。どこから持ってきたのか和太鼓も置かれている。昨日に比べて、教室内はカオス状態だ。

本日は最高潮に盛り上がる競技の決勝戦が、目白押しとなっている。出場する生徒数は少なくなっていることから、各クラスは応援合戦の方に力を入れているのだ。これも星霜高校の伝統的な流れとなっている。

そんなカオス状態の中で、女子高生バージョン沙良さんと僕は、更衣室へと体操着に着替えに行った。

前日と同じような光景が繰り広げられ、一つの修羅場を越えた後。僕と沙良さんは保田さんたちチアガール集団と合流した。

僕の出場予定である卓球も女子バレーも、開始までまだ時間がある。もてあました時間を、僕らのクラスが出場する試合観戦にあてることにしたのだ。

グラウンドに出て行くと、半袖の体操着では鳥肌がたつほどに空気が冷たかった。

しかし本日も快晴。気持ちの良い青空の下で、野球の試合が既に始まっていた。

応援している群集の中に混じり、試合の様子をしてみる。ちょうど僕たちのクラスが攻めているところだった。

バッターボックスに立っているのは　なんと、トワじゃないか。ユニフォームを着て、バッドを構えているトワは真剣な眼差しだ。自分の顔なのに、男前に見える。

「あ、トワ君だ。頑張ってー！」

保田さんが僕の右隣で声を張った。僕はドキリとしてしまう。僕を呼んでいるわけじゃないんだけど、やっぱりトワ君という言葉には心臓が反応してしまう。

「トワは……あの子は、変わりないのかい？」

左隣に立っている沙良さんが、ぽつり、と呟いた。

僕は沙良さんを見遣る。腕組みしている沙良さんの目は、僕じゃなくてトワを真っ直ぐに見つめていた。難しそうに、眉根を寄せている。

「沙良さん、トワのことが心配で転校してきたっていうのもあるんですね」

「……まあな。あの子は絶対に顔に出さないから。自分の目で様子を確かめたかったのさ」

やっぱり沙良さんにとってトワは大切な孫なんだから、心配してるんだろう。

そんなに心配することはないと思うけど。

「トワはいつも通りですよ。そりゃあもう僕の身体での生活を、楽しそうに満喫していますから」

僕は少し口を尖らせながら、沙良さんに小声で愚痴っぽく伝えた。

「死ねえええ友枝あああー！」

バッターボックスに立つトワが謎の叫びを上げ、同時にバッドを思い切り振り切った。

カキンと爽快な音と共に、投球されたボールがバッドに当たる。ボールは風を切っていく。友枝へと一直線に。

「俺味方なんですけど!？」 ぐぼあっ」

一塁に立っていた友枝にボールが顔面ヒットした。友枝がドサリ、とその場に倒れていった。軟球でよかったね。

「……ほら。楽しそうでしょう?」

僕が沙良さんに向けて言うと、沙良さんは呆れた表情を浮かべて肩をすくめた。

「それが本当なら、いいんだけどね」

沙良さんは何をそんなに心配しているのだろうか。僕としては、トワにはもう少し大人しくしてほしくらいだ。

またも内倉永久が注目の的となってしまうことに憂鬱な溜め息を吐いて、僕は試合の方に目を戻す。

次にバッターボックスに立ったのは、刹那だった。欠伸をしながら、のそのそと面倒そうにバッドを構えている。

チアガール他、観戦に来ている女子たちから黄色い歓声が上がった。刹那の女子人気は、相変わらず凄まじい。

僕はチラ、と保田さんを横目で観察してみた。保田さんは試合に熱中しているけど、刹那自体には特に反応している様子じゃない。密かにホッと安堵の息を吐き出した。

って、昨日から僕、女々しいかもしれない。刹那に対抗心を抱くことなんて、今までなかったのに。

刹那はノロノロとバッドを振って、全部空振ってた。きっと真面目にやれば大活躍するんだろうけど、刹那が本気になることなんて滅多にお目にかかれない。刹那がバッターボックスから去っていき、僕は頭を振って雑念を振り払った。

そうだ、刹那に妬いている場合じゃない。今日からの僕は、一味違うんだ。

僕は決意を新たに、保田さんの方へとくるり、と身体を向けた。

「保田さん！」

「ん？ なんだろう？」

僕が呼ぶと、保田さんが僕を見つめてきた。

それだけで頬が熱くなって、決意が挫けそうになる。

しかしこんなことで負けるわけにはいかない。腹に力を込めて、僕は保田さんを見つ直ぐに見つめる。

「あのですね、今日から僕は君のことを保田さんじゃなくて、」

「あさひいー！」

僕の言葉は、邪魔者の大声に遮られてしまった。

味方席で友枝が、頬をおさえてこちらに向けて手招きしてきている。僕は眉を顰めた。なんで馴れ馴れしく保田さん呼びつけているんだアイツ友枝のくせに馬鹿じゃないのか。

「怪我したからこっち来て手当てしてくれー！」

何を偉そうに。僕は友枝を半眼で睨みつけた。昨日の一件で、友枝は僕にとって確実な敵と認定されている。

更に保田さんにまで友枝の毒牙がかろうとしている。沸々と怒りが込み上げてきた。

「本当に、いつちゃんはしょうがないなあ」

「え。保田さん、あの」

保田さんがあっさりと、友枝の方へと小走りに行ってしまった。
僕は遠くなっていく保田さんの背中に、虚しく手を伸ばした。

「友枝なんて大嫌いだ大嫌いだばかばかばか」

僕が涙目になってブツブツと呪いの言葉を吐き出すと、沙良さんに肩をぽんぽん叩かれた。

「まあまあ。次の戦いの場が待ってるぞ、キラリ」

沙良さんに言われて、僕は校舎の時計を確認する。

試合時間が近くなってきた。友枝と一緒にいる保田さんのことは気になったけれど、そろそろ行かなきゃいけない。

トワを見る。刹那を見る。友枝、はどうでもよくて、保田さんを見る。

僕の戦いは、これからだ。

「肉食系スマアアッシュュ！！」

卓球場にて。

弾丸のようなスマッシュに対戦相手は反応できず、球が卓球台で一度バウンドし、相手の横を高速で通り過ぎていく。

今日から僕は草食系なんて呼ばせない！ 勝利に飢えた肉食系だ！ ラケットをぶんぶん振り回し、射止めるように敵を睨んだ。

そうして僕は見事に卓球一回戦を快勝した。

横で見てくれていた沙良さんが一人、笑顔で拍手を送ってくれる。

「かつこよかったぞ、キラリ」

「そ、そうですね?」

後頭部をかきながら、僕の頬は自然と緩む。

僕だつてやれば出来るんだ。

トワを驚かせるくらいの大活躍をしてみせるんだ。

「美少女サアアアーブツ!!」

勝った。

「バックスクリーサイドスピイイインツ!!」

また勝った。

「くぁwせdrftgyふじこlp!!」

もはや言葉になつてない状態で勝利した。

……僕は順調に勝ち進み、本当に決勝戦まで来てしまった。

決勝戦ともなると、いつの間にか観客も増えている。

観客の中にチアガール保田さんも混じっていたのを発見。胸が燃えるように熱くなった。

みんなの応援の音が、わあわあと遠い。どくどく、と心臓が耳にあるように、鼓動の音が大きく聞こえてきた。

緊張で喉がカラカラに渴いている。運動で温まった身体は適度に火照っている。

次で勝てば、優勝だ。

審判による試合開始の笛で、決勝戦の相手がサーブを構えた。

僕も迎え撃つ為に姿勢を低くする。

ごくり、と喉が鳴った。同時。

ぐおおあああ、と、おぞましい咆哮が轟いた。

僕は身を強張らせ、ハッと顔を上げる。

僕の横を球が通過していくのが、視界の端に映った。それでも意識は聞こえてきた咆哮に向いてしまっていた。

リフューズの産声だ。よりによってこんな時に。ラケットを持つ手がじつとりと汗ばむ。

僕は焦燥の色を浮かべ、沙良さんの方を見遣る。

「試合を続けるキラリ！ あっちは私がなんとかするから！」

「でも沙良さんっ」

「お前さんが戦うのは、この場所だろう！？ 必ず勝てよ、キラリ！」

沙良さんが頼もしい言葉をかけてくれたことで、僕は少し落ち着きを取り戻す。

そしてすぐに沙良さんは走り出して、卓球場から姿を消した。

沙良さんが僕の代わりに戦ってくれる。試合を続けるのが、僕の役目だ。

僕は聞こえ続けるリフューズの声を意識から追い出す。対戦相手へと目を戻した。

卓球の決勝戦なんだ。沙良さんが言ったように、今戦うべきなのは、この場所だ。

僕は額の汗を拭い、ラケットを構える。

今度は来た球を打ち返すことが出来た。何度かラリーが続き、緊迫した試合が続く。

決勝戦ともなると相手も相当な強さだ。余計なことを考えている

余裕なんて

「何をしているの!？」

試合に水を差すように、切羽詰った大きな声が卓球場内に響いた。卓球場の全員が、声が聞こえてきた入り口へと目を遣る。それは僕も同様に、だった。僕はまたも球を打ち返すことができないで、立ち尽くしてしまった。

野球のユニフォーム姿のままのトワが、そこに立っていた。

全速力で走ってきたのか、荒い息で肩が大きく上下している。表情は険しく、真っ直ぐに僕を見ている。

「トワ……?」

靴を履いたままですかずかと卓球場内へと立ち入ってきたトワは、僕の眼前でようやく立ち止まった。

「なんでキミ、こんなところにいるの!？」

怒鳴りつけられて、僕は反射的に身を竦める。

「だって、今は試合が……」

「そんなものはどうでもいい!」

トワに遮られて、僕は情けない表情でトワを見上げた。

「沙良さんが、行ってくれたんだ、だから」

「だからって放っておくの!？ キミの役目はこんなところで試合す

ることじゃないんだよ!!」

トワは感情的に喚き、僕の二の腕をぐっと掴んできた。そのあまりの力の強さに、僕の表情は歪む。

そしてそのまま、僕は強引に引つ張られた。駆け出したトワに引きずられる。

卓球場にいた生徒も先生も呆然と事の成り行きを見ているだけだった。トワのあまりの迫力に、誰も何も言えなかったんだろう。

僕も、固まっていた。

こんなに怖い顔をしたトワを、初めて目にした。

抵抗もできなかった。ただリフューズの声が聞こえてくる方向へと、一心に足を進めるトワに引きずられていく。

僕は俯き、唇を噛み締めた。

トワは別に、僕が大宮煌として活躍することに期待なんてしていない。

ただ僕のことを、リフューズを清掃する道具としてしか見ていない。

そのことを、悲しいくらいに、痛感してしまった。

校舎内には、ほとんど人はいなかった。

廊下を全速力で駆け抜けていく僕とトワの足音が、大きく響いている。

そして、校舎を震わせるほどのリフューズの雄叫びが続いている。ちらほらと教室に残っている生徒の姿も数人見かけた。その生徒たちが全くリフューズの声が聞こえていないなんて、嘘みたいだ。

それでも、生徒たちの誰一人としてリフューズの声に反応していない。球技大会というお祭り騒ぎの中で、生徒たちのはしゃぎ声がリフューズの声に重なって聞こえた。

トワは無言で、僕の腕を引き続けている。トワの背中だけが見え

る。

僕はズキズキと腕が痛んだけれど、離してほしいとも言えなかった。トワの様子があまりにも切迫的で。

まるで、何かに憑かれているようだった。

僕たちは無言のまま、校舎の三階、突き当たりにある教室の前まで来ていた。リフューズの声が程近い。この教室は普段使われていない場所なので、生徒たちが出入りすることも滅多にない。リフューズが産まれる恰好の場だったのだらう。

ドアは開いていた。トワが僕を引きずったまま、中に踏み込んでいく。

目にも止まらぬ速度で、銀色の何かがリフューズに衝突していくところだった。

大きな音を立て、リフューズの黒い影が吹き飛んで壁にぶち当たる。ずる、とリフューズがその場に崩れた。

僕たちの前には、背中を見せて立っている人物がいた。

「沙良さん！」

髪留めを外したのか、足元まで伸びる、美しいストレートの銀髪が揺れている。そしていつの間に着替えたのか、水色の作業着姿だ。ブカブカしてしまっているのが、沙良さんの幼児体型を引き立たせている。

その沙良さんが身体を前に向けたまま、ちら、とこちらに鋭い眼を向けてきた。

「なんで来た！ お前さんには試合を続けろと言ったはずだぞ！」

「ボクが連れてきたんだ」

沙良さんの言葉に応えたのは、トワだった。

トワは僕の腕を掴んだままで沙良さんへと近づいていき、無感情な瞳で見下ろしている。

「美少女清掃員サラサラ。キミはもう現役引退してるんだ。リフューズの清掃は出来ない。引っ込んでいろ」

無機質な冷たい言葉が、トワの口から吐き出された。

僕は驚き、トワの横顔を仰ぐ。

「サラサラ……！？」

「いや、驚くのそこじゃないし」

トワに冷静に突っ込まれて、僕は改めて沙良さんの様子を観察した。

現在の沙良さんは若返っている。小学生並の容姿だし、美少女だ。って美少女なのは関係ないけど。

しかし若返っているのは見た目だけなのかもしれない、と気付く。沙良さんは苦しそうに肩で息をして、満身創痍の様子だった。トワの言うとおり、現役のままの動きは無理なのかもしれない。一度リフューズの攻撃が入ってしまったのか、右頬が少し腫れてしまっている。

沙良さんは足を引きずり、リフューズへと近付いて行く。

その途中で、振り返ってきた。哀しげな瞳がトワを見ていた。

「トワ、リフューズに固執するな。戦っているのはお前さんだけじゃないんだ。ここでキラリに変身はさせない。絶対にだ」

トワは僕の二の腕をぎゅうつと握り締めたままで、離してくれない。多分指の跡がくつきりについてしまっているだろうけど、それ

でも僕は何もトワに言えなかった。

トワがこの手を離したら、壊れてしまいそうに見えたから。リフューズが教室の端で、のそりと立ち上がった。やはり沙良さんの衝突攻撃くらいじゃ、全く動じている様子じゃない。

僕は産まれたリフューズを、改めて確認する。二本足で立っている熊みたいだった。……クマガタ？

「って、熊なんてこの辺に生息してないですよね？ どうやって成り代わるつもりなんでしょうかあのリフューズは」

「熊に似た何かと成り代わるんじゃないかな」

トワがあっさりと言う。

僕は驚愕に顔を強張らせた。駒沢先生が危ない……！

「大宮さん、変身するんだ」

トワの命令に、僕はトワの顔を仰ぐ。
冷たい瞳が僕を見下ろしていた。

「変身する必要はない……！」

沙良さんの厳しい声が飛んでくる。

僕は逡巡していた。どうすればいい。二人の強い意志に挟まれて、僕はどうするべきなのか答えが出せなかった。

トワに道具扱いされていることが、僕の中に迷いを生んでいる。

「こんな敵は私だけで充分なんだ！ さっさと試合に戻れ……！」

沙良さんがリフューズへと、向き直る。

そして手をバツと真っ直ぐ横に伸ばした。
手の中に光が集まっていく。沙良さんも、何もない状態で武器を
生み出しす技は体得しているようだった。

光が集束し、沙良さんの手の中に現れたのは 光るハタキだっ
た。

何それ弱そう。

布の部分が銀色のハタキを手に持ち、沙良さんが駆けだした。速
すぎて目で追うことができない。

「サラサラハタキッ」

やっぱり弱そうな響きが耳に届いた。スローモーションで再現。
沙良さんがリフューズの懷に飛び込む ハタキ連打 バタバタバタ リフューズに
光の粒子が降り注がれる リフューズ平然。あれ、全然効いてない
ね。

「うわああっ」

リフューズが片手で沙良さんを薙ぎ払った。
それだけで沙良さんが僕とトワの目の前まで、吹き飛ばされて戻
ってきた。

「くっ……」

沙良さんが片膝をついてよろよろと身を起こす。

「……ごめんなさい沙良さん。正直ヨワッ」

思わず言ってしまった。沙良さんが僕の顔をじろり、と睨み仰い
でくる。

「おばあちゃんは昔から清掃員としては弱かったんだよ。だから戦力にならないんだ。分かったでしょう？ キミが清掃するんだよあのリフューズを」

トワが焦っていた理由が、納得できた。

これはもう、変身して加勢するしかない。僕は胸元から星のペンダントを取り出す。

迷いはまだ胸をもちやとさせていた。

僕が戦っても、トワは僕自身なんて見てやしない。

「……変身、するな。お前さんを今変身させるわけにはいかない」

フラフラの沙良さんがそれでも意固地に、立ち上がった。背中を向けたまま、僕に言ってくる。

「おばあちゃんふざけてるの！？」

トワが怒りのあまりか、感情的に怒鳴った。

「ふざけてるのはお前だ！　なんで永久君を連れてきた！」

沙良さんが振り返って、トワをきつく睨み付けた。二人の怒りで燃えた瞳が交錯している。

「リフューズを清掃させる為だよ！　当たり前じゃないか！」

「そうやって利用するのか！　お前が永久君にどんな仕打ちをしているのか、分かっているのか！？」

「分かっているさ！　ボクはどう思われても構わないんだよ！　憎むなら憎めばいい！」

「なんでお前はそんなにも……っ」

「やめてください！」

僕は耳を塞ぎなくなる気持ちを堪えて、言い放つ。

なんでこの二人が言い争うんだ。そんなの、あまりにも悲しい光景じゃないか。

「僕、変身して戦います。構いませんから」

僕は取り出したペンダントの星を、握り締めた。

その時、リフューズが大きく雄叫びをあげて、こちらに突っ込んできた。

想像以上に早い！　変身が間に合わない！

「ピカピカキークー！」

可愛らしい声が、耳に届いた。

リフューズに強烈な飛び蹴りを入れた人物に、再びリフューズが吹き飛ばされていく光景を、眼前に見た。椅子や机が一緒になぎ倒されていく。

そうだ、もう一人いるじゃないか。

高速で教室に入ってきた保田さんは、既に美少女清掃員に変身済みだった。

桃色の波打つ髪、純白の作業着姿だ。僕らの存在に気付いていないのか、わき目もふらずにリフューズに突っ込んでいく。

すぐに立ち上がったリフューズに、連続で何度も蹴りを入れた。

リフューズが倒れて教室の床を滑っていく。保田さんはリフューズを跳び越え、何度も打撃をくらわせる。

リフューズの黒い巨体がユラユラ波打つ。突然の激しい連続攻撃に何も返せないまま、無力化してしまっている。

やっぱり保田さん、強い。

「ごめんね煌ちゃん遅れて！　ここまで弱らせたらもう後は清掃しちゃうだけだから、わたしに任せといて！」

間に巨体のクマガタがいて、小さい保田さんの姿は僕からは見えなかった。声だけが届く。

「今回回収しちゃうんだからね！」

保田さんの凜とした響きの言葉で、教室内の空気がピン、と張り詰めた。

「回収？」

僕は動きを止め、ことの成り行きを見守る。

それはトワも沙良さんも一緒だった。呆然と瀕死状態のリフューズを見ている。

「ピカピカ掃除機ー！」

掃除機……です、と？

僕は目を大きく見開く。掃除機で家電じゃないか。アリなのか。ずごくごくごとりとリフューズの大きな身体が、悲鳴と共に吸い込まれていってしまった。

リフューズが吸い込まれていき、保田さんの姿が現れた。保田さ

んは、両手に大きな掃除機を抱えていた。身体が隠れてしまう程の巨大な電化製品だ。ピンク色の掃除機の中に、嘔のように、大きなリフューズはすぽん、と全て飲み込まれた。

吸い取り口から光る粒が残滓としてふわふわ飛んだ。

リフューズは、ものの数秒であっさりと消えた。

僕は保田さんと目が合う。

保田さんは荒い息を吐き出し、汗を浮かべていた。だけど、やっぱり、笑顔だった。

「清掃完了だよ！」

その声を聞き届けて。

僕は心の底から、彼女を抱き締めたくなった。

第三話 期待の新星 美少女清掃員？

保田さんの活躍でリフューズの清掃が無事に済み、僕は急いで卓球の決勝戦に戻った。

けれど、時既に遅し。僕は棄権扱いになってしまっていた。

その後に控えていたバレーの決勝戦でも、僕は太田煌として出場したものの、大した活躍はできなかった。優勝できたからよかったけれど、はりきっていた僕としては、不完全燃焼だった。

あんなにも気合を入れて臨んだ球技大会は、あっさりと終わってしまった。

それでも僕らのクラスは大いに盛り上がったし、沙良さんという存在が、みんなからの太田煌への意識を背けてくれていた。たった二日間の転校生だったけど、沙良さんは人気者になっていた。帰り際には生徒たちに囲まれてしまっていたほどだ。

僕はそんな沙良さんを遠くから見ている。

……僕の心の端っこにずっと引っかかっていたのは、トワのことだった。球技大会に力が入らなくなってしまうくらい、トワのことはかりが気になってしまっていた。

トワはリフューズが清掃されたのを見届けた後は、すぐにその場から去って行ってしまった。その後もずっと姿を見せなかった。

僕や保田さん、沙良さんに何一つ言葉をかけることもなく。

二の腕がズキズキと疼いた。くつきり残った指の跡を見る度、切ない気持ちになってしまった。

トワに利用されているのは分かっている。

でも、少しは僕自身を見てほしいなんて思ってしまうのは……贅沢なんだろうか。

「今日はよく頑張ったね、二人とも」

夕刻、家への帰り道。昨日と同様に夕焼けに染まる住宅街を歩いている僕と沙良さんに、今日は保田さんも一緒だ。

保田さんの家は全然別方向なんだけど、沙良さんが大宮医院に寄るように誘ったのだ。

僕としてはドキドキだ。好きな女の子と一緒に下校なんて、憧れのシチュエーションじゃないか。

そして緊張で顔をカチコチにさせた僕と、スキップしそうになるんな保田さんに向けて、沙良さんが声をかけてくれた。

「沙良ちゃんが煌ちゃんのおばあちゃんの沙良さんだなんて、全然気付かなかった。沙良ちゃんが美少女清掃員姿でいたのを見た時、すごいびっくりしちゃった私」

保田さんがのほほん、と言っている。

「え!？」

気付いてなかったのか。沙良さん、若返ってはいるものの、けっこうそのままなだけ。大宮煌が別人のように不自然なことも不審には思っていないみたいだし……保田さんってもしかして、究極に鈍いのか？

「しかもなかなかリフューズのいる場所が特定できなくて、いっぱい探しちゃった。まだまだだなあ、わたし」

保田さんって究極に鈍い上、案外間抜けてるのか？

まだまだ僕は保田さんのことを、分かっていないのかもしれない。もっと知りたいと思う。

どんな保田さんでも、僕にとっては大好きな女の子に変わらない。きつと知れば知るほど、もっと好きになっていく。

……なんて、自分の思考に赤面していると、横にいる沙良さんが深く息を吐き出した。

「まあ今日で女子高生沙良さんは卒業だ。なかなか楽しかったよ」

沙良さんの言葉に、僕は寂しい気持ちになった。

この二日間での沙良さんの存在は、僕にとって本当に救いになってくれていた。感謝の気持ちで胸がいっぱいだし、できればずっと一緒に高校生活を送って欲れないだろうか、なんて望んでしまっている。無理なのはわかってはいるけど。

僕の泣きそうに情けない表情に気付いたのか、横で歩く沙良さんが肩をポンポンと、叩いてくれた。

「大丈夫。お前さんのそばには、最強のピカピカがいるんだから。あさひ、これからもキラリのことを頼んだぞ」

「もちろんです！」

嬉しそうに言っている保田さんの横で、しかし僕は肩を落としてしまう。

「僕は……今日、なんにも頑張れませんでした」

僕はぽつりと呟く。沙良さんに労いの言葉をもらうほど、今日の僕は頑張っていない。

何もかもが、全然思い通りにはいかなかった。

格好いい姿を見せる予定だったのに。沙良さんにも、保田さんにも……トワ、にも。

保田さんが横を歩いていることで僕の心中は浮ついた気持ちもあったけれど、それ以上に意気消沈の方が大きかった。自然と視線が

地面にまで落ちてしまっている。

保田さんがタタツと小走りにスカートを揺らし、僕の前にまわりこんできた。

両手を握られて、ドキリと鼓動が跳ねた。

僕は顔を上げて、保田さんを見る。

「今日の煌ちゃん、すごく頑張ってた！わたしには分かったよ！どんな結果でも、がむしゃらに頑張ってる姿って、すごかった！こいと思うんだ！」

「……っ」

涙で視界が滲んでしまった。

やっぱり保田さんは、素敵な女の子だと思う。

「ね、煌ちゃん！これからも頑張ろうね！」

「はい！」

「ね、煌ちゃん！一緒にお風呂入ろうか！」

「はい！……っっっ！？」

僕は保田さんを凝視したまま、固まった。
今、彼女はなんと？

「汗いっぱいいたし、こういう時はお風呂お風呂！一緒に入るの、久しぶりだよねー」

笑顔の保田さんに、僕はどう言えいいのか
いや無理無理無

理無理なんて言える雰囲気でもないじゃないかどうすればいいんだ
大宮煌の身体だってまともはまだ見れないのに保田さんと一緒に風呂に入るなんてそりゃ嫌なわけないけどそういうのはなんというか
違うんだ 混乱極まって、ぐるぐるとまわる視界で、沙良さんに
助けを求めて眼差しを向けた。

「ぐつどらつく！」

親指立てて笑顔向けてきても、絶対一生恨んでやる。

「ねえ煌ちゃん？ なんですつとそっち向いてるの？」

保田さんが不思議そうな声で聞いてきた。

大宮医院の裏、僕と沙良さんの棲家に帰ってきてからは急展開だった。とりあえずはお風呂お風呂、と保田さんに半ば引きずられるカタチで、僕は気付けばお風呂の中にいる。

僕は何よりもまず、保田さんより先に行動しなければならなかった。脱衣場で凄まじい速度でコートと制服、下着を脱ぎ捨て、すぐ様湯を張った浴槽に飛び込んだ。ずつと目は閉じてた。人は追い詰められると、速度を超過するとよくわかった。

そして背後に、保田さんが湯にとぶんと浸かった気配を感じた時、心臓が破裂するのではないかと思った。

僕は湯船に浸かって、ずっと保田さんに背を向けて体操座りを続けている。

すぐ後ろに、保田さんが生まれたままの姿で入っている。

湯気が充満する空間、ユラユラと揺れるお湯の感触を身体に感じる。

保田さんの裸を見たくないわけじゃない。というか見たい。正直、見たい。

でもそれは反則だ。僕の信念に反する。大宮煌の身体だって、絶対見ないと心に誓っているんだ。

ぎゅっと目を瞑り、ひたすらに誘惑との戦いを続ける。

ダブルの誘惑と湯の熱さに、頭がクラクラとしていた。意識も朦朧としつつある。

「あったかいねー」

ほわほわとした保田さんの声が、浴室に響く。

僕はぶくぶくと顔を半分湯に沈め、ひたすらに小さくなっていた。でも保田さんと二人きりなのは、チャンスなのかもしれない。この機会を逃してはならない。僕は今日から戦うって決めたんだから。僕は意を決して、ざば、と顔を上げる。

「あの！ 保田さん！」

「なあに？」

「僕は今日から君のことをあ、あさひって呼びます！ いいでしょうか！？」

保田さんの顔は見れなかったけど、僕は思い切って言い放った。

「……もちろんだよ！ そう呼んでほしい！」

保田さ、じゃなくて、あさひの弾んだ声が届いた。僕の胸は熱くなる。この状況で既に沸点に達している気もするけど。

些細なことだけど、一歩前に進めた。

僕はぐっと拳を握りしめた。この調子で、ずっと気になっていたことを思い切って聞いてみよう。

「あ、あさひにもう一つ聞きたいことがあったんです。あの、友枝壺とあさひはどういう関係なんでしょうか!？」

「あれ? 知らなかったっけ? わたしといっちゃんは、幼馴染だよ? 小さい頃からずっと一緒に育ってきたから、兄妹みたいな関係なのかなあ?」

「そ、そうだったんですか」

幼馴染だったのか。僕はほーっと息を深く吐き出す。

友枝壺の存在は、これからも油断ならない。まだ僕のことを大宮煌じゃないと思っているみたいだし、これからの学園生活の先が思いやられる。

それでもあさひと友枝の関係が大したことがなかったのは、安心した。ずっと、正直ずっと心に引っかかってたから。

「ね、煌ちゃん」

あさひが僕の背中に声をかけてきた。

「なんででしょうか?」

そういえば一緒にお風呂に入るまでは乗り越えられたけど、これから僕、どうするつもりなのだろうか。

お風呂といえば、身体を洗わなければならない。

ま、まますか、いつも大宮煌とあさひは洗いつことかしてるんだろうか!?

もわわ、と恐ろしいピンク妄想が脳内を支配した所為で、僕の顔面は更にヒートアップ。

「わたしね、煌ちゃんにあんまり無茶してほしくないんだ」

深刻な響きをもったあさひの言葉に、僕は脳内妄想を追い払う。
表情を引き締めた。

彼女が心配しているのは、大宮煌というがむしやらかな少女のことだろう。沙良さんと同様に、あさひもやっぱり大宮煌を心配している。

その気持ちだが、今日の出来事で、少し理解できてしまった。

「煌ちゃんがいつか、どこかに行っちゃうんじゃないかって心配なの」

いつものあさひの声じゃないみたいだった。

泣いているのかと思うくらい、切ない響き。その表情を見ることが出来なかったけれど、きっと眉を下げて瞳を潤ませているんじゃないかと思う。

僕までもが、胸が苦しくなってしまう。

「だから、だからね。あんまりリフューズに……ヒトガタに、執着しないでほしい」

「ヒト、ガタ……」

ヒトガタ。

その存在の予想は、容易にできていた。

今まで遭遇した成り代わるリフューズは全て動物ばかりだった。けれどこの街に多く存在しているのは、何よりも人間なんだ。だったら、ヒトガタのリフューズだって存在するんじゃないかって。

「ヒトガタは強すぎて、わたしたちには清掃することができない。もしヒトガタに遭遇したら、わたしたち清掃員は逃げなきゃいけない。それが暗黙のルール。だけど……いつか、煌ちゃんがヒトガタに立ち向かっていくんじゃないかって、怖いのに」

……僕はなんの言葉も返せなかった。

僕が死にかけている大宮煌と出会ったあの夜　きっとあの夜、大宮煌はヒトガタに立ち向かっていったんだ。そして、確実に死ぬ程の負傷をしてしまった。そして、生き延びる為に都合よく現れた内倉永久の身体を奪った。

そんなこと、言えるわけじゃないか。

僕は俯く。

背中にふにや、と柔らかい感触を感じた。

感じ　　たあ！？

「煌ちゃん、お願い。どこにも行かないで」

後ろからぎゅっと抱き締めてきた、あさひが小さく、切実な呟きを漏らした。その声が遠くなっていく。

臨界点を越えてしまいました。

鼻血がつーと鼻先から流れ落ちていくのを感じた。浴槽を血に染め、僕はそのまま湯船に沈

「煌ちゃん！？　煌ちゃん大丈夫！？」

遠く、あさひの声が聞こえる。

いつか、あさひに永久君と、本当の名前を呼んでほしい。場に合わない感想を抱きつつ。

僕は意識を、自ら手放した。

……意識が徐々に、戻ってきた。

目を開いてみても、視界は暗いままだった。どうやら僕の目の上に、濡れタオルがのせられているようだ。火照りきった身体と、のぼせた頭に冷たいタオルの感触は心地良い。

そして後頭部には、腿の柔らかい感触があった。

僕はもぞ、と身を微かに擦らせる。

「気付いたかい？」

沙良さんの優しい声音が耳に届いた。

沙良さんが僕に膝枕をしてくれているのだと、状況を理解する。服も着せてくれたようだ。

「あさひは……？」

「キラリのこととは私が診とくからって、帰らせたよ。よかったね、あの子が究極に鈍くて。普通だったら拳動不審すぎて、不信感を抱くところだ」

「ははは……」

僕は乾いた笑いを漏らす。

それにしても貴重な体験をしてしまった。一生あの感触は忘れられそうにない。思い出すだけで、またも頭が沸騰しそうだ。

「なあ永久君」

沙良さんが僕の本当の名前を呼んでくる。そのことに安心感を覚えた。やっぱり僕は内倉永久で、元に戻りたいという気持ちは変わ

らない。

沙良さんだけが僕を永久と呼んでくれることが、唯一の救いになっている。

そうじゃないと、僕は自分を失ってしまいそうだ。

トワにとってのただの道具として存在するだけに、なってしまうそう。

「煌のことを、怒らないでやってほしい」

「……僕は別に怒ってないです」

降ってきた沙良さんの言葉に僕はぼつり、と応えた。

怒ってるんじゃない。寂しいんだ。

トワに、道具なんかじゃなくて、一人の人間として見てほしい。でも。

今日の一件、そして先ほどのあさひとの会話で、僕の中には違う感情が芽生えていた。

「あの子はね、リフューズに……ヒトガタのリフューズに両親を奪われたんだ」

……そうだろうな、という予感はずっと前から感じていた。

沙良さんの沈痛な言葉に、僕は唇を引き結ぶ。

トワの異常なまでのリフューズへの執心。

両親の不在。

そして、ヒトガタという存在　全て、パズルのピースが合わさるようにかつちりとはまってい。

「私の娘、つまり煌の母親は、ヒトガタに身体を奪われた夫に殺されたんだ。そしてそのヒトガタも、機関によって片付けられた。全

て、煌の目の前で起こった惨事なんだよ。まだ七歳だったあの子の目の前でね」

どんな気持ちだったのだろうか。

目の前で父親が母親を殺していく光景。そして父親までもが、殺されてしまう光景。

想像もしたくなかった。

「だから、煌はリフューズに両親を奪われた復讐心にずっと囚われてしまっている」

「……」

僕には何も言えない。

僕みたいにくくぬくと平凡で平穩に生きてきた人間が、何を言えるというんだ？

「他のことが見えなくなってしまうくらいに煌の心はずっと、闇の中なんだよ……」

沙良さんが苦しげに吐き出した言葉は、最後の方は搾り出しているようだった。

ずっと目隠しされている僕に、沙良さんの表情は見えない。

それでも、沙良さんの気持ちは痛いほどに伝わってきた。

僕の寂しいと思う気持ちなんて、ほんの小さなものだ。

僕は……大宮煌の心を、少しでも救いたいと願っていた。

芽生えた感情で、心がどうしようもなく熱くなっていく。

きつとがんじがらめに囚われて、抜け出せない憎しみの感情の中に、彼女はずっといる。

闇の中に閉じ込められている彼女の心を、

僕は、救いたい。

第四話 サドとテストと清掃員？

「ね、煌ちゃん。トワ君と付き合ってるって本当？」

球技大会から数日経った、ある日の朝の教室。開口一番、あさひから飛び出した言葉に僕は心臓が飛び出しかけた。

「な、なななああんですってええ！？」

悲鳴に近い絶叫を上げている僕の横で、あさひが無邪気に瞳をくるくるさせている。

「だ、だだだ誰がそんなふざけたことを仰りやがったんですか！？」

僕は思わずあさひへと詰め寄ってしまった。それほどに驚愕の言葉だった。僕とトワが付き合ってるって、どこをどう見たらそういう展開になるというんだ！？

そこに、僕らにぬっと近付くもう一つの影があった。

「誰が言ったも何も、もう全校生徒公認の仲になってるぜ、お前らとほほほほ」

友枝だった。半分泣いている状態で、情けなく眉を下げている。

「大宮さあ、球技大会の卓球の決勝戦で、痴話喧嘩してたんだろ内倉永久と。それを見た生徒たちの口から口へ、瞬く間に我が校のアイドル大宮煌に恋人ができたってひろまったんだよ。頼む！ 違うと言ってくれ大宮！！」

「違うんです」

僕はきつぱりと言い放ったのに、友枝は両手で顔を覆い隠して、わああんと、嘆いている。

「そんな優しい嘘なんてつかなくてもいいんだ！ 大宮が最近別人みただったのも、内倉色に染め上げられてたからなんだよなあっ！ 俺は、俺はとんだ勘違いをしてた大馬鹿野郎だ！ 笑うがいいさあー！！」

「あはは」

「笑うなよこんちくしょう！！」

どうしろと。

でも……大宮煌と内倉永久が付き合っているという噂のおかげで、友枝からの僕を大宮煌ではないという疑いは晴れたようだ。

毎日友枝のネットリジツトリと観察してくる眼から逃れられるのは、ホッと一息……じゃない！

僕の横には、ニコニコしているあさひが立っている。

僕とトワが付き合っていると、勘違いしている、のだろうか。ダメだダメだダメだ。他の人間にはどう思われても仕方ないけれど、あさひだけには誤解されたままでいたくない。

僕は首をぶんぶん振った。沙良さんが高い位置で縛ってくれたツインテールが、一緒に揺れた。

「僕はトワと付き合ってなんかいいんです！ ただの友達なんです！」

「ただの友達が毎日家まで押しかけて、二人きりで過ごすのか？
そのことだってもう公然の事実となってるんだぜ」

友枝の恨みがましく吐き出された言葉に、僕はピシリと固まってしまった。

「え？　なんでそのことまでみんなに……」

「俺を甘く見るなよ大宮。こっそり後をつけるなんて俺の才能を持つてすれば、簡単なもんだぜへっへっへ」

ストーカーの才能か。

「そして俺は見てしまったのだ！　大宮が内倉と仲睦まじく下校して、一緒に入って行ったのはなんと内倉の家！　そして数時間経って大宮が家から出てきたのを確認した俺は、泣きながら家へと走り帰り、次の日に全校生徒に言いふらしてやったのさあああ！」

お前が犯人か。

……しかし、困ったことになってしまった。主に友枝の所為で、僕とトワの関係が深いということが確定付けられつつある。

僕はトワの座る遠い席へと、目を移してみた。

球技大会以来、僕とトワの関係はぎこちなくなってしまうている。毎日トワの家に行って勉強する習慣は変わっていないけど、トワは必要以上に会話をしない。僕もうまく言葉が出てこないで、二人でいても無言の時間ばかりが増えている。

当のトワは、クラスメイトたちの注目の的になっていることなど我関せずで、読書に耽っている。僕が内倉永久の身体だった時は、休み時間に読書をよくしていた。トワはその習慣を踏襲しているらしい。そこだけは僕のフリをしていてくれる、唯一の面かもし

れない。

僕の視線に気付いたのか、トワが息をついて本を閉じた。どうやら僕たちの会話が聞こえていたらしい。というか、クラスメイト全員が僕たちの会話に耳をそば立てていることに、今更気付いた。

トワは表情一つ変えず、僕らに近付いてくる。

始業の鐘が鳴る前、教室にいるクラスメイトたちの注目は存分に集まっている。トワが何を言うのか、みんな固唾を吞んで見守っている。

トワが、僕の前に立った。

「ボクのお姉ちゃんが、大宮さんに家庭教師をお願いしたんだ。毎日健全に勉強してるだけだよ。疑ってるのなら、今日一緒にボクの家に来るかいい変態野郎」

「変態野郎って何様じゃお前はああ!!」

トワが飄々と言い放った言葉に、友枝が食いついていく。しかし次の瞬間、刺すような冷たい眼差しをトワに向けられた友枝は、すぐに小さくなった。何故か僕の背中にもわって、隠れてトワを盗み見ている。

「そんなに言うなら、お前の家に行ってやってもいいんだぜ?」

蚊の鳴くような声で呟いても、トワには聞こえていない。

「いいなあいっちゃん。わたしも煌ちゃんやトワ君と一緒に勉強したいな。二人とも優等生だもんね」

あさひが口を尖らせて、友枝なんかに羨望の眼差しを向けている。前の内倉永久は優等生というか、ただ単に地味な生徒ただだった

けど。あさひの認識では、内倉永久という男子も優等生に映っているらしい。なんだか照れるなあ。僕がデレデレと、頬を緩ませていると。

「じゃあ、あさひも一緒においでよ。一緒に勉強しよう」

トワのやつ、言いやがりましたよ。なんとなく流れるに言っんじやないかなとは思ったけど！

僕はジト目で、トワを恨みがましく見つめる。

トワは悠然と笑顔で、嫌な状況を作ってくれた。僕とトワとあさひと友枝なんて、ともに勉強会なんてできるとは思えない。少なくとも僕は、平常心で勉強なんて、絶対に無理だ。

「わあ。やったあ言ってみるもんだね、いつちゃん！ じゃあトワ君、今日はよろしくお願いします」

ぺこり、と丁寧な頭を下げているあさひ。

僕は隣で頭を抱えた。

「ボクが手取り足取り懇切丁寧に優しくネツチリとあさひに勉強を教えてあげる」

トワはまったく揺るがない笑顔を、あさひに向けている。僕はぎゅうと唇を噛み締めた。トワは絶対、僕に対しての意地悪で言っている。

爽やかに笑い合うトワとあさひ。

僕と背中に張り付いている友枝のいる空間だけが、どんよりと淀んでいるようだ。

トワがリフューズ絡み以外で動じないのは分かっている。けど、僕はっかりがいつも動揺したり、慌てているのは正直悔しい。

たまにはトワが動揺している姿も見てみたい。

「なんだろう、俺、最近内倉にヒドイ言葉を言われると胸がトキメくんだ。病気かなあ」

僕のセーラー服の肩襟を持つている友枝が、恐ろしい眩きを漏らした。僕の耳にしか届かないほどの小声だったけど、全身に鳥肌立った。

「びよ、病気です、それが真性のマゾです。離れてさっさと死んでください」

「Mの自覚はあったけどなあああ」

友枝が、床に四肢をついて打ちひしがれている。僕は寒気で身を震わせた。トワ、頼むから僕の身体で友枝のハートをキャッチしないでほしい。恐ろしい妄想が脳内で勝手に繰り広げられてしまうんじゃないか。

その時

「面白そうだな」

戯れる僕らの輪の中に、乱入してきた声。

僕たちは全員、その声の主へと目を向けた。
刹那だった。

「俺も行く。最近トワの家に遊びに行つてなかったしな。というわけ、よろしくなトワ」

珍しく起きて状況を見ていたらしい、刹那が口の端を上げて言い

放ってきた。

刹那はトワの横に立ち、その肩を抱いた。

「……うあ」

あ、トワが動揺した。

どうしてこうなった。

うららかな午後の陽射しがぼかぼかと差し込む、内倉永久宅。一階のリビングには、大きめのローテーブルの上に高校生たちが制服姿のまま各々のノートをひろげて、勉強会が開催中だ。

「ね、煌ちゃん。問三の答えわかる？」

僕の横には、ほぼ密着状態であさひがぺたりと絨毯の上に座っている。それだけでももう動悸が激しくて勉強に集中なんてできないのに。

「ああ、それはこうやって解いていけばいいんだよ」

あさひのノートをのぞきこんで口を挟んできたのは、トワだ。そして正面、やる気のない状態でテーブルに顔をのせ、ひたすら僕を観察している友枝。

その友枝の横には、刹那がいる。刹那は友枝より更にヒドイ。既に爆睡状態でテーブルに顔を埋めている。お前何しにきた。

「みなさんお茶が入ったわよー」

内倉永久の姉である久遠が、リビングに入ってきた。ご機嫌な様

子で、相好を崩してみんなに愛想良く言ってきた。
生気の抜けていた友枝がガバリ、と顔を上げた。

「わざわざありがとうございますお姉様！！ 言ってくれたらお手
伝いしましたのに！！」

友枝が姉の元へと走り寄って、周りをぐるぐるまわっている。尻
尾を振ってじゃれている子犬みたいだ。

「じゃあこれ配ってちょうだい」

「もちろんですお姉様！！」

みたいだ、じゃなくて既に姉の犬に成り下がったらしい。

テーブルの上へと、友枝の手によって姉が淹れてくれた紅茶が配
られていく。空になったトレイを手に持ち、姉がトワに近付いてい
った。

「お勉強頑張ってね、トワ」

姉がニツコリとトワの顔をのぞきこみ、語りかけている。いつも
思うことだけれど、他人がいる時の姉はまるで別人のようだ。

「うんもちろんだよ、お姉ちゃん」

トワも目を細め、笑顔に応じている。

この二人、なんだかとても仲良しの姉弟になったなあ……なん
て冷静に傍観してしまっている僕がいる。

「トワ君のお姉ちゃん、すごく美人だよね」

横であさひが僕に耳打ちしてきた。僕は顔を火照らせながらも、少し鼻高々な気分になる。誰がみても、僕の姉は美人だ。友枝も姉に夢中になっているおかげで、僕への熱い眼差しが今日は緩んでいることだし。

「煌ちゃんが勉強を見ててくれて、すごく心強いわ。これからよろしくね、煌ちゃん」

姉が僕へとぺこり、と頭を下げてきた。

「は、はい……」

僕は複雑な心境におそわれ、うまく表情がつかれずに変な顔になってしまった。

……今の僕は、大宮煌だから、彼女は僕の姉ではない。

他人行儀な笑顔と、お辞儀。そして姉は空になったトレイを持って、退出していった。

寂しい、だなんて。前は一度も思わなかったんだけど。僕のお姉ちゃんは、トワに奪われてしまった。

もう、姉の本当の表情を見ることがもないのかな。

毎日虐められていたことをずっと悔しく思っていたはずなのに、今となつては、姉に虐められたいなんて思ってしまったている僕がいる。変態じゃないよ。

僕は溜め息を一つ、思考を切り替える為にノートへと目を戻した。冬休み目前、明日からは期末テストが始まる。

大事な期末テストの為に、こうして一同集まって勉強会を開催の運びとなったのだ。本来の目的は勉強だ。複雑な人間関係を憂いている場合ではない。

僕はガリガリとノートに数式を書き込んでいく。勉強に集中して

しまえば、今の状況だって特に気にならなくなってきた。

しばらく黙々と、お勉強の時間が続いた。

分かったのは、あさひがそんなに勉強が得意ではないということだ。一問一問につつかえては、横で唸っている。

「それにしても、コイツ何しに来たんだ？」

友枝が沈黙状態に飽きたのか、口を開いた。横で寝ている刹那の頭をツンツン突っついている。

「起きちゃうじゃないか。やめろ変態触るな穢れる」

「そこまで言わなくても！？」

トワに言われて、友枝が衝撃を受けている。僕はそのやり取りを見て、少したけムツと眉を顰めてしまった。

僕は刹那の後頭部を見つめる。

休み時間だろうが、授業中だろうが、刹那はよく寝ている。そして唐突に起きだしたかと思うと、僕に構ってきたりする。友人ながらに、読めない人間だ。しかし僕は刹那とは何故だか気が合う。悲しいかな、姉に培われた僕のM要素はどうしてもきつい発言を繰り返す人物を引き寄せてしまうらしい。そしてそんな人間が嫌いじゃないと思うってしまう自分が、一番危ないのかもしれない。

それにしても、トワはやっぱり刹那に恋してるんだなあ、と思いき知らされる。明らかに僕や友枝に対する態度と違いすぎる。

なんでだか、僕はそのことを思い知る度に、胸がムカムカとしてしまうのだ。

あさひはまだ隣で唸っている。

「いい参考書がボクの部屋にあるから、あさひに貸してあげるよ。」

ほら行くぞ友枝」

トワが唐突に立ち上がって言うてきた。

「なんで俺まで!？」

「うるさいから」

トワが半ば無理矢理に、あさひと友枝を連れて二階に上がっていった。しまった。

……僕と刹那が、二人で取り残されてしまった。

広いリビングはしんと静寂に包まれた。

刹那の為に、そこまで気を使わなくても。僕は刹那の後頭部を見つめたまま、深く深く溜め息を吐き出してしまふ。

「なんだよ大宮さん」

僕の耳に届いたのは、あくび混じりの刹那の声だ。

刹那は顔を上げて僕を見つめてきた。深い眠りから覚めたらしく、身体を伸ばして関節を鳴らしている。

「あ、ごめん起こしちゃったかな」

僕は動揺で上ずった声を刹那へとかけた。

大宮煌の身体が、意思に反して激しく動揺している。刹那に恋してるのは大宮煌であって、決して僕ではないのに。僕は普段通りに刹那と会話をすればいいんだ。深呼吸して、なんとか落ち着きを取り戻す。

「刹那は勉強しないの？ 明日からテストなのに、あんまり焦って

ないよね」

僕は刹那に向けて愛想笑いを浮かべる。刹那は眠そうで、やる気のなさそうな表情だ。

「そういう大宮さんも余裕だな。みんなと一緒に勉強なんて、正直集中できないだろ。しかもトワに勉強を教えるとか言ってたし」

「そ、そんな大層なものじゃないよ」

「さすが学年首位は違うな」

予想外に、刹那は言葉を重ねてきた。僕は後頭部を搔く。すっかり忘れていたけど、大宮煌は常に学年首位の成績なのだ。そして目の前にいる刹那は、常に二番だ。刹那がそんなことに関心を持っているなんて意外だ。いや、ただ単に僕をからかっているだけなのかもしれない。

「そういえば僕、学年一番だったっけ。でも刹那は努力しないでもいい成績なんだよね？　きっと真面目に勉強すれば僕なんてすぐに追い抜いちゃうよ。僕は見えないところで勉強ばかりしてるから余裕なんて」

「じゃあ勝負しよう」

刹那が僕の言葉を遮り、言い放った。僕の後頭部をガリガリと咥る勢いだっただ手が止まる。勝負？

「どっちが一番を取るか、勝負だ。俺が努力すれば、大宮さんを追い抜けるのかもしれないんだろ？」

少し目を細め、刹那が聞いてくる。珍しく刹那の表情が変わった。楽しそうに僕を真っ直ぐ見つめてくる。

「う、うん、僕なんて簡単に追い抜けちゃうよ。だから勝負になんてならないよ」

僕に大宮煌の成績を維持する自信はない。今回の期末だって、毎日トワのスパルタ家庭教師の下でなんとか今までよりも少しいい成績を残せるかもしれない、という程度だ。

「面白いじゃん」

刹那は今度こそ、口元を吊り上げ、笑んだ。
どきり、と鼓動が跳ねる。

「勝負には、やっぱり罰ゲームが必要だよな。そういうのがないと、お互い本気になれないし」

「罰ゲーム？」

僕は眉を顰め、問う。刹那は全く僕の話聞き入れる気はないらしい。勝手に勝負することで話を進めてしまっている。刹那の性格には慣れているつもりだったけど、やはり戸惑いを隠せない。

刹那が突如立ち上がった。僕は見上げる形になり、にこにこというかニヤニヤしている刹那と視線を交錯させた。こういう表情をしている時の刹那は非常に危険だ。

刹那が僕に近付いてきて、腰を折りまげてきた。
そして僕の耳元にそっと顔を寄せ、声をひそめた。

「次の期末で俺が一番取ったら、キスして」

「……は？」

「大宮さんが勝ったら、なんか罰ゲーム考えておいていいから」

真っ白だ。完全に頭の中、しろ。

「はぁあっ!？」

一気に自分の顔が青ざめていくのがわかる。これって、かなりのピンチじゃないだろうか!？

「本気じゃないよね？」

なんとしてでも冗談にしてもらわないといけない。僕は思いつめた表情で、刹那を仰ぐ。

「本気だけど？」

簡単に言われて、僕はがくり、と頂垂れた。しかしこんなことで負けるわけには

「や、だって、でもさ、キスとかはさすがにまずいんじゃないかな。そいうのって大切にしないと」

「だからこそ燃えるんじゃない」

ニヤ。刹那はどこまでも余裕のまま、言い放ってきた。

「嫌だったら負けなきゃいい。つか、大宮さんが負ける筈ないし」

「で、でも僕だって調子悪い時があるかもしれないなーなんて」

「そっちはどうするんだ？ 罰ゲーム」

刹那は全く僕の抗議を聞くつもりはないらしい。

「罰ゲームって……僕はまだ勝負するなんて言ってな」

がちやり。リビングのドアが開いて、僕は言葉を止めた。

トワとあさひ、友枝が帰ってきた。

「何二人でコソコソ話してたの？」

トワに恐ろしく低い声で問いかけられて、僕の心臓は縮み上がった。

「いや、大した話はしてないよ、ね。刹那？」

刹那に話を合わせるように視線を送る。しかし刹那は僕の方を見るでもなく、無表情のまま立っていた。

「何って大宮さんと勝負をしょーうわー！ わー！ わああああ！
！」

バカ正直にも語りだそうとした刹那の前に立ち、僕は手を大きく振ってそれを止める。恨みのこもった視線で刹那を見上げた。お前はトワの恐ろしさを知らないんだ。キスをかけた勝負なんてしたなんて言っ、この場が丸くおさまるわけがない。

身震いを起こしかけて、僕は一度深呼吸をした。

「とにかく、その件は了承しました！ 口外はナシをお願いします！ あ、それと僕は急用ができちゃったから帰ります！ じゃあねみんな！！」

僕は歪んだ笑顔で全員に大きく手を振ってから、勉強道具をむちやくちやにカバンにしまう。その場から猛然と逃げ去った。

なんてことだなんてことだ。

期末テストで一番が取れなかったら、刹那とキスしなければいけなくなってしまうた。

この件がばれたら。

トワの殺気のこもった眼差しを思い出し、走っていて身体はぽかぽかしている筈なのに、僕は背筋を凍りつかせる。

逆パターンで想像してみたとして。もし内倉永久の身体があさひとキスするなんて状況になったら、僕は絶対に許せない。トワだって、同じ気持ちになる、はず。

これ、確実に殺されるパターンだ。

夜になって。

僕は、内倉永久宅に舞い戻ってきていた。インタフォンも押さずに、鍵が開いていた扉を開け放ち、靴を脱ぎ捨てた。勢いのままに階段を駆け上がった。そして見慣れたドアを前にして激しくノックした。

少しの間の後。がちやりとドアが開けられて、トワが顔を出した。

「あれ？ なんでまた来たの大宮さ」

「僕に勉強を教えてくださいー！」

僕はぐわつと勢いよく両手を床につけて、猛烈な勢いで土下座した。

「一番を！ 一番を取らなきゃいけないんだー！ 後生です、後生ですから！」

プライドなんて知ったことか。死ぬよりはマシだ。というか、正直刹那とキスするなんて嫌すぎる。ノーマルなんだ僕は！ って、ノーマルだったら男と女だからアリなのか？ ……なんて血迷ってる場合じゃない。僕はなんとしてでも、勝負に勝たなければいけないのだ。

こうなったらどんな手段を用いても、一番を取るしかない。悩み考え抜いた末に、やっぱり勉強のスペシャリストに教えてもらうしかないという結論に至ったのだ。

「ふむ。一番を、ねえ」

僕は床に頭をこすり付けつつ、トワの落ち着いた声音を聞く。

「明日から期末テスト。それなりの覚悟を持って、言ってるんだろうね？」

「死ぬ気でやる！ どんなスパルタにも耐えてみせます！ だから一番を、一番を！」

「顔を上げて」

トワの言葉に従い、僕は顔を上げた。

「じゃあボクもそろそろ本気を出そうかな」

トワが僕の顎をくいっと持ち上げて、口の端をニタリと、上げた。
僕は、見た。

トワの顔に、完璧なるSの血覚醒の瞬間を。

第四話 サドとテストと清掃員？

「沙良さん、今日はトワの家に泊まっています」

『ああそうかい。煌によろしく言っておいておくれ。……ところで永久君』

「なんですか？」

『なんで泣いてるんだい？』

「聞かないでください」

通話を切った。床にパタパタと落ちる涙の雫。優しい沙良さんの声を聞いて、涙が溢れてきてしまった。僕は泣く泣く、背後の閉じられた扉を振り返る。ずおお、と何か陰の雰囲気を醸し出しているような、そんな扉。もう開けたくない。

しかし僕は意を決し、ドアノブを持ち、扉を開いた。

「電話終わった？」

部屋に佇む少年、トワが鋭い眼を向け、低い声を放ってきた。自分の顔の筈なのに、なんと恐ろしく厳しい表情が出せることか。

僕は頷く。トワが言葉もなく、顎で指し示した学習机の前にある椅子に座った。

ひろげられたままだったノートへと目を落とした。ノートに書かれた英単語の羅列に、くらくら眩暈を覚えながらも、声に出して読み上げていく。

「遅い。もっと早く覚えていくんだ」

「いや無理これ以上早くなんて、ひぎいいい！」

机の上に置かれた僕の手のすぐ横。

ペンがどすつと突き立てられた。

「口答えする暇なんてあるの？」

僕は涙目ながらも、トワの言葉に従って先ほどよりも早口で英単語を覚える為に口にする。今までの勉強法なんて甘かった。甘すぎた。トワの、いや大宮煌の本性を垣間見て、僕は心の底から後悔した。知らない方が幸せだった。そしてその凄まじい本性を知ってしまった今、いよいよ期末テストでの勝負をトワに知られた時のことを考えると恐ろしくなる。ああ、目の前が霞んで英単語がよく見えないや。

ドカツ　椅子蹴られた。

「よそごとを考えているね」

「考えてません！　頭の中は英単語でいっぱいです！」

そのうち鞭でも持ち出してくるのではないだろうか。姉の部屋にありそうだ、なんて考えてしまつて背筋が震えた。そうか、この家は鬼の棲家だったんだ。

そんな恐ろしい光景が繰り広げられ、数時間が経過した。夜もすっかり深まつてきている。

いい加減休憩させてくれと、パンク寸前の頭で訴えようと考えていた矢先。

ノック音が聞こえた後、扉が開けられた。

顔をのぞかせたのは姉だ。

「ご飯できてるけど、今日は煌ちゃんも永久も、ここで食べるの？」

「ああ、うん。追い込みだし、今日はここに持つてきてくれるとありがたいな」

トワが姉の顔を見た瞬間に、表情を和らげた。嘘のように優しい笑顔になっている。

「わかったわ。……でもまさか永久、煌ちゃんをこの部屋に泊めるの？」

「徹夜で勉強するだけだよ。大丈夫、ボク大宮さんに全く興味ないから」

トワは笑顔のままで言い放つ。さりげなく傷ついた。

「そう……なら、いいんだけど」

姉が表情を曇らせつつも、紡いだ。視線を床へと落とし、息を軽く吐いている。どこか物憂げな雰囲気だ。美しい顔立ちの姉には、鬱気な表情の方がよく似合う。

「煌ちゃん、ご飯運ぶの手伝ってくれる？」

姉から声をかけられ、僕は顔を上げた。

「あ、はい」

この空間から解放される！ 僕は思わず顔を綻ばせ、姉へと駆け寄った。トワの表情を見るのが怖かったので、振り返らずに姉と共に部屋を出る。

二人で階段を降りて行き、ダイニングに入った。

食卓に並べられた夕食をトレイにうつす作業を手伝った。テスト期間中で食べやすいものを、と気を使ってくれたのだろう。おにぎりだ。

「ね、煌ちゃん」

物憂げな表情のまま、姉が言葉を吐き出す。

「なんですか？」

僕はあの空間から出られたことで軽くなった心のまま、軽く聞いた。表情もウキウキと軽い。

「やっぱりね、あの子別人だと思うのよ」

「そうですね。……え？」

僕の作業していた手が止まった。徐々に頭に浸透していく、姉の言葉。

「え？ え？」

顔が青ざめていってしまうのを感じた。動揺しているのを悟られるのはまずいとはわかっていただけ、姉の深刻な言い方に、冷静さは保っていらなかった。

「誰かが、あの子の身体を奪ったに違いない。精神は全然違う人間が入ってる、としか思えない」

「そんなまさかーマンガみたいな話あるわけないじゃないですかー」

ひどい棒読みになってしまった。姉の推理は的を得すぎている。動揺で心臓が、ありえないほどの早鐘を打っていた。

「私もそう思ってたんだけど。でも、絶対今のとつくんはとつくんじゃないの」

姉はため息を吐き、言った。こんなにも哀しそうな瞳を見せる姉を、初めて目にしたかもしれない。……少し罪悪感。

僕は、ごめんおねえちゃん、と心の中で謝罪するしかない。本当のことは、決して言えないから。

「成長したんですよ、きっと」

今は落ち込んでいる姉に少しでも浮上してもらおう為に、嘘を重ねるしかない。

しかし姉の耳には届いているのかいないのか、表情は変わらない。

「……確かめよう、と思うの」

ぽつり、と姉が小さな声で言い放ってきた。

「確かめる？」

僕は首を傾げてしまう。何をどうやって確かめるといつののだろうか。

「今夜、私、とつくんを襲うわ」

⌈
⋮
⌋

「今夜、私、とつくんを襲うわ」

僕の時間は完全に止まっていたので、姉が二度繰り返し返した。

「……なんですとおおおおお！？」

ようやく僕の時間が戻ってきた。戻った瞬間、絶叫した。姉は大真面目な顔のままだ。僕の絶叫にも全く動じていない。

「今夜、私、」

「もういいです！ わかりました！ 理解しました！ そして理解した上で言います！ 血の繋がった姉えええええ！！」

「構わないわ、覚悟はできてる」

そっちの覚悟ができていても、こっちの覚悟ができていない！
姉は真摯な眼差しを僕に向けてきた。どきりとする。そりゃ、おねえちゃん綺麗だ。美しい。実の姉なのに、時折ときめいてしまうことなんてあるけれども。しかしかし。

僕は首を強く振った。長い髪の毛もぐんぐんと一緒に揺れる。

「駄目です駄目です！ それだけは駄目です！」

「煌ちゃん、私真剣なの」

ぎゅっと両手を握り締められた。姉の手が僅かに震えているのに
気付き、はっとした。その顔を改めて見つめる。瞳が、揺れている。

「私の弟を奪った奴を、許せない」

「……久遠、さん」

僕は力が抜けていく。胸がじわわと熱く、泣きそうになってしま
っていた。そんな風に言われて、嬉しくないわけがない。そして、
そんな決意を抱く姉を止めることなんて……

「今夜、私、とつくんの童貞を奪うわ」

なんかセリフ変わってるし。
止めよう。決意を新たにした。

「永久がお風呂入って出てきた時が狙い目だと思うの。脱衣場で服
を着る前の濡れた身体、髪から滴り落ちる雫、細身だけど意外に引
き締まった二の腕、胸板……」

絶対に止めよう。覚悟を決めた。

「というわけで、ご飯食べたからお風呂に入るように言ってね」

ニッコリと晴れやかな表情になった姉の言葉に、僕は浅く頷いた。
僕の貞操を守らねば。

食事をのせたトレイを両手に持ち、その指に力を込めた。

部屋に戻ると、「遅い」と声だけで人が殺せるような、トワの厳しい言葉が飛んできた。

僕の気も知らないで、と潤む眼のまままで遠くからトワを見る。

「さあ、勉強の続きをやるよ」

「え、だってご飯」

「食べてる暇なんてない」

冷たく言われ、僕は半ベソ状態で学習机の前に座る。刹那とのキスだの、トワの鬼畜っぷりだの、姉からの襲う宣言だの、僕の周囲はサド変人ばかりじゃないか。

早く元に戻りたい。切なる願いを抱き、しかし元に戻る方法は全く思い当たらないのだ。溜め息ばかりが漏れてしまう。

「ああ、そうだ。ご飯食べたらお風呂に入るようにって」

一応姉の言葉は伝えなければなるまい。僕は椅子をまわして、トワに向けて言う。

「うん、わかった」

頷くトワ。貞操の危機とも知らずに。気楽だな。

風呂上りのトワを襲いにいく、と姉は言っていた。トワが無事に風呂から上がり、着替えて出てくるまで、姉の邪魔をしてやる。あの姉を止めるには、その状況になってから完全に無理だと思わせないと無理だ。長い付き合いでわかっている。彼女は言葉で説得できるタイプではない。心の中で計画を反芻し、強く頷いた。

「さぼってないで早くやれ」

トワがのキツイ言葉に、何かを通り越して温かい感情すら芽生えた。

僕が守ってやるからな、大丈夫だ、内倉永久の身体を穢させやしない。

僕は目を細め、ぬるい視線でトワを見た。

「何その目、気持ち悪い」

トワが目を眇め、言ってきた。本気で気持ち悪そうだ。失礼な。これでも美少女なんだぞ。

「大丈夫です、大丈夫」

フフフ、と安心させる為に笑みすらこぼして見せた。少し壊れてきてしまったのかもしれない。ガスッ

トレイを投げつけられた。角がおでこに直撃した。

「痛い」

「いいから勉強してってば！」

あまりに気持ち悪すぎたのか、トワが表情を引き攣らせて言い放ってきた。

「……勉強します」

僕は学習机に向き直り、勉強を再開させた。

問題は一つじゃない。今夜は徹夜で明日の期末テストにのぞみ、

そして一番を取らねばいけない。僕は一旦勉強に集中し、ノートにペンを走らせた。

暫く部屋の中には、カリカリというペンの音だけが続いた。時計の秒針の音すらも聞こえてくる静寂の中、夜は非情にも更けていく。

一区切りついたところで、僕は一旦トワを振り返ってみた。集中している間は気付かなかったけど、トワがやけに静かだったことにその時になって気付いたのだ。

トワはベッドに腰かけて、前かがみになって胸元をおさえていた。

「トワ？」

苦しげに、荒く吐き出される息。

僕は椅子から降りて、トワに駆け寄った。トワはただ事じゃない様子だ。

「トワ、大丈夫ですか？ トワ？」

僕の呼びかけにも応えられないのか、トワが身を震わせて肩を下させている。

僕は心配になってトワへと手を伸ばし

「触るな！」

僕の手は、トワの手によって撥ね退けられてしまった。

トワの鋭い眼光が、僕を捕らえる。僕はそのあまりに強い瞳に、身動きが取れなくなってしまう。

「ボクに構ってる暇なんてないでしょう。勉強しろ」

「だって、トワ、すごく苦しそうで……」

「なんでもない。ボク、お風呂入ってくるから。その間もさぼらないでやってて」

トワの顔は蒼白に近く、冷や汗も浮かべている。それでも震えながら立ち上がり、僕の横を通り過ぎていく。

僕はぎゅっと唇を噛み締めた。

……トワは、一人で何を抱えているっていうんだ。拳を握り締める。取り残された部屋で、僕はやるせない気持ちになった。

僕には、どうすることもできないんだろうか。

トワが去っていった扉を、見つめた。

胸が苦しくて、どうしようもなくて

「ってそういえば、風呂？」

先ほどトワはお風呂に行くと言って、部屋を出ていった。今更その事実気付き、僕は驚愕に顔を強張らせた。

「うわああああ!! どこだ姉ええええ!!」

頭はパンク寸前、虐められすぎてぼろぼろになった精神。加えて空腹。

完全に壊れた僕は、絶叫しながら扉を開け放った。

「はい」

部屋の前に立ってた。

「あねっ、姉！　姉！」

絶対に姉を止めると決意したものの、どうやって引き止めるか具体的な方法を全く考えてなかった。バカだ。意味もなくバカみたいに姉と繰り返してしまつて、僕は頬が熱くなつていく。

「ふふ、煌ちゃんって本当に可愛いわねえ」

頭を撫でられて、姉が踵を返し、あっさりとその場から離れ

「逃がすかああ！」

立ち去ろうとする姉の腰にしがみついた。タックルがました。

「きゃあ！」

廊下に姉が倒れる。ずべつと間抜けな音がした。僕は急いで姉から離れた。やりすぎてしまった感が。

「何するのよ、煌ちゃん……」

顔を床に打ち付けてしまったらしい、振り向いた姉のおでこが赤くなつてしまっている。

それ以上に、ギラリと光る眼が目立っていた。

「私に虐めてほしいの？」

ニヤリと口の端を吊り上げ、姉が言い放ってくる。ぶんぶんと頭干切れるくらい強く横に振った。

「ただ僕は久遠さんがトワを襲うって言うから止めようと……」

「邪魔する気なのね」

「……そ、そうです！　邪魔します！」

こうなったらもう真正面からぶつかっていいこう。僕はきりりと宣言した。真っ直ぐに姉と見つめあう。

「面白いわ、煌ちゃん」

「トワは襲わせません」

自然、闘いの前のように、僕は身構えていた。姉相手なのに、気分は凄まじい強敵を前にした美少女清掃員の心持ちだ。

「あなたもアイツが好きなのね」

「は？　いや、それは違」

「誤魔化さないで。アイツのことが好きなのね!？」

迫り来る姉。やっぱり怖い。狭い廊下でにじり寄られ、僕は後ずさることもできずに姉と至近距離で対峙する。

どう言えればいいんだ。どう言えれば納得するんだ。

というかそもそも、僕はトワのことをどう思っているんだろう？

「僕は……」

喉がごくりと、鳴った。

第四話 サドとテストと清掃員？

「清掃完了！」

本当に一撃だった。

外灯がぼつりと一つしか見当たらない、小さな公園内だった。道路を挟んで囲んでいる住宅も、深夜なので殆ど灯りが消えている。乏しい視野の中で発見したのは、ヘビガタのリフューズ。小型で片付けやすかったというのもあるけれど、ヤケクソになっていたのも大きい。

僕は無心でリフューズが出没した地点へと駆けつけた。変身し、ポーズと決めゼリフまでこなし、そしてモップであっさり消し去った。全速力で走ってきたのでゼーゼーと息が上がってしまったている。

「なんで僕はこんなにきつちりとやっているんだろうか……」

清掃完了の言葉と共に、オレンジの作業着からセーラー服へと戻った。誰に言うでもなく、虚しく呟く。上着も着てこなかったので、吹きつけてきた木枯らしに身が震えた。ブランコが冷たい風で揺れる。

夜も更けてきている。お腹はぐるぐると空っぽなのを訴えてきている。勉強のしすぎで頭はくらくら。足取りはよろよろだ。

「帰ろ」

僕は一人、呟きを漏らし、踵を返した。

「によわあっ！」

すぐ背後、僕の眼前に人が立っていた。毛が逆立つくらいほど、大袈裟な驚きの声を上げてしまった。実際二つに縛った髪の毛が逆立った。

息を切らし、濡れた髪もそのままに、立っていたのは トワ。

トワは乱れた呼気に言葉を発することもできないのか、膝に手をつけて俯いている。僕同様に上着を着てきていない。パジャマのボタンも半分しか留めておらず、鎖骨が露になっている。セーラー服姿の僕よりも、ずっと寒そうだ。

「トワ……大丈夫？」

「……り、リフューズ、は」

「清掃しましたよ」

僕が白い息を吐きながら報告すると、ようやくトワが顔を上げた。全速力で走ってきたのだろう、頬が紅潮している。強張っていた表情がほっと緩んだ。その顔を見て。

『僕はトワのことを』

姉に向けて、僕が何を言うつもりだったのか。

ようやくその答えにたどり着いた。

たとえ、あの場から去って貞操の危機だとしても。

たとえ、勉強を放り出して一番が取れなくなったとしても。

刹那とキスする羽目になって、トワに殺されるかもしれないでも。

リフューズを清掃するのが 美少女清掃員の使命。

僕にとって、トワは。いや、大宮煌は。

もう、自分自身と一緒だ。

大宮煌が清掃することを一番に考えるのなら、自分もそうあるべ

きなのだ。

とても大切な、かけがえのない、半身。

「こんなところにいたら風邪ひいちゃいます。早く帰ろう」

僕はトワに向けて、手を差し伸ばす。自然、苦笑がこぼれてしまっていた。

けれど、その笑みは直後に凍り付いてしまった。

暗い視野の中で、最初は気付かなかった。改めてトワを見て、僕は差し伸ばしていた手の平をぐつと拳にかえる。

「トワ！？ それは、なんなんですか！？」

はだけてしまっているパジャマから、わずかにのぞく胸元。黒い痣が大きく広がっている。よくよく見れば、それは腹部にも。見えないけれど背中にもで達してしまっている感じた。

僕が内倉永久の身体だった時には、そんな黒い痣はなかった。

これは、なんだ？

薄ら寒く、おぞましさを感ずる。闇に溶けていきそうな、漆黒の模様。

トワは僕の驚愕の声を聞いてか、後ずさり、胸元を腕で覆い隠した。

トワは気まずそうに僕から視線を逸らし、口元を自嘲気味に上げた。

「見られちゃったか」

「見られちゃったって……それ、一体、なんで、そんな、」

混乱でうまく言葉が出てこない。

僕の身体は一体どうなっているというんだ。大宮煌の精神が入った時点から、こんな風になってしまったのだろうか。

「いずれは話さなきゃいけないとは思ってた。ボクも入れ替わる能力を使うまでは知らなかったんだけどね。入れ替わった後、おばあちゃんに全部聞き出したんだ。美少女清掃員の入替わり能力の、秘密」

それは僕がずっと知りたかったことだ。

沙良さんは幾ら問いただしても、一切入れ替わり能力について教えてくれなかった。僕はトワを凝視したまま、喉をぐくりと鳴らす。トワが逸らしていた視線を、こちらに向けてきた。カタカタと、風でブランコが音を立てる。

「ねえ、不思議に思わなかった？ 何故、美少女清掃員だけが、リフューズの声を聞くことができるのか。闇から産まれるリフューズの、姿を見ることができるのか」

「……考えたこともなかった、です」

僕はトワが言ったことにずっと従ってきただけだ。リフューズの声が聞こえたら、清掃しに行く。それが美少女清掃員の使命だから……根本的なことを、今まで僕は考えていなかった。
美少女清掃員って、なんだ？

「ボクは、大宮煌はずっと美少女清掃員の家系としてリフューズと戦ってきた。そして、ボクらの最たる敵はヒトガタだ。ヒトガタだけが僕らの清掃攻撃が効かない。それでもボクはヒトガタを倒したくて、ヒトガタが現れたら立ち向かっていった。あの夜。ボクと内倉永久くんが偶然会ったあの夜も、ボクはヒトガタに殺されかけて

しまっていたんだ」

それはなんとなく、想像がついていた。

トワは淡々と、無表情に続ける。

「そしてボクは大宮煌の身体を捨てて、内倉永久の身体に成り代わって生き延びる道を選んだ。成り代わる　それで、大体想像はつくでしょう？」

僕には彼女が何を言っているのか、分からなかった。ただ身体が震えてしまっていた。

「清掃員は、元々、ヒトガタのリフューズだったんだよ」

トワは、その言葉を発した後に、ようやく苦しげに瞼を伏せる。ずっと堪えていたものが、溢れ出てきたように。唇を噛み、胸にひろがった痣を抱えるように自身を抱いた。

僕は、ただ、立ち尽くしていた。

「大昔から戦ってきたヒトガタと、清掃員。それは元々ヒトガタたちが人間に成り代わった後に、仲間割れを起こしていたに過ぎない。少しの良心が清掃員たちを人間として機能させていただけだ。だから、ボクら清掃員は……」

『命の危機に晒された時、美少女清掃員は生存本能が働き、健全な肉体と入れ替わる能力を使えます。しかしあなたはもう元には戻れません。そしてこの能力は、美少女清掃員の禁忌です。決して、決して使わないでください』

手帳に書かれていた、文面が脳裏をよぎった。

「入れ替わる能力を使った時点で、またリフューズに堕ちていく」

僕は何も言えず、ただ呼吸を繰り返していた。

美少女清掃員が元々ヒトガタのリフューズだったから、入れ替わる、いや、成り代わる能力を使えることも。

そしてその成り代わる能力を使った時点で、リフューズに戻ってしまうことも。

苦しそうにその事実を吐き出しているトワを前にして、僕はただ、見ていることしか。

「お願いがあるんだ大宮さん」

「……なん、ですか？」

「ボクがヒトガタになる前に、その時期が来たら。どうか　ボクを、殺してほしい」

「……っ」

「ごめんね。いや、もう謝ってもどうしようもない話だね。ボクはキミの身体を奪って、その上でキミにこの身体を殺してほしいって頼んでるんだ。こんなに最低な話はないよね。でもキミにしか頼めないんだ。そしてボクは、ヒトガタに堕ちるくらいだったら、死にたい」

どうして、どうして。

こんな時に笑っていられるんだろう？

「キミがボクを清掃するんだ、大宮さん。キミはボクよりもずっと、ずっと、強い美少女清掃員になれるから」

「……嫌です」

僕は、身体が震えてしまっていた。

「そりゃ自分の身体を殺すのなんて嫌だよね。でもボクが自害するよりは、納得できるんじゃないかなって」

「僕の身体を失うのが嫌なんじゃない！　僕は！！」

真っ直ぐにトワを見つめた。その時

「それ、本当の話、なの？」

第三者の、強い声が差し挟まれた。

僕とトワは、表情を強張らせて声の聞こえた方向へと目を遣る。公園の入り口に、姉が。

「ねえ！　答えてよ！！　大宮煌が永久の身体を奪ったって！！　そして死ぬって！！　それ、本当の話なの！？」

姉、久遠が、悲痛な声を張り上げていた。全部、ばれた。

第四話 サドとテストと清掃員？

トワも、僕も、何も言えないままで棒立ちになってしまっていた。入り口に立っていた姉が、一步一步ゆっくりと、公園の中に入ってきた。小脇に上着を二着、抱えている。姉は僕らが上着も着ずに外に飛び出していったことで、わざわざ上着を持って追いかけてきたんだと想像がついた。

よりもよって、一番聞かれたくない話の内容を、一番聞かれたくない人物に聞かれてしまった。

姉が無言で歩みを進め、表情を強張らせているトワの前に、立った。姉は横にいる僕には見向きもしない。持っていた上着を、ふわり、とトワに着せてやった。

「あ、ありがとうおねえちゃ」

トワが笑みを造ろうとして失敗したのか、ただ表情を崩した。その頬に。

ピシヤリ、と、姉が平手打ちをした音が響く。

「おねえちゃんなんて呼ばないで」

姉がトワを見上げて、言い放つ。低くドスのきいた声。トワの片頬は赤く腫れ上がっていたけれど、トワは身動き一つ取らなかった。殴られたままで、地面を見下ろしていた。

「あなた、大宮煌なんでしょう？ 私はあなたのおねえちゃんなんかじゃないわ」

「何言ってるんだよ。ボクはどこからどう見たって、内倉永久」

トワは姉へと目を戻し、微笑みを浮かべかけて口元を歪めたが、姉の眼差しに負けて笑みが消える。泣きそうな顔にも見えた。

「あ、あの！ 久遠さん！ 違うんですよ！？」

久遠の迫力に押され負けているトワを見ていて、堪らなくなった。僕は無理に明るい表情を造って話に割り込む。

「さつき話してたのは、なんていうか、僕とトワで創作小説でも書こうかーって！ その物語の中での話なんです！ 全部妄想妄想！」

「黙れ」

ぴしゃり、と殺気すら感じられる言葉で返された。しかし僕はそんな姉の言葉を常に浴びてきた。全然余裕だ。笑顔すら浮かべられる。

「いやだなあ。そんな妄想話信じちゃうんですか久遠さん。僕は太宮煌だし、そこに立っている彼は内倉永久くん。久遠さんの聞いた話は全部嘘です！」

嘘であればいい、と心から思った。
だから余計に、切実に訴えていた。

「なんか僕、勉強が嫌になって家に帰ろうかになって思ってた。トワがそれを止める為に慌てて追いかけてきたんです」

僕はアホっぽくへらへらと笑い、言い訳を繰り返してみる。

「リフューズって、ヒトガタって何？ そのヒトガタっていうものになっちゃうから、永久の身体を殺す？ 奪っておきながら？ ねえ、あなた、自分が何をしているのか分かってるの？」

完全に無視された。

姉は僕の方を見ず、一度もトワから視線を外さない。

「遊びなんです！ お互いを入れ替わったことにして、ちょっとみんなを騙してみようかって！」

僕はめげずに姉へと言い訳を繰り返す。ばたばたと手足まで動かして。

「寒いですよね！ 帰りましょう、帰りましょう！ さあ今は帰って勉強です！！」

「うるさい黙れ永久！ おねえちゃんの言うことは聞きなさい！！」

「はいごめんなさいおねえちゃん！ ……っああああ！」

姉がはじめて僕に目を向けて、叱咤の言葉を投げつけてきた。僕は反射的に頷いてしまって。身体から力が抜けて、僕はその場に座り込んでしまう。そのままがくり、とうな垂れる。

トワが諦めたようにため息を吐いたのが、聞こえた。

「永久と煌が入れ替わったって聞いた瞬間、永久が別人みたいになった理由が納得できたのよ」

姉の鋭い声。僕は恐ろしくて、顔を上げられない。

「あなた、大宮煌なんでしょう?」

姉が先ほどと同じ言葉を繰り返し、トワに詰め寄っている。

「……そうだよ。ボクは、大宮煌だ」

とうとう、トワが認めてしまった。僕は眉を下げ、トワの顔を仰ぐ。

「……して、よ」

トワの正面に立つ姉が俯き、震えながら掠れた声を絞り出している。僕には姉がなんて言ったのか、聞こえなかった。

「返してよ!!」

今度ははつきりと、悲痛な叫びを上げたのが耳に届いた。

そして姉は、トワのほとんどはだけてしまっているシャツの襟首を掴み、トワを押し倒した。

「久遠さん!?!」

地面に倒したトワの上へと、姉が馬乗りになる。

「返して! 返して! 返してよぉっ!!」

姉は悲痛な絶叫とともに、拳を振り上げて、トワの顔を、胸を、滅茶苦茶に殴りだした。

「ちょ、ちよっと久遠さんそれ僕の身体……」

僕の座り込んでいる位置からトワの顔は見えない。トワは抵抗する様子もなく、声をあげることもなく、姉からの暴行を受け入れていた。僕は慌てて立ち上がり、トワを殴りまくっている姉を背後から羽交い絞めにした。

「やめてください久遠さん！」

「返して！ 返して！！ 返し……っ」

僕が後ろから抱き締めても、姉はジタバタと暴れて叫んでいる。こっちは押さえつけるので必死だ。

その姉の頬に、涙の筋が見えてしまつて、僕は堪らなく胸が苦しなつた。

パタパタと、トワのシャツに水滴が落ちて、音を立てる。

僕は、いつかおねえちゃんを泣かせてやりたいなんて願望があつたけれど

「ごめんなさい、おねえちゃ、……本当に、ごめん」

僕は姉を抱き締めて、ただ謝罪の言葉を繰り返すことしかできない。

こんな風に、泣かせてしまつて、ごめん。

「……なんで、アンタが謝るのよ」

姉がようやく暴れるのをやめて、僕を振り返ってきた。

その顔はくしゃくしゃに歪み、真っ赤になつて、瞳からは涙が次から次に溢れてきている。

「てゆうか、なんでアンタまで泣くのよ」

「……泣かせたくなんて、なかったんです。そんな顔、させたく、なかった。ごめん、ごめんなさい」

僕は袖でぐしぐしと必死で目をこする。涙がどうしようもなく止まらなくて。僕はやっぱり弱い人間なんだなあって思う。

「それでも、トワを責めないでほしいんです」

僕は姉へと切実な気持ちを吐き出す。

「は？　どんだけお人よしのアンタ。私は許さないわよ。絶対、こんなの絶対に許せるわけじゃないの！」

姉が怒りに肩を震わせて、立ち上がった。僕も立ち上がり、睨みつけてくる姉の瞳を真っ直ぐに受け止める。

「僕が許します！！」

僕は、喉が切れるぐらい強く、言い放った。

「誰が許さなくても、僕はトワのことを許しているんです！！」

毅然と、姉を見つめる。涙は止まってなくて、格好はつかないけれど。

トワは仰向けに倒されたままで、起き上がらない。表情も見えない。吐き出す息がただ、空気を白く変えていた。

「だから、だからおねえちゃん。お願いします。トワを責めないで

ください」

「……」

絡み合う視線の中、姉は無言だった。

「……」

「……」

「……」

「……っておねえちゃん？」

長い沈黙の後、姉がようやく言葉を紡いだ。

「おねえちゃんって……そういえば、大宮煌の身体に入ってるのは、永久なのよね？」

今更に姉が確認してきた。僕はこっくりと頷く。

「大宮煌が内倉永久の家に来た夜から、ずっと、大宮煌は永久だったってこと？」

重ねて確認される。僕はまたも頷く。

「……わたっわたわたわ私アンタに色々赤裸々に語ってしまったわあああ！ いやあああああ！！」

「あ」

今更に、僕もその事実を思い出す。急速に頬が熱くなっていく。姉も、自身の両頬を覆い、耳まで真っ赤になってしまった。

「あ、あれは本心なんかじゃないんだからね!!」

涙目の姉は、捨てゼリフを絶叫した。

「わぶっ」

持っていた上着を僕の顔面へと投げつけてくる。

「私は許したわけでも認めたわけでもないから! でも、今日のところは帰るから! アンタたちも、寒いからさっさと家に帰って勉強しなさい!!」

姉が言いながら、走り去っていった。猛ダッシュしていく背中が見えた。

姉の姿が見えなくなり、僕は深く息を吐き出した。一応姉は、僕の願いを聞き入れてくれた、ということだろうか。この先姉がどう出てくるのか、先が思いやられるけれど。

僕は投げつけられて咄嗟に受け止めた上着を着込み、ようやくトワを振り返った。

倒れたままのトワの元へと歩み寄り、僕はその場にしゃがみこむ。

「トワ、大丈夫ですか?」

「身体中が痛い」

無表情のトワが、いつもの軽い調子で言ってきた。顔も身体も青

あざだらけになって、悲惨な有様だ。

「帰りましょう。勉強しなきゃいけませんし」

起き上がろうとしないトワへと、僕は手を差し出す。

「……別に庇う必要なんかなかったのに」

トワが、言ってきた。僕は差し出した手をピタと止める。

「庇ったわけじゃないです。あれは、僕の本心だから」

「……キミって、とことんバカなの？」

「バカで結構です。だから、バカだから。トワ、僕は足掻きたい。最後の最後まで、君を殺すことを拒否し続けます」

トワを見下ろす。

一度止まっただはずの涙がまた溢れてきてしまった。本当に情けなくって、自分が嫌になる。

「君を失いたくないんです」

「……泣き虫バカ」

全くその通りだと思う。

「でも、変だな、嬉しいんだ。……こんなボクなんかの為に、泣いてくれることが」

トワは柔らかく、微笑みを向けてきた。手を伸ばしてきて、僕の片頬を覆う。温かい手だった。

「ありがとう」

トワの言葉に、僕の胸は熱くなる。

僕は絶対、彼女を失ったりなんかしない。

どんなに絶望的でも、どんなに戦わなくちゃいけないでも。

足掻いて、足掻いて、足掻きまくってやる。

その強さを教えてくれたのは、目の前にいる彼女だから。

それからのテスト期間中、トワの家庭教師は全く甘くならず、僕はひたすらに勉強を叩き込まれた。お互いにリフューズや清掃員のことを口にすることはなかった。僕は毎日毎日睡眠不足と戦って、勉強一点に集中した。十七年間の人生でこれ以上ないくらい、頑張った。勉強し尽くした。

トワに勉強を教えてもらうということは、必然的に毎日姉とも顔を合わせる。

『私は絶対大宮煌を許さないんだからね』

顔を合わせる度に、姉は宣言してきた。しかし僕が色々と姉の裏側を知ってしまったことに羞恥があるのか、言葉にキレがない。

……それは別として。姉は虐めるターゲットを完全に僕に変更したらしい。トワとは全く言葉を交わそうとしないし、トワのことを避けている。そして生き生きと僕を毎日虐めてくれた。姉の元気な顔が見られれば、それでいいか、と泣く泣く現状を享受する僕。

もちろんトワの家庭教師の凄まじいサドっぷりは変わらない。Sの二乗だった。色々と地獄を見た数日間だった。

そしてそして　今、目の前に。

最善を尽くした結果が、ある。

多くの生徒たちが集う、広い廊下の踊り場だった。

壁に張り出された紙には、でかでかと成績順位が並んでいる。それを見上げている生徒たちはザワザワと騒いでいる。僕もみんな同様が、それ以上に、ドキドキしていた。見るのが怖い。どんな恐ろしい結果が待ち受けているのか。でも、もう結果は出てしまっているんだ。

僕は意を決し、成績順位表を見上げた。

三番　大宮煌

「三番……」

視界に飛び込んできた結果に、素直に感動してしまった。僕だつてやればできるんだ、と。今まで十番台に入ったことなんてなかった僕が、三番を取れるなんて。しかし。

二番　辻刹那

大宮煌の名前の上にある、刹那の名前に絶望する。やっぱり刹那に敵うわけがなかった。

僕がうな垂れていると。ぽん、と軽く肩を叩かれた。僕はそちらへと顔を向ける。

刹那が立っていた。不満そうに口をへの字に曲げている。

「俺の負けだな」

「……え？　だって僕、三番……」

「勝負は俺が一番を取ったら勝ちってことだったから」

「あ、ああそうだったっけ」

そういえば、そんな内容だった気がする。何も僕が頑張らなくて良かったんじゃないか。その事に今更気付かされる。だって

一番 内倉永久

トワが容赦なく、一番を取ったんだから。

そのトワはというと、少し離れたところで張り出された紙を見上げている。特に感動している様子もなく、当たり前のことのように平然と。

周囲の生徒たちは内倉永久の一番という成績に驚いてか、トワに注目が集中している。こんなにも目立っていることは、人生で初めての経験だ。客観的に見る側になっても、少し気恥ずかしい。

「あーあ。じゃあ俺が罰ゲームやらなきゃな」

横に立つ刹那がだるそうに言った。

「罰ゲームって……何もしなくていいよ、何も考えてなかったし」

僕が言うと、刹那がじろ、と軽く睨んできた。

「俺の気がすまない」

「そう言われてもなあ……」

罰ゲームなんて咄嗟に思いつかない。僕はそれでも刹那が納得するような罰ゲームを考えようと、腕を組んで考え込んだ。

暫くの間、僕は唸っていた。

「……じゃあ、俺が考えた罰ゲームで」

「え？」

刹那が待ちきれなくなつたのか、言葉を紡いだ。僕は顔を上げる。横に立っていた筈の刹那が、いつの間にか遠く、歩みを進めている。

「刹那？」

呆然とそれを見守り。刹那がトワの前に立つたのを見て。

「え？ え？ まさか」

刹那は、成績表を見ていたトワの顎を唐突に掴み。そしておもむろに、唇を重ねた。

一瞬のできごと。触れ合っていたのは数秒。

だけど、その場にいた全員が目撃した。

「ぎよわあああああ！！」

僕が叫んだ。女子たちが黄色い声を上げた。男子たちが驚き喚いた。唇を離れた刹那が、ニヤリと笑った。友枝が廊下をスライディングした。あさひが鼻血噴いた。先生が混乱して騒ぐ生徒たちに怒鳴った。完全なるパニックが起きた中。

トワは 石化していた。

大宮煌の唇が奪われるのは回避できたけれど、大宮煌の精神が唇を奪うことは回避できなかった。その上、内倉永久の唇奪われた。

「罰ゲーム、終了」

刹那が、僕を見て微笑む。

全然嫌そうじゃないから罰ゲームでもなんでもないじゃないか。僕は恨みがましい目で刹那を睨み。

正氣に戻ったトワになんて言い訳したらいいんだ、と。

この件に関しては、途方に暮れるしかない。

第五話 聖夜の美少女清掃員？

冬休みに突入した。

無事に期末テストを終えて僕としては最高の結果を出せたし、最近はリフューズも大人しい。学園生活というストレス空間から解放され、安穩とした日々にはっと一息だった。結局まだ大宮煌の身体のままだし、トワのことは心配であるけれど。

テスト順位表に内倉永久の名前が学年一位に書き出されて、それを巡って的一幕（思い出すだけでもおぞましい）のおかげで内倉永久は一躍有名人となった。物腰が柔らかく、女の子たちとも気さくに話すトワは女子の間でよく話題に出るようになった。モテモテなトワを見るのは、複雑な気分だ。

そして世間は今、クリスマス一色だった。何せ今日はイブなのだ。

「まあ、僕には縁がない行事ですけどね」

大宮煌の自室で僕は一人、眩きを漏らした。虚しい。

毎年イブはどうしていたのだろうか。と思い起こしてみれば、姉がご馳走とケーキを用意してくれて、笑顔でひたすら口撃を繰り返している図ばかりが浮かんだ。幸せな光景……なのだろうか。

ベッドに仰向けに寝転がり、携帯電話を見してみる。

着信もメールもなし。ああ、でも。

『冬休みも遊ぼうね煌ちゃん』

と、終業式で言っていたあさひの天使のように愛らしい顔が浮かんだ。

……自分から、誘ってみようか。

「友達なんだし。遊ぼうねって言ってたし」

僕は小さく言い訳を吐き出しつつ、メール画面を開こうとボタンの上に指を置く。

その時。

「わっ」

着信が鳴った。僕は驚きのあまり、携帯電話をぼろりとベッドの上へ落としてしまう。

もしやあさひから？ 僕の気持ちが伝わったのかな？ ときどき、と期待に胸を躍らせつつ、携帯を拾い上げた。

僕の輝いていた眼が……死んだ。それはもう、魚の濁った目のごとく。

大きくため息を吐いてから、電話に出た。

「はい、もしもし」

僕は冷たさを含んだ声音で、事務的に告げる。

『よう大宮。突然だけど愛してるから結婚しよう』

切った。

しかしまたもかかってくる電話。

「何か用事ですか？ 友枝君」

僕は諦めて電話を取り、電話をかけてきた友枝君に問いかけた。みた。

『用事も何も。今日はクリスマスイブだぜ？ 恋人同士がちくりあう最高の日じゃ 』

切った。

しかししつこくかかってくる電話。

しばらく放置を試みてみたけど、鳴り止む気配がないのもう一度とってみる。

「だから、何か用事ですか！？ 用がないなら電話してこないでください！」

僕は苛立ちを声に含み、言い放った。

『あ、ごめん。忙しかった？ 』

電話口から聞こえてきたのは、友枝の声じゃなかった。

僕は身を固くして、耳にあてていた携帯電話を見る。聞こえてきたのは元は僕の声だった、トワの声だった。何故トワが。

「いえいえ、全然大丈夫です！ なんで友枝君の携帯電話でトワがかけてるんですか？」

『友枝じゃ話にならないから、なんてゆうか、ボクが代わりに話すことにしたんだ 』

トワの口調は珍しく、歯切れが悪かった。

『あの、さ。夕方くらいにボクの家に来れないかな 』

「夕方？ 予定はないから別に構わないですけど……今日くらい勉

強は勘弁してほしいです」

『勉強じゃないんだ。その』

トワの言葉が止まる。なんだなんだ。こんな様子のトワは初めてだ。何か悪いものでも食べたのだろうか、と心配になった。

「まあなんでもいいですけど。トワの家に行けばいいんですね」

『で、できたらでいいんだけど、可愛い格好をしてきて』

「……は？」

固まった。トワのしどろもどろつぷりに、おそらく電話の向こうで赤面してるのではなからうか、という驚きと。可愛い格好？ 僕が？

「なんで僕が可愛い格好なんか」

言いかけて、はっと気付いた。もしや……

『今日の夜、友枝の提案でクリスマスパーティーをすることになったんだ。何故かボクの家で。友枝ウザイ。それで、友枝がどうしても大宮さんを誘いたいって言うからさ……』

成程。トワの様子がおかしい理由が判明した。

そのクリスマスパーティーに、おそらく刹那が来るのだ。

去年のイブの日も、刹那は内倉家にやってきた。刹那は僕の姉である久遠のことを気に入っている。それがどれくらいの感情かは刹那の態度からは読めないけど、何かと僕の家に来るのはどうやら姉

目当てだと、気付くまでは時間がかからなかった。

僕が大宮煌の身体で刹那とクリスマスイブを過ごすことになるのなら、可愛い格好をしてきてほしい、ということか。

トワの中身が大宮煌という女の子ののだと、改めて実感した。そして女の子として、可愛いところもきちんと持ち合わせている。

「了解です。とびつきり可愛い格好をしていきます」

僕は言つてすぐに、通話を切った。ツーツーという機械音が聞こえてくる電話を、しばらく耳にあてていた。

楽しいクリスマスパーティーのお誘いなのに。今日は特別な、聖夜なのに。

……なんでこんなにも、胸がもやもやとしてしまうんだろうか。

気分が沈んだままだったけれど、宣言してしまったのだから可愛い格好に着替えなきゃいけない。

僕は先ほどからクローゼットを漁り、色々衣服を取り出して姿見の前で合わせる作業を繰り返している。しかし……わからない。

どんな格好をすればいいんだろうか。部屋中にクローゼットから出した様々な衣服がメチャクチャに散乱している。女の子が言う可愛い格好とはなんなんだ。僕は途方に暮れていた。

立ち尽くしていた時、ピンポンと呼び鈴が鳴った。

一旦無茶苦茶になった部屋を放置し、僕は玄関へと急ぐ。沙良さんは病院の方にいるので、訪問客には僕が対応しなければいけない。

「はいはい」

軽い口調で言つて、最近覚えた美少女スマイルを造つて玄関を開けた。

笑顔がピシリと固まった。

「煌ちゃん、こんにちは」

「こここここんにちはっ」

あさひが輝く笑顔を見せて、立っていた。僕の即席美少女スマイルなんて、彼女の前では霞んで消し飛ぶ。まさに、ピカピカ笑顔だ。

「突然ごめんね。お母さんがこれ、煌ちゃんに持っていてって」

あさひは笑顔のまま、背中に隠していたものを差し出してきた。包装紙に包まれた小さな箱だ。

「あ、ありがとうございます」

僕は受け取って、その箱へと目を落とす。なんだろうか。大宮煌へのプレゼントを、僕が開けてもいいのだろうか。戸惑って、あさひの顔を見る。

今日のあさひは長めの丈のミリタリーデザインのコート、下は白いニットワンピースとブーツで合わせていた。髪の毛先は愛らしく、ふわふわと踊っている。寒い中を歩いてきたのか頬は薄桃色。私服のあさひを前にすると、いつもより更に緊張が増す。やっぱり可愛い。対して今の僕、終わってる。何せ着替える前だったので、ださい学校指定の蛍光色の緑ジャージだ。その上髪の毛ぼっさばさ。そういうええ起きてから顔も洗ってない。

「と、とりあえず上がっていきますか？」

鼓動が高鳴っていて、目がまわりそうだった。それでもなんとか

あさひを招き入れる。玄関で立ち話をしてさようならする間柄ではないんだし。何せ、煌とあさひは親友だ。別に言い訳じゃないよ。

「うん！ あ、でも……煌ちゃん出かける用事とかなかった？ 大丈夫？」

「全然全然大丈夫です！ どうぞどうぞ」

スリッパを並べてやり、あさひの前に置く。

僕は箱を小脇に抱え、あさひと共に廊下を歩いて行く。その道中でハタと気付いた。

しまった 部屋が汚い。

しかし気付いた時にはもう遅い。客間の前は通り過ぎてきている。自室はもう目前だった。

自室の前まで来て、僕はあさひを振り返った。

「ちょっと散らかってるんで、別の部屋にしましょうか」

「ううん、大丈夫だよ気にしないで」

あさひは容赦なく首を振った。僕は諦めて、自室の扉を開ける。

「わ」

背後から部屋をのぞきこんだのか、あさひが驚きの声を上げた。やっぱりこういう部分を見られてしまうのは、恥ずかしい。僕は赤面し、とりあえずもらったプレゼントを机の上に置いてから、猛然と衣服を拾い集めはじめた。

「いつもはこんな風じゃないんですけど！」

「煌ちゃん、やっぱりどこかに行くつもりだったんだ？」

あさひが部屋の中に足を踏み入れつつ、聞いて来た。衣服が山積みになっていると、やはり出かける前に見えるらしい。

「う、うん。夕方からなんですけど、トワの家に呼ばれて。あ、あさひも一緒にどうですか？」

黙っているのも変なので、正直に言う。あさひは微笑みつつも衣服を拾う作業を手伝ってくれた。

「うーんどうしようかなあ家族との約束もあるし。……それにしても、やっぱり煌ちゃんとトワ君って付き合ってるの？」

作業しながら。何気なく、といった風にあさひが聞いて来た。しかし僕にとっては何気なくな質問ではない。心臓が止まるような思いに、息を飲み込む。

「付き合ってないですよ!？」

全力で否定した。その全力っぷりが一層怪しさを増してしまった気がして、僕は更に動揺してしまう。

「ちが、違うんです! トワに呼ばれたから行くだけで! 友枝君が強引に決めちゃったみたいなんです! 刹那も来るみたいでなんか可愛い格好しなきゃいけないくて、それも大宮煌が刹那に恋してるからで」

僕は目をぐるぐるまわし、真っ赤になって言いながら。

喚いてる途中で、はっと正気に返った。

あさひがきょとん、と僕を見ている。しまった。

「煌ちゃん、刹那君のこと、好きなの？」

「……そ、そうみたい、ですね」

どうやらその事実をあさひは知らなかったらしい。というか、他のクラスメイト達も誰一人気付いていないと日常会話から予測できていた。完全に失言をやらかしてしまったと気付いた時にはもう遅い。僕は否定もできないで、俯き、小さく頷いた。

「そっかあ」

ふふふ、とあさひのくすぐったいような笑い声が聞こえて、僕は顔を上げた。

頬を染めて、とても、とても幸せそうなあさひの笑顔があつて。

「じゃあ可愛くならなきゃ、煌ちゃん」

「うん」

あまりに幸せそうなあさひの顔に見惚れて、僕はこっくりと深く頷いた。

「じゃあじゃあ、お手伝いしていいかな!？」

「わあ!」

あさひが迫ってきて、至近距離で目を輝かせた。近すぎて、とて

つもなく動揺した。

「それは、それはありがたいですけど、……うん、あの、お願いします」

「わたしに任せておきなさい！」

僕の動揺には気付かず、あさひが両手を握ってきてぶんぶんと振った。頼もしいけど、あさひと一緒に可愛い格好を考えることになるとは。さりげなく横を向き、とほほ、と小さく呟いた。

「えーと、じゃあまず、洗顔しよう」

あさひに握られたままの手を引かれ、僕は部屋を出た。

洗面所まで連れられてきてしまった。見られている緊張でぎこちなく洗顔クリームへと手を伸ばす。ぐしゃぐしゃと顔に塗りたくる。

「違う！」

「はいっ」

あさひが唐突に鋭い声を上げたので、僕は洗い流しかけた手を止めて背筋を伸ばした。

「洗顔クリームはちゃんと泡立ててから顔に伸ばさなきゃ！ 見てね」

あさひが僕のすぐ横に立ち、洗顔クリームを小さな手の平の上で器用に泡立てていく。なんという驚き。洗顔クリームってこんなに泡立つものだったのか。ぽかん、と見つめていると、あさひがその

泡を僕の顔にふわりとのせた。

「ゴシゴシこすっちゃ駄目だよ。そっと、そっと、のばしていくの」

「ふ、ふあ……」

凄まじく鼓動が高鳴っている。何この状況。

「煌ちゃん座ってくれる？」

あさひと煌の身体では身長差があるので、うまく洗顔しづららしく、あさひが言ってきた。僕は素直に従い、洗面所の隅に置いてあった籐椅子に腰掛けた。

あさひが柔らかく滑らかに頬やおでこを撫でていく。座って顔を少し上に向けている僕は、そのあまりの気持ちよさにむずむずと身体が火照っていくのを感じた。

「はい、おしまい。ちゃんと洗い流してね」

「ふあい」

僕は、ぼわわ、としたままあさひに連れられて、泡を洗い流す。丁寧に全部洗い流したら、また腕を引かれて椅子に座らされた。

「ちょっと待っててねー」

あさひがそう言って、何か作業を始めた。
火照った身体のまま、僕は目を閉じた。なんだか、幸せだ……
と、顔にふわりとお湯で温めたタオルをのせられた。

「こつやつてあつためると、すぐく血行がよくなつてお肌がツルツルになるんだよ」

遮られた視界の中、あさひの声だけが届く。顔がほかほかして気持ちいい。なんという夢見心地なんだ。しかしぼんやりと蕩けそうな思考で、僕は今とてつもないチャンスであることに気付く。

あさひと二人きりの空間だ。今だったら、彼女の本心を色々聞きだせるかもしれない。

少し卑怯かもしれないけど、直接的なことじゃなかったら、聞いてもいいんじゃないかな。僕は自分の中で良心と葛藤し、喉をぐくり、と鳴らした。

「あの、あさひ。あさひは　好きな人、いるんですか？」

「え？　やだなあ煌ちゃん突然！」

タオルで顔をバシバシ叩かれた。照れ臭そうに頬を染めているあさひは、慌てた様子で僕の顔にクリームを塗りたくってきた。

「わたし、あんまり恋とかそういうのって、わからなくて」

「そ、そうなんですか」

あさひらしい回答に、僕は内心でホッと胸を撫で下ろした。

そこに間にも、あさひが色々なクリームを僕の顔に丹念に塗りたくってくる。

ひとしきりあさひの指を堪能した後、完全に骨抜きにされた僕の顔を、あさひがのぞきこんできた。

「煌ちゃんにも読ませてあげたことあるよね？　わたし、ああゆう

のにすつごく興味があるの」

「ああゆうの？」

恥ずかしそうにもじもじとしているあさひを見て、僕は目を細める。可愛いなあ。

「だから、男同士とか、そういうの」

……可愛、え？

「いつつも休み時間に書いているの。男の子同士が恋しちゃう小説とか。えへへ。さ、最近はね、トワ君と刹那君のお話を書いているんだよ？ 書いててすつごくドキドキしちゃうんだあ」

僕は彼女のことを知る度に、もっと好きになって……
全てを受け入れ……

「なんで泣いてるの？ 煌ちゃん？」

洗顔を終えて、ツヤツヤピカピカになった僕は部屋に戻ってきた。

そしてあさひは楽しそうに、化粧までしてくれた。

「元々目鼻立ちがしっかりしてるし、すごくキレイな顔だから薄くしといたからね」

僕は今まで知らなかったけれど、煌の部屋に化粧道具は一通り揃っていた。知っていたとしても、僕には使い方などわからないけれ

ど。煌の部屋の鏡台の前で全てあさひにやってもらった。笑顔であさひが告げたので、僕は鏡で顔を確認。

「わ、わぁ」

思わずため息が漏れた。

眉毛はキレイに整えられ、睫毛はくるとカールして大きい瞳が更にぱちりと澄んで見える。頬はピンク。唇は艶やかに光っている。

「可愛い」

「うん、すごく可愛いよ！ 煌ちゃん」

僕が鏡に向かって漏らした呟きに、後ろに映っているあさひがにっこりと返す。

いつの間にかあさひが僕の髪の毛にヘアアイロンをあてていた。

「つ、次は何を？」

「えへへ、折角だから髪の毛アップにしようかって。それとも、このまま緩く巻いて垂らしても可愛いし」

あさひは本当に楽しそうだ。可愛くなる大作戦にかなり長い時間を費やしているのだが、全く苦に感じないらしい。女の子、恐るべし。

「どっちがいいかな？ 剎那君はどんな女の子が好きなのかなあ」

「……お姉さん系かな」

僕が言うと、鼻歌を歌いつつあさひが器用に髪をくるくるとヘアアイロンに巻きつけていく。

「垂らした方がお姉さんっぽいよね。煌ちゃん可愛いからすごく楽しい」

「うん、可愛い、ね……」

思わず鏡の中の煌の顔に見惚れてしまうほど。やはり、大宮煌は美少女だ。そしてあさひの手によって更に今日は輝きを増している。

「はい、出来上がり」

真っ直ぐだった長い髪の毛が緩く巻かれ、ふわふわと揺れている。すごい。魔法のようだ。

鏡の中の自分に見入ってる間に、気付けばあさひが服を手にとつて物色していた。

「お姉さん系だったら、こんな感じかな」

胸元が開いたVネックのニットセーターに、段フリルのミニスカートを差し出された。

「みにすかーと……」

こんなものがあつたとは。いや、気付いていたけれど。正直、選んでほしくはなかったかもしれない。しかし、目を輝かせているあさひを前に首を横に振ることなんて、できない。

「それに、はい、これ！」

ニーハイソックス。この寒い中、腿を露出しろ、と。僕は顔を強張らせつつ、受け取る。期待の眼差しを向けるあさひを前に、どうにでもなれとジャージを脱ぎ捨てた。最近着替えも自分でできるようになった。目は閉じたままだけど。

「煌ちゃん！」

突然にあさひの鋭い声が飛んできた。僕はビクリ、と身を強張らせる。

「はいい！」

「下着に妥協は許しません！」

ああ、そういえば上下適当な組み合わせだった。毎日下着を選ぶのが恥ずかしくて、上から順番に着用した結果だ。まじまじと自分の下着姿を確認してしまい、恥ずかしくなった。普通に見ちゃったよ。豊満な白い胸にあてがわれた薄い布。やっぱり未だに煌の身体を直視はできない。ドキドキしてしまう。

「勝負下着でいきましょう！」

あさひが真剣に言い放った後、赤面した。僕は鼻血が出そうになって慌てて首の後ろをたたく。あさひからそういう言葉が出てくるとは。何かとキツイ、この状況。

……と、いうわけで。下着までコーディネートされ（色々と耐えられそうになかったのでは）見ないで着用）服を着た。姿見の前で確認。完璧なる絶対領域の完成に嘆息した。大宮煌、可愛すぎる。

そしてそれを一緒に作り上げたあさひに、心から感謝した。

気付けば時計は四時半を指している。凄まじい戦いの後のように、精魂尽き果てた僕は深くため息を吐き出した。

しかし本番はここからだ。

「そろそろ行かなきゃ。今日はありがとう、あさひ」

「ううん、すごく楽しかった！ 頑張ってね煌ちゃん」

僕も疲れたけれど、楽しかった。

やっぱりあさひは僕にとって、胸を温かくしてくれる素晴らしい女の子だ。腐女子な彼女だって、大好きだって胸を張って言える。

「あのね、さつき煌ちゃんに言われて考えてみたの」

「え？ 何をですか？」

あさひが一步近寄ってきた。そして背伸びして、口に片手をあてる。何か耳打ちをしようとしている仕草だったので、僕も耳を傾けた。

「恋する気持ちってあんまり考えたことなかったけど、わたし、真剣に自分の気持ちに向き合ってみたんだ」

「……う、うん」

「わたしが誰かに恋してるとしたら、それはいつちゃんなのかなあって」

「だから、やっぱり今日は一緒に行けないや。ごめんね煌ちゃん。煌ちゃんのことを大好きないっちゃんを見てると、たまに辛いの」

「あ、でもわたし、煌ちゃん大好きだよもちろん！ 変なこと言っちゃって、ごめんね」

……しばらく、思考が停止してしまっていた。

第五話 聖夜の美少女清掃員？

僕とあさひは、ちょうど家の方に戻ってきた沙良さんと玄関で鉢合わせた。沙良さんが着飾った僕に目を留め、「へえ」と目を丸くしている。

「とうとう女の子として生きていく決意をしたんだね」

「違います！」

そこは断固首を振った。あさひが横で首を傾げている。僕はそれに気付いて、慌てて沙良さんへと歩み寄った。

「そういう発言をあさひの前でしないでくれますか！？」

最小限まで声を抑え、沙良さんへと耳打ちをした。それを受けて、沙良さんがニヤリと口の端を吊り上げた。

「ふむ。どうやら楽しい状況になってるみたいだね。キラリが出かけるみたいだし、あさひ、うちでご飯食べて行くかい？」

「沙良さん！」

僕は思わず声を荒げた。何を、何を言うつもりなんだこの人は！

「ごめんなさい、夜は家族と約束があるんです」

遠慮がちにあさひが告げるのを見て、僕はほっと胸を撫で下ろす。

「あ、でもちよつとだけ沙良さんとお茶したいな」

ほつとした直後に飛び出たあさひの言葉に、表情が強張った。泣きそうな顔になった僕を見てか、沙良さんはますます意地悪く笑みを深める。やはりこの人、煌と血繋がってる。

「じゃあお茶しようか。積もる話もあることだしねえ」

「はい！」

あさひが元気良く返事をした。行くのやめようかな……僕は靴を履きかけていた手を止め、うじうじと沙良さんとあさひの顔を窺う。

「行つてらっしゃい」

二人揃つての笑顔での見送りに、項垂れて家を出た。

外に出ると、ここ最近で一氣に下がってきた気温に身が縮こまる。腿、死ぬ。夕刻の街中を、腿の冷たさに内股になってしまいながらもなんとか前へと進む。

天を仰ぐと、冷たい空気で空は澄み切っていた。陽が落ちれば満天の星空が見えそうだ。雪、降らないだろうなあ。特にロマンチックな状況に憧れはないのだけれど、ホワイトクリスマスなんて、心躍るじゃないか。

……横に、あさひが、いてくれたら。

上げていた顔が自然と地面に降り、はあ、と息が漏れた。思考の外に追いやろうとしても、どうしても考えてしまう。

あさひは、友枝壺に恋している。少し考えてみれば、気付いたかもしれないのに。だってあさひは、友枝と話す時はすごく活き活きとしていて幸せそうだったじゃないか。

なんで僕はあんな質問をしてしまったのだろうか。あんな質問、

しなきゃよかった。

知らない方が幸せだった。

どこまでも落ちた気分のまま、僕はなんとか歩みを進める。生気を失った幽霊状態だった。

「大宮さんどこ行くんだ？」

唐突な背後からの呼びかけに、僕は生気のない顔のまま、振り向いた。最近大宮さんと呼ばれて普通に反応してしまう。

「あ……刹那」

「デート？ そんな可愛い格好して」

「こ、これはそのー……」

トワの家に行く前に刹那と会ってしまった。そういえば通学中もよく見かけるし、刹那と煌は近所さんなのだった、と思い出す。元はといえば刹那の為にめかしこんだのに、薄い反応しか返って来なかったな……少なからずがっかり。ってなんだこの乙女な感情は。刹那はシンプルに黒でまとめた格好だ。二人が並ぶと、とても絵になるのだろう、と客観的に思う。

「トワの家に、呼ばれてて」

どうせ知れることだし。僕は隣に立った刹那に向けて告げる。少し意外だったのか、刹那が珍しく目を丸くしている。

「俺も永久の家に行くつもりだったけど、もしかして邪魔？」

「あ、いや、その、刹那は来てくれないと困る」

「……ふーん。まあ目的地が一緒なら一緒に行くか」

刹那が軽く言って、歩き出す。僕も慌ててそれを追った。

イブの日に好きな男の子と二人きりで歩くんなんて、素敵な状況だ。ごめんトワ、と心の中で呟く。それを望んでいるのは大宮煌で、決して僕ではない。

ちくり、と胸が痛くなった。まただ。

なんで僕は、大宮煌が刹那を好きなことを思い知る度に、こんなにも胸が苦しくなってしまうのだろうか。

「でも永久は、保田あさひのことが好きなんだよな。もしかして大宮さんって、横やり入れてるの？」

「……は？」

僕のぐるぐると巡っていた思考が、停止した。

「な、ななななんで、あさひのこと好きなの、知ってるんですか！？」

僕はあさひに密かな恋心を抱いていることを、誰にも話したことはない。トワには知られてしまったけど、トワがそんなことを刹那に話すとは思えない。何故だ、何故知ってる。動揺に声が震えてしまった。

「永久が保田あさひを好きなこと？」

刹那が確認してきたので、何度も頷く。頬が火照っているのは、

寒さの所為だけじゃない。

「見てたらわかるし。永久、ずっと保田あさひのことばかり目で追ってるじゃん。……あ、でも最近はそんなこともないか。飄々としてるな。そうかそうか」

喋りながらも、刹那は何かに納得した風に頷いた。

「そうかそうかって……？」

僕は口を尖らせて、問う。恥ずかしさのあまり、拗ねたような口調になってしまった。

「大宮さんといい感じだから保田あさひは目に入らなくなったのかな、と」

「……！」

聞き逃せないセリフに、僕は目を剥いて刹那を見る。顔は美少女だけど、今の僕は、絶対怖い顔になっている。何かが、沸々と、湧き上がってきている。

「高校生の淡い恋心なんて、そんなもんだろ」

「違う！　僕は！　……いや、僕じゃなくて。永久は、あさひのことが好きなんだ！」

「何怒ってるんだ？」

「先に行くから！」

僕は怒りのままに吐き捨て、駆け出した。

自分でも珍しいぐらいに、怒りの感情が溢れてどうしようもなかった。刹那に対して、やりきれない怒りが心の中で暴れていた。

走りながら、暴走している感情に唇を噛んだ。

僕は、保田あさひに恋している。

きっかけは些細なことだ。ただ、目立たない僕にも目が合うと必ず笑顔を向けてくれる、なんてそんな理由だ。元の身体だった時に会話をしたこともなくて。大宮煌の身体になってから、僕は好きになった女の子のことをやっと思知ることができた。

あさひが友枝壺のことを好きだとしても、気持ちは今でも絶対に変わっていない。変わっていないはずなんだ。息が詰まるぐらいに胸が張り裂けそうなくらい。あさひが好きだ。あさひが好きなんだ。それなのに。

どうしてか、僕は刹那に嫉妬している。大宮煌の恋している、僕の友達に。

そのことが、余計に腹が立った。何より 僕自身に。

「いらつしゃい、煌ちゃん。寒かったでしょう？」

はあはあ、と荒い息を吐き出す僕を最上級の笑顔で迎え入れてくれたのは、姉だった。

全速力で走ってきたおかげで、寒さも忘れていた。身体中がぽかぽかして、熱いくらいだ。僕は乱れている呼吸と、落ちたままの気分、姉へ返事せずに玄関へと入ろうとし、

「返事は？」

低く鋭い声に突き刺された。

「ごめんなさいこんばんは久遠さん」

僕は立ち止まって、無理矢理に声を絞り出した。何故かこの姉の言うことには一切逆らえない。

姉が柔らかに微笑む。「よくできました」と背中に声をかけられた。絶対飼いたい犬かなんかだと思われているに違いない。

「今日の煌ちゃん、いつにも増して可愛いわ。どうしちゃったの？
何かに目覚めたの？」

「そ、それはトワに言われて仕方な」

「大宮ああああ！！」

僕が繰り出そうとした言い訳を遮って、声が飛んできた。
友枝に抱き締められて頼ずりされた。殺意が芽生えた。

「なんて、なんて可愛いんだ！！　そうか、俺の為にオシヤレをしてきてくれたんだな！」

「お邪魔します」

何はともあれ、招待されたのだから家に上がろう。僕は友枝を完全無視し、靴を脱いで家へと足を踏み入れた。懐かしい我が家の空気が心地良い。姉とトワだけだったなら完全に自分に戻れるけど、今日は友枝もいるし、刹那も来る予定だ。大宮煌を演じなければ。そのことを姉も理解しているから、きちんと煌ちゃん、と呼んできた。こんな姉でも優しい一面を持っているのだ。

リビングへと歩いていく僕の背中に、ペトリと姉がひつついてき

た。

「刹那君や友枝君にばれたら、どんな面白い状況になるのかしらウフフ」

何か囁かれた。絶対この状況、面白がつてる……！

「胸をヒヤヒヤさせるがいいわ」

……やはりいつも通りの姉だった。

リビングに入ると、既に夕食の準備は出来ていた。ツリーや飾りはさすがにないけれど、食卓に並べられた料理の数々はクリスマスらしいものばかり。大皿に盛られたサラダ、ローストチキン、キッシュやパスタまである。しかも手作りのデコレーションケーキ。全て一流シェフが作ったかのように美しい。

「これ、全部作っただんですか？」

いい匂いにお腹の虫が騒ぐ。そういえば朝食食べたきりで何も食べてない。僕は涎が垂れそうになるほどに食卓を凝視してしまった。例年になく豪華だ。

「今年はきら……トワが全部作ったの。友枝君も手伝ってたけど。……私にせめてものお詫びって。こんなものに釣られる私じゃないけど」

姉は少々不満げながら、口の端に涎が光っている。釣られたらしい。僕は豪華料理の前に立つトワを見る。料理も得意なんだな、と素直に感心したのだが、トワは気まずそうに視線を逸らしている。

「べ、別にはりきつたわけじゃあないからね」

ああ、刹那が来るからか。僕は途端、目の前の料理が色褪せて見えてきてしまい、頭を振った。今日の僕おかしい。こんな気持ちじゃ、楽しめないじゃないか。

呼び鈴が鳴った。ドキリとしてしまう。このタイミングで来てほしくはなかった。全然気持ちの整理がついていない。

「はい」

パタパタとスリッパを鳴らして、姉が玄関へと走っていく。立ち尽くす僕に、またも擦り寄ってくる友枝。視線を合わせたくもない。

「なんか今日の大宮、冷たいよな」

「別に」

「ああっなんかゾクゾクするぜ！ やっぱり大宮はこうじゃないとな！」

……あさひは、なんでこんな奴が好きなのだろうか。

僕は嘆息し、やっぱり来るんじゃないかと後悔ばかりが胸に押し寄せてくる。今日の僕は、もう駄目だ。マイナス感情の塊と化している。

こんな状態で、僕、笑えるのだろうか。

タイミングよくリビングの扉が開き、姉と刹那が現れた。

「よ。トワ」

「こんばんは刹那くん」

刹那の挨拶に、トワが笑顔で応じている。

僕はなるべく存在感を消す為に、隅っこで小さくなっていた。

「揃ったから始めましょうか」

姉の言葉に、全員が頷いた。奇妙で憂鬱なクリスマスパーティーの、開幕だ。

刹那が初めに豪華料理の並べられたローテーブルの前に座った。僕は率先して刹那の斜め向かいに座る。少しでも距離を開く為だ。友枝がニツコニコで右隣に座ってきた。犬のようにべったりひっついてくる友枝。……こっちの対処は考えてなかった。

「早く座れよ永久」

刹那に促されて、トワがぎこちなく足を前に進めている。おそらく刹那の隣に座りたいんだけど、緊張してるんだろう。今日のトワは、完全に恋する女の子モードだ。

「あ、お前は大宮さんの隣な」

刹那がトワに向けて、言った。

「はっ？」

僕は思わず身を乗り出してしまった。何言ってるんだこのバカ、と突っ込んでしまうところだった。

「久遠さんが俺の隣」

ああ、と頭を抱えてしまいそうになる。刹那め、刹那のバカめ……！　少し収まっていたはずの怒り、復活。

トワはぎくしゃくと頷き、僕の左隣に座ってきた。姉が全員のグラスにジュースを注いでいく。自分のグラスにだけ鼻歌交じりにワインを注いでいた。

「これね、きら、じゃなくてトワからのクリスマスプレゼントだよ。フッフ、素敵な弟を持って幸せだわ私」

「ご機嫌な様子で姉が言う。姉の酒好き情報をどこで手に入れたのか、どうやらトワ、姉を餌付けして飼い慣らす作戦にしたらしい。二人が仲良くなってくれるのはありがたいことだけど、姉が奪われたようで少し寂しい気がしないでもない。」

「それにしても、すごい料理だな。これ全部久遠さんが？」

刹那が姉に向けて問いかけている。今日の刹那はやたら饒舌だ。何か心境の変化でもあったのか。こういう日こそ、寝ててほしいと切に思う。

「うっん。今年はトワが作ったの」

にこにこ姉が告げる。完全に飼い慣らされている。

「お前料理とかするの？」

刹那に目を向けられて、トワが表情を強張らせた。前にも増して、刹那に対する態度がきこちなくなってる感がある。そして友枝は、うっとり僕にひつついてきている。

「す、すごいですよね。この料理全部作っちゃうなんて！ トワ、刹那の為にはりきったんですね！」

僕は友枝を片手で思い切り突き飛ばし、黙っているトワに代わって発言した。

直後、空気が固まった。友枝は転がった。

「は？ 俺の為？」

……また失言やらかしちゃったよ、畜生。

「乾杯しよう、乾杯！」

僕は立ち上がって、グラスを掲げた。これはもう、無理矢理にでも状況を進めるしかない！

刹那も目の前の料理に気を取られているのか、深くは考えることをやめたようだ。グラスを手にとって姉と乾杯している。

ようやく食事が始まった。姉がご機嫌で刹那と会話をしている。僕の横で黙々と食すトワ。そして僕もたまに会話に参加はするものの、隣のトワの様子が気になって散漫になってしまっていた。そんな中、友枝を見ずに突き飛ばす能力を手に入れた。

やきもきしながら、沈んだ気分のまま、夜は深まっていく。

お腹が満たされてきてまったりとした空気の中、僕は一人、あらぬ想像をしてしまっていた。刹那とトワがいい感じになったら僕の身体が刹那とあんなことやそんなことに、なんて……だめだ、それだけは駄目だ！ どうかして僕の豊かな妄想力！

「最近永久、無口だよな」

唐突に刹那が、トワへと言葉を発していた。

僕は何事かと妄想世界から帰還し、状況を改めて見る。いつの間にか向かいに座っている姉が、机に突っ伏して寝息を立てていた。姉は酔っ払うとすぐに寝てしまう。寝顔はあどけなくて、可愛く見える。友枝は隅っこで体操座りしてテレビ見てた。背中が完全にいじけている。しかし今は姉や友枝に目を向けている場合ではない。

「そんなこと、ないよ」

やはりトワの笑顔がぎこちない。こっちがハラハラしてしまう。

「もしかしてこの前のキスの件、怒ってるのか？」

刹那が肩をすくめながら、問う。

「そ、それは怒ってない、と言えば嘘になるけど」

トワが思い出してしまったのか赤面し、小さく呟く。ありえないトワを目の前で見てしまった。

「罰ゲームだったんだ。大宮さんがやれって言ったんだ」

「嘘つけこの悪魔めえええ！」

僕は立ち上がって光速で刹那へと迫り、その後頭部をポカリと叩いた。

「何すんだよ大宮さん」

ムツとした表情で刹那が僕を振り仰いできた。しかし僕の怒りは

収まらない。ずっと蓄積していたものが、爆発した。

「勝手にトワにキスしたくせに！ そんなこと誰がヤレって言ったんですか！」

「それってヤキモチ？」

刹那にニヤニヤと意地悪く笑みを向けられ、

「やっぱり大宮さん、永久のこと好きなんだ？」

言われた言葉に、かぁあと、燃え上がるように、お腹の底が熱くなった。

「俺にまでヤキモチやなくなつていいだろ」

刹那が続けて言ってきた。

僕の中で、何かが弾けた。

「あのな！ 大宮煌が好きなのはお前なんだよこのバカ！」

僕が刹那へと叫んだと同時に、

「えええええっちょっ、なんで大宮、突然告白を！？」

友枝の驚愕の叫びが耳に届き、しまった、と気付いた時にはもう、手遅れだった。

トワが無言のまま、刹那の背後にいた僕へと歩み寄ってきた。ばしん、と 思い切り平手打ちを食らった。

トワは何も言わず、くしゃりと顔を歪め、その場から走り去って

行った。ただ、と階段を駆け上がっていく音が聞こえた後、残された静寂。

「……」

……最低なことをしてしまった。僕は言葉もなく、うな垂れる。

「俺、泣いていいですか？」

友枝が既にメソメソ状態で聞いてくる。

「……僕、帰ります」

殴られた頬が熱かった。叩かれた痛みよりも……心が悲鳴を上げていた。

トワを、傷つけてしまった。好きな人を前にして、あんな最低な告白を目の前で見せられたら、自分はなんと思うだろうか。考えただけで、泣きそうになる。

助けたかっただけなのに。守りたかっただけなのに。

自己嫌悪の極地に陥り、とぼとぼと肩を落として僕は玄関へと歩む。今日の僕は、どうしようもなく最低だ。

玄関を出て、涙を堪える為に空を見上げると、予想は外れて空に星は見えなかった。気付けば雲が空を覆ってしまっている。

白い息を吐き出しながら、歩みを進めていく。

心の中がぐしゃぐしゃだった。

そんな中で リフューズの産声が、突如耳に届いた。久々のリフューズの声に、すぐに状況が理解できなかった。

「……あ」

行かなきゃ、自然と早足になる。

ぼんやりしたまま、声の聞こえてくる方角へと進む。

傷つけてしまったトワの顔ばかりが、脳裏をよぎる。あさひの恋心、友枝の恋心、刹那に対する嫉妬、自己嫌悪。そういうのがぐるぐる頭の中でまわっていて自分が今一体なんの為に走っているのかも分からなくなる。

それでも、やらなきゃいけない。胸にしまっていたペンダントを取り出す。

「清掃開始！」

リフューズがいるだろう場所に近付いてきたところで、強く叫んだ。

……けど。

「あれ……」

変身できなかった。僕は呆然と立ち尽くす。

「なんで？」

呟いて、思い出した。

完全暗記してしまった、手帳の一文を。

美少女清掃員の心得の巻（その三！）

挫けて、心が弱っている時は気をつけて。

変身するには強い心が必要です。落ち込んでいる時は、美少女清掃員に変身できなくなってしまうかも。

というわけで、強い心を持って、はりきって変身レッツ、トライ

そうだ、こんな気持ちのままじゃいけない。

「清掃開始！」

僕は気持ちを入れなおして、もう一度叫ぶ。しかし、変身の光は出ない。

「清掃開始！ 清掃開始！ ……クソッ」

何度叫んでも、結果は同じ。そしてリフューズの咆哮が、途切れた。グズグズしている間に街へとリフューズが出ていってしまう。僕は変身を一旦諦め、声の聞こえてきた路地裏へとまわりこみ、走った。

……そしてこんな時には。

ただの人影かと思った。ずるずるとゆっくりとこちらに向かって、歩んできているソレを目にして、僕は息を呑む。

「ヒトガタ……」

目にしたことはなかったけれど、おそらく、目の前にいるのがそうだと。わかる。感じる。

心はボロボロで。変身もできなくて。

僕の前には、ヒトガタがいた。

第五話 聖夜の美少女清掃員？

どうしたらいいんだ、と視線を巡らせた。周辺は照明が一切見当たらない暗がりなので、視界がとてつもなく悪い。何もないうらぶれた路地だというのはかろうじてわかる。

うごめくヒトガタだけが、暗闇の路地に溶け込まず、異質な雰囲気を発している。少しずつ、少しずつ僕の方に歩み寄ってきている。肌にじわじわと伝わってくる、負の空気。生気が感じられない、人間ではない影のようなもの。

逃げてしまえばいい。清掃員だって、ヒトガタに遭遇したら逃げると聞いている。

そんな心が、僕の中で響いた。このままヒトガタの進行方向に立っていれば、確実に襲われる。誕生したばかりからなのか、ヒトガタの動きはゾンビのように緩慢だ。今ならば。見なかったことにしてしまえば。

『あんまりリフューズに……ヒトガタに、執着しないでほしい』

いつかに言われた、あさひの言葉が脳裏を過ぎった。

でもここで僕がヒトガタを見過ごせば、どうなる？

僕はぐつと唇を噛み締め、その場になんとか踏みとどまった。

大宮煌の父親がヒトガタに成り代わられて、母親を殺したように。ヒトガタは、全てを奪っていく。

今の僕は、大宮煌だ。ヒトガタを前に逃げるわけには、いかない。ペンダントを改めて握り締め、息を深く吸い込んだ。

「清掃開

」

僕が気持ちを入れなおして叫ぶよりも先に、

気付けばヒトガタは眼前だった。

「!？」

先ほどまでヒトガタとはかなり距離が開いていたはず。なんでだ。凍りつき、目の前にいるヒトガタをただ凝視するしかなくて。

ヒトガタは気味が悪いくらいに、気配が全く感じられない。音もなくするすると手を伸ばしてきた。

「くっ」

咄嗟に僕は一步退がる。けれど、足りない。まるでヒトガタの手が伸びたように見えた。僕の二の腕は掴まれていた。それだけで、それだけなのに。ぞくり、と震えた。逃げなかったことを後悔してしまうくらい、全身に駆け巡る戦慄。

「い、嫌だっ」

僕は耐え切れずにひきつった叫びを上げる。必死になって掴まれた腕を振りほどこうとする。でも腕は動かない。全力を振り絞っても、掴まれたところは微動だにしない。表情は強張り、歯の根がしみ合わず、カチカチと鳴ってしまう。

とてつもない力に引き寄せられた。ヒトガタのもう一方の手が、僕の首をわし掴む。そのまま、なんの苦もなく僕を片手で持ち上げてきた。

「ぐ、う……」

息が苦しくても、もがいても、何一つ抵抗できない。

ヒトガタの口が、ぱっくりと開いた。開いた口の先も闇一色だっ

た。僕の眼前にひろがるのは、ただただ闇。食べられる。このままじゃ、食べられて

「あああああああ！！！」

その叫びは、僕のものではなかった。ヒトガタが叫んだものでもない。ヒトガタは、吹き飛ばされた。僕はその場に転がり、大量に吸い込んでしまった酸素に咳き込む。何が起きたのか、と咳き込みながら顔を上げる。

トワが、僕の前に立っていた。

トワがヒトガタに突進してきたのだと気付く。肩を上下させて、立っていた。吐き出す荒い息が空気を白く染める。

「トワ！」

僕はなんとか立ち上がり、横に並んでトワの横顔を仰ぐ。

トワの眼が暗闇の中でギラギラと光り、僕の方を全く見向きもせず、

「ト……」

「うわああああ！」

絶叫し、倒れているヒトガタへと向かって駆けていった。

ヒトガタの上に押し掛かり、何度も拳を叩きつける。

その動きは、狂気そのものだった。

入れ替わる前に見た、大宮煌の、狂気。

ヒトガタへと打ち続ける拳が割れたのか、トワの手から血が飛び散る。それでも、トワはやめない。ただ叫び、ヒトガタに襲い掛かる。背中に宿るのは憎しみ一色しか見えない。

ヒトガタは殴りつけられ続け、ただうねうねと影が蠢いているように見えた。全くダメージが与えられているようには見えなかった。やっぱり、普通の攻撃なんて意味がないと思い知る。今は突然の攻撃を甘んじて受け入れているけれど、程なく反撃が返ってくるだろう。

それでもトワは止めない。

僕の中に、何かが込み上げた。

「トワ……」

トワ 違う。大宮煌は怒り、憎しみ、叫んでいる。でも、僕には理解ってしまった。煌は泣いているんだ、もう、ずっと前から。涙もなく、泣き続けている。

僕は願ったじゃないか。彼女の心を救いたって。絶対に失ったりしないって。

心が、カチリ、と定まった。思い悩んでいた全てが、流れ落ちていく。

僕は駆けて、トワを突き飛ばした。

「っ!？」

トワがヒトガタの上からはじき飛ばされ、地面に崩れた。肩を思い切りアスファルトに打ちつけたらしく、表情が歪んだ。それぐらい全力で突き飛ばさないと、正気は戻らないと思ったから、そうした。

「何するんだ大宮さん!」

トワは身を起こし、ギラギラと殺気だった眼のままで僕を睨みつけてきた。その眼差しを受けて、それでも、僕の顔に浮かんだのは

笑みだけだった。

「やっと状況理解できましたか？ わかったんならさっさと退くなり逃げるなりしてください」

怖いままだったし、強がりなのは自分でも嫌というほどわかる。それでもトワに向けて笑みを向ける。震える指先を背中に隠して。

「君は今、ヒトガタに何もできないただの一般人。ヒトガタを倒す美少女清掃員は、僕なんです」

僕は強く、言い放った。直後、決意に胸が熱くなる。……違う、胸に提げているペンダントが実際に熱を帯びているのだと気付いた。変身できる。

僕は確信を持って、星のペンダントを握り締めた。

僕は、彼女を必ず救う。心からそう願った。口を開き、息を吸い込む。

「清掃か　煌ちゃん！　コレを使って！」

あんぐり、と口が開いたままになってしまった。どこからか第三者の声と共に投げつけられた箱。鋭く飛んできた箱を、慌てて受け止める。

「美少女清掃員、ピカピカ見参！」

白い作業着に身を包んだあさひが、仁王立ちしていた。手には既に大型掃除機を構えている。一足跳びでヒトガタへと詰め寄り、立ち上がって忍び寄ってきていたヒトガタへと掃除機を叩きつける。その細腕のどこに力が隠されているのか。掃除機を軽々と振り回し、

ヒトガタに何度も攻撃を繰り返した。

「空、の太陽よっ！ わた、しのもとにつ照り、光れ！ 街、を汚すつ悪、い子は！ ピカピカがお掃除、しちゃいます！ ぶんぶん！」

攻撃しながらも、決めセリフは忘れていなかった。激しい動きに桃色の髪の毛が波打つ。

僕は啞然としてその様子を眺めてしまった。それからようやく正気に返って、あさひが投げつけてきた箱へと目を落とす。

そういえば今日あさひが持ってきたプレゼントを、開けずにそのまま置いてきていたのだと思い出した。

急いで包装紙を破り、箱を開く。

その作業中にもあさひは攻撃の手を緩めない。ヒト型はそれを受け流しながら、手から長い獲物を生み出した。それは、レイピアのようなすらりと細長い剣だった。リフューズが清掃員のように武器を生み出したことに驚きを禁じえない。やはりルーツは一緒、ということか。

ヒトガタが振り下ろした剣を紙一重であさひが飛び退き、避ける。掃除機を突き出して反撃。しかしヒトガタの速度は更に上回り、避けながらも間合いを詰め、掃除機のホース部分を断ち切った。

早く、早くどうにかしなければいけない。僕はもどかしい気持ちで箱の中身をのぞく。

中に入っていたのは ペンダント。

今まで首に提げていたものとデザインは異なっている。小さな星の形が連なった、大人びたアクセサリー仕様だ。僕はすぐに今まで着けていたペンダントを首から外そうとした。しかしアクセサリー類を着け慣れていない僕にはうまく外せない。もたもたと、手先が滑る。

その間にもあさひにヒトガタが迫っている。焦燥だけが先走る。

苛立ちから思い切って鎖を引きちぎってその場に投げ捨てた。

しゃらん、と地面に金属の鳴る音がした。新しいペンダントをようやく装着。その時、武器を壊されて素手で戦うあさひに、ヒトガタの剣先が肉迫するのが視界に入る。

「きゃっ」

あさひが斬り付けられ、作業着の右肩口が切り裂かれた。あさひは咄嗟、後ろへと跳躍してヒトガタから距離を取る。肩膝を地面に付けているあさひの表情に浮かぶ、苦悶の色。地面に点々と血が落ちていく。そして、追い討ちにとヒト型が迫ってきている……！

「あさひ！」

トワが走り寄って行くのが視界の端に映った。

時間がない！ もう、何にも縛られるな！ 何も考える必要なんてない！

「清掃開始！」

今度こそ、と僕は新しいペンダントを握り締めて叫んだ。

まばゆい閃光が身体から放たれた。衣服が解けていく。今までの数倍の速度だった。瞬きの間、変身は完了していた。

「美少女清掃員キラキラ参上！」

オレンジ色のつなぎ作業着は、下がミニスカートに変わっていた。何故。

髪は、その名の通り、煌く金色。地面にまで届きそうな、ポニーテールが揺れる。髪の毛更に伸びてるし。しかも、全身が発光して

いる。

「宙の星よ！ 僕のもとに輝き、煌け！ 街を汚す悪い子は、キラキラが片付けちゃうんだから！」

ポーズを決め、閃光に怯んで動きを止めていたヒトガタに人差し指をびしつと向ける。

「メッだぞ」

完璧な殺戮ウイंकを決めた。直後、僕は地を蹴った。今までと違う。身体から満ち溢れてくるパワー。

もう誰も僕を止められやしない！

瞬間で手に現れる獲物。モップも今まで以上に輝き、柄から毛束まで全て光の粒子で形成されている。ヒトガタが反応する前に、それを突き出した。

「今キレイにしてあげるッ」

自然に浮かぶ微笑。

「……！」

ヒト型は僕の速度に反応できない。モップを突き出しながら突っ込めば、ヒト型が初めて見せるような必死な動きで、剣を大きく振るった。

続く剣撃から僕は一時的に身を引く。

バックステップを踏みながら、最終的に近くの石塀に手をかけ、両足を止める。

じわじわと心の中に湧き始めた実感を噛み締める。

僕は、確実に強くなっている。

息を呑んだだけの一瞬、ヒトガタが眼前いっぱいになくなって、剣を胸元に構えて、僕が掴まる石塀ごと切り裂こうと振り払ってきた。

僕の微笑は消えない。

攻撃が届くよりも早くに、跳躍。更に石塀上部を足場に、真上へと飛び上がった。

「勝てる」

宙に浮く、ゆったりとした時間の中で呟いた。
ヒトガタの剣が僕の居た石塀のその場所をパツクリと切り取ったのが、見えた。次にはもう上空の僕へと向かってきている。同時に上に向けて振るわれた剣によって、石塀の破片が、宙へと飛んでくる。

僕は咄嗟、破片にモップの柄を突き立てた。

破片が砕け、石つぶてとなってヒトガタに降り注いでいく。

目の前を遮られ、宙で一刻動きを止めたヒトガタの身体を足場に、僕は更に飛翔。

踏みしめた確かな感触。宙高く、高くまで僕は跳び。

上空で感じたひんやりとした空気。

イルミネーションで煌々と輝く街並みが見渡せた。

モップを構えなおす。先端を向けるべき相手はもちろん

「煌ちゃん頑張って!!」

遙か下から届くあさひの声。僕は無言のまま頷く。

ヒトガタが僕に踏み台に使われた反動で、地面に叩きつけられているのが見えた。

横たわったまま、僕へとじつと顔を向けている。

静かに、終わりの時を待つように。

「キラキラ……」

口から自然に言葉が漏れた。

上昇し続けていた僕の身体がぴたり、と止まる。ゆっくりと下降をはじめた。モップの先端から放たれる光。

やってやる。終わらせてやる。

「モップ……」

光が増して、大きくなった。柄の端まで光り、余剰の光は僕を体ごと包んだ。

落下速度が高まっていく。光で夜空に尾を引いて、落下し続ける。速くなる。まだ速くなる。加速し続ける。倒すべき敵は、すぐ目の前！

「うわああああ!!」

これで……決めるんだ！ モップを握る手を強めた。そして地面は目前。地に横たわったヒトガタも目前。全力で決めるんだ！！ もう誰も奪わせやしない！！

「キラキラモップファイナル!!」

ヒトガタの体を、モップが貫く。

瞬間、僕自身も見えない速さで光が広がり、視界が全て消え失せる。

白い光の中。どこまでも白い光。

「……………」

ヒトガタが声ならぬ悲鳴を上げ、闇夜に溶けていった。
完全なる、消滅。

ふと気づけば光の世界は消えて、世界はいつもの風景。闇に落ちた、見慣れた景色だった。

沈黙が路地に落ちる。暫く、誰のものともわからない荒い息遣いだけが響いていた。

「煌ちゃん、すごい……」

あさひがぼつりと呟いた。僕はそちらを見て、微笑みを浮かべる。

「清掃　完了」

変身が解けていく。あさひも同様に、元に姿に戻った。

「あさひ、怪我は？」

トワが呆然としたままの表情で、あさひへと近付き、問いかける。

「大したことないよ、全然大丈夫」

僕もあさひの方に駆け寄っていく。変身時に切り裂かれた筈の衣服は、元の衣服に戻って跡形もない。しかし、じわりと肩口に滲む赤色が痛々しい。

「病院！　沙良さんに診てもらわないと！」

「うん、そうだね。沙良さんのところに行こう」

あさひが笑顔で応じてくる。僕はあさひの笑顔を見て、安堵の息を漏らす。そして、ようやく現実に戻った気がした。

夢でも見たのかと思う。高揚した気分はそのままだったし、今僕がしたことが、自分のやったこととは思えない。

「それにしても、なんであさひが助けに来てくれたんですか？」

フワフワした気分のまま僕が聞くと、あさひは僕の方を見て肩を軽くすくめた。

「だって煌ちゃん、お母さんからのプレゼント忘れていっちゃうんだもの。そのことに気付いて煌ちゃんを探しに来たんだ。そしたらリフューズの声が聞こえてきて……」

「まさかプレゼントが変身関連のものだとは思わなくて」

僕が言い訳すると、あさひが首を傾げた。

「え？　だってわたしの両親、美少女清掃員の研究機関勤めだよ？　お母さんからのプレゼントだって言えばわかんと思ったんだけどなあ」

「そ、そうだったんですか」

僕は横目でさりげなくトワを睨みつけた。嘘とか言って、あさひの両親は本当に研究機関の人間だったんじゃないか。トワは取り繕った笑顔だ。

「それにしても助かりました。こんなパワーアップするものを届け

てくれて」

僕の言葉に、あさひは再び首を傾げている。

「うつん……？ ペンダントはメンテの為に定期的に変えるものだけど、特にパワーアップする機能なんてついてなかった筈だけだなあ？」

「え？」

僕はトワの方を見る。トワも無言で首を振っている。じゃああのすごいチカラはなんだったんだ。ヒトガタすら一撃で片付けてしまっ、凄まじい力。

「でもすごい！ ヒトガタ相手だと光の力がうまく作用しなくて武器も効かないのに。清掃できちゃったのを見たの、初めて。煌ちゃんすごいよ！ 感動しちゃった！」

ぎゅっと両手を握られ、僕は頬を赤らめる。そんな風に率直に褒めてもらえるとは照れる。あさひの後ろに立つトワも安心したのか、穏やかな表情だ。

良かった。みんなを守れた。腰が抜けてしまっかと思うほどの虚脱感だった。

「 よお。こんなところにいたのか」

その低い声が僕の耳に届いたのは、空耳かと思う。

三人の立つ場所から、数メートル先の先、彼は突如現れた。いつものように不敵な笑顔を浮かべて。

「 刹、那？ 」

僕は焦りから視線を泳がせる。今は普通の格好だと思い出し、なんとか落ち着きを取り戻して刹那と対峙した。大丈夫だ、何も不自然に見える部分はない。

僕は刹那へと走り寄っていく。

「 どうしたの、刹 」

「 大宮さん！ 」

浮かべていた笑顔のままで、突然、トワに突き飛ばされた。何が起こったのか、瞬間把握ができない。アスファルトに身体が衝突し、息が止まる。痛みにも目を瞑った。次に瞼を開き、視界が確認した世界には。

刹那が無表情に、トワの首を絞めていた。片腕で軽々とトワの身体を持ち上げ、ゴミ屑のように投げ捨てた。

「 つ！？ 刹那、何を ！？ 」

「 邪魔するなよりフューズ。俺に用があるのは、大宮煌の方なんだよ 」

刹那は感情を含まない声でそう紡ぎ、倒れているトワの足を踏みつける。軽く踏みつけたように見えたが、めき、と嫌な音が響いた。

「 あああっ 」

トワが堪えきれないで、悲鳴を上げた。

「ヒトガタすら凌駕する輝きを放つ完璧な清掃員。そんな厄介なものが産まれてしまったなんてな。ヒトガタにとって、最悪な事態だから、俺は大宮煌をさっさと片付けなきゃいけない」

「せつ……な？」

目の前にいるのは、本当に刹那なんだろうか。信じられない。これは、現実なのか？

刹那は声もなく笑う。くっくつ、と肩が揺れた。

「そんな顔するなよ。せつかくだから教えてやる。俺は、ヒトガタだ。何百年も、成り代わり、成り代わり、人の身体を奪って生きてきた。長く生きてきた所為か、眠気ばかり襲ってくるけどな。最近内倉永久とキスして、永久がりフューズになっていると気付いたんだよ。そして長く生きているヒトガタとして、ヒトガタを統治する立場にいる俺はヒトガタを清掃できるお前を見過ごすわけにはいかなかった」

「嘘、だ……」

だって、高校生になってはじめてできた友達が刹那で。

内気でなかなか人と親しくなれない僕に全く構わずに話しかけてきて。連れまわしてきて。ずっと一緒にいてくれて。そんな刹那に感謝してて。飾らない言葉と、たまに見せる優しさとか。

「全部、嘘だったって言うのか……？ 虚像だったって……？」

「大宮さんも永久も、気に入っていたのにな。本当に残念だ」

「さません！」

その場で一番速く動いたのは、あさひだった。いつの間にか変身し、刹那へと掃除機を振り上げる。

刹那は背後へと跳躍し、それをかわす。

「邪魔が多いし、今日はもう眠いから帰るよ。次に会ったのが楽しみだな、大宮さん」

刹那は無邪気に笑みを浮かべて、言葉を紡いできた。ズキリ、と心にひびが走った。なんで、なんで笑うんだ。笑えるんだ。地面に伏しているトワは無言のまま、表情も見えない。

「それじゃあ」

刹那が背を向けて、走り去った。

「待ちなさい！」

あさひが掃除機を抱えたまま、それを追いかけていく。あさひは首だけを振り向かせ、僕の方を見遣った。

「煌ちゃん……トワ君をお願い」

くしゃりと一瞬だけ泣きそうな表情になったが、あさひは健気にも微笑みを浮かべた。

ああそうか、と思い当たる。あさひは、大宮煌が刹那に恋してることを知っているから

二人が消えた闇の先を目で追いながらも、僕は倒れているトワの方へと駆け寄った。きっと誰よりも心を引き裂かれたのは、トワだ。

「トワ、大丈夫ですか？」

トワは腕に力を込め、なんとか身を起こそうとするがなかなか立ち上がれない。僕がその身体を支えてやり、なんとか半身だけ起こすことができた。

「折れてはないと思うから、大丈夫。歩けるよ」

「トワ……」

僕は間近にあるトワの瞳をのぞきこんだ。無理に造った笑顔と、揺れる瞳。僕の背中にしがみつく指先が震えているのが伝わってくる。

「驚きだよね、まさか、刹那君がヒトガタだったなんて」

「……」

何も言葉が出てこない。胸が詰まった。堪らないほど、泣き叫んでしまいたくて。

それでも今泣くのは、僕じゃない。

僕は自身の胸に、トワの頭を強く抱え込んだ。

「大宮さん？ ……なんか自分の胸の感触とかあんまり嬉しくないんだけどなあ」

「泣きなよ、煌。今だけ……泣いていいです」

「何言ってるの大宮さん。ボクは、泣きたく、なんか」

語尾が震えていた。トワは、しがみつく手を強め、胸に顔を埋めてきた。

「好きだと思ってた男の子が、まさか、ボクの憎むべき対象だった、なんてね。笑っちゃうよね、笑っちゃうよ、本当に……」

「……それでも、」

僕は顔の見えないトワへと声をかける。トワは肩を震わせていた。

「それでも、僕らが刹那が好きだと思つた気持ちに嘘はないです」

トワから嗚咽がこぼれた。

僕はトワの背中をそおつと、何度も、撫でさすつてやる。そうして、時間が過ぎていく。

「あ　雪、だ」

空気が冷え込むと思ったら、僕の眼前に雪の粒が落ちてきた。空を見上げる。雪がちらちらと舞い落ちてきている。泣き続けているトワはそのことにまだ気付いていない。

そして僕の眼に映る今日の宙に、星は一つも、見えなかった。

第五話 聖夜の美少女清掃員？

時間が経ち、気分が落ち着いたトワに肩をかしてやり、僕らは大宮医院まで歩いた。トワの足の状態を診てもらう為だ。片足を引きずって歩くトワは無言だった。泣き腫らした目は真っ赤だったけど、顔を上げた時にはもう涙はその顔になかった。

僕も何一つ言葉が出てこなかった。今は何も言わなくとも、痛いほどトワ 彼女と感情が繋がっているのを感じた。

追いかけていったあさひのことが心配だったけれど、おそらくあさひも深追いはしないだろう、と楽観的に考えるしかない。

大宮医院に着いた。もう深夜なので照明は落ち、施錠されている裏側、自宅の方へとまわっていく。

付着した雪の粒が溶けて、髪の毛が濡れそぼってしまっていた。かるく頭を振って払ってから、玄関扉を開ける。開いた音に気付いたのか、すぐに沙良さんが玄関に顔を出した。

「煌、また怪我したのかい」

トワを見て、呆れ顔で肩をすくめて言い放つ沙良さんに、僕は妙に安心感を覚えた。日常へと帰ってきたような。けど、そう感じたのは僕だけだったと直後に知る。

「おばあちゃん、元に戻して」

トワは開口一番、そう言った。

「トワ……？」

僕は呆然とトワを見遣る。

「あるんでしょう？ 元に戻る方法。今すぐ、ボクを大宮煌の身体に戻して」

トワの切実な表情に、向き合う沙良さんの表情が苦しげに歪む。

「あるよ」

「はああああ！？」

僕は思わず絶叫していた。まさかそんなあっさりと肯定する言葉が出てくるとは思っていなかった。今まで何度も沙良さんに詰め寄っていた。探りを入れたりもした。それでも、沙良さんはのらりくらりとかわすばかりだったのに。

「ちょ、ちょ、ちょっと本気ですか沙良さん！ じゃあなんで今まで教えてくれなかったんですか！」

「深夜にこんなところで騒いでたら苦情が来る。まずは家に入りな」

沙良さんは眉をひそめて顔の皺を深め、僕に苦言を漏らしてくる。確かにもう日付も変わった深夜だけれど、それどころじゃない。元に戻る方法があるなら、今すぐに知りたい。

「居間の方に行こう。煌の足も診てやらなくちゃいけないし。ちゃんと話すから、ね」

沙良さんは落ち着いた声音のまま、僕らを見遣る。

やはり人生経験豊富な人物には敵わない。感情的になっている二人を前にしても、堂々としている。

僕はトワと顔を見合わせ、嘆息してから靴を脱いだ。

「まずはじめに。永久君には本当に悪いことをしたと思ってる。元に戻る方法があるのに話さなかったことも含めて」

沙良さんはトワの足を診ながら、僕に向けて言ってきた。視線は下ろしたまま、声のトーンも穏やかなままだ。

僕はタオルで濡れた髪の毛を拭きながら、居間に腰をおろしてそれを聞く。

暖房が効いている室内と静かな雰囲気、少し気分も落ち着いていく。しかし頭の片隅にはずっとあさひのことが気に懸かっていた。

「美少女清掃員は一度きりしか入れ替わりの力を使えない。これは何度も話したと思う」

沙良さんの言葉に、僕は頷く。

「大宮煌が僕に行使した入れ替わりのチカラで、僕たちは入れ替わったわけですよ」

「うん、そうだよ」

僕の言葉に、トワがぼつりと応える。

「じゃあやっぱり無理じゃないですか」

そのチカラが一度きりしか使えないのならば、もう使うことはできない。僕はがくりとうな垂れた。

「なんで美少女清掃員が入れ替わりの力を使えなくなるか。それは、元の身体は死に、入れ替わった身体がリフューズに堕ちていくからだ。でも、君は生きているだろう、永久君」

「あ」

沙良さんの言葉にぽん、と手を打った。なるほど。

「じゃあ戻ろう。今すぐ戻ろう」

僕はトワへとずんずん歩み寄っていく。方法がわかった今、この姿で甘んじていることもない。

「今すぐには無理だ」

沙良さんが迫り行く僕に向かって、水を差してきた。

「永久君……つまりは現在の大宮煌の身体が命の危機になった時じゃなければ、そのチカラは使えない。命の危機さえ訪れれば後の方法は簡単なだけだね」

「僕が命の危機に……」

自分の身体を見下ろす。怪我一つない健康体だ。胸大きい。

命の危機と言われても現実味が沸かない。でも言われてみれば、大宮煌と入れ替わった時、彼女は死に掛けていた。その状況じゃなければ入れ替わりのチカラは使えなかった、というわけだ。僕は偶然にもその現場に居合わせてしまった、ということだ。

「話さなかった理由はまだある」

沙良さんがトワの足に包帯を巻きながら言うてくる。

「もしそれで入れ替わりが成功したとしても、元に戻った大宮煌は死ぬ」

「……！」

僕は表情を強張らせ、固まった。

「美少女清掃員の入れ替わりのチカラは元々そういうものなんだ。自分の身体が使い物にならなくなった時に、誰かと入れ替わってでも生き延びる為の手段だからね。だから、使い物にならなくなった身体は死ぬのが当然だ」

「そんな……じゃあ結局戻る方法なんてないじゃないですか」

僕がぼつりと吐き出した。やりきれない感情。もし僕が元の身体に戻れたとしても、それが煌の犠牲の上にしか成り立たないのなら、そんなことは絶対にできない。できるはずがない。

「死なないかもしれない。永久くんが助かったように、助かるかもしれない」

トワはなおも食い下がる。必死になっていた。そうまでして、元に戻りたいと言い放つトワの姿を見たのは初めてだ。

僕には理解できてしまった。刹那を止めるのは、美少女清掃員の力が必要だ。たとえ相手が恋心を抱いている相手だとしても。いや恋心を抱いている相手だから、こそか。

「おばあちゃん、ボクらを元に戻してほしい」

「トワ……」

きつと、トワは元に身体に戻って、刹那を清掃しようとしている。そんな決意は悲しすぎる。受け入れられない。僕の中ではもう、煌と入れ替わることは有り得なくなっていた。たとえ一生女の子のままだったとしても。清掃業を続けなければいけないとしても。刹那と対決することになっても。

僕は何があっても大宮煌を守る。そう決めたんだ。

「死なないかもしれないなんて不確かな賭けに出させるわけにはいかないよ。例外は何度も起こらない。永久君が助かったのは本当に有り得ないことだったんだ。偶然入れ替わった永久くんの魂が、煌の身体を完璧な清掃員にさせる程の輝きを持っていて起こった、いわば奇跡だ。そして残念だが煌、お前さんは完璧な清掃員ではない」

「完璧な清掃員……」

刹那も言っていた。僕は呟き、再び自分の身体を見る。自分の魂に、そんな輝きが宿っていたなんて、驚きだ。そして入れ替わったことでソレが誕生したという偶然にも。

「……って、あれ？ 沙良さんはなんでそのことを……？」

先ほどの変身で完璧な清掃員として覚醒したのに、沙良さんがその事実を知っている筈はない。僕は首を傾げ、問う。

「沙良さんにわからないことはないのさ」

ニヤリと口の端を吊り上げる沙良さんに、脱力した。確かにこの人物は底知れない。事情を全て把握していたとしてもおかしくない。

「どう思われてもいい。ヒトガタに対抗できる美少女清掃員を失うわけにはいかないんだよ、煌」

沙良さんが言った言葉に、トワは俯き、唇をただ噛み締めていた。僕にかける言葉は見つからなかった。トワ同様に俯き、その事実を浸透させていく。再び入れ替わる為にはこの身体が命の危機になることが必要。そして元に戻ったとしても、大宮煌はおそらく死んでしまう。同時に、ヒトガタを清掃できる完璧な清掃員も失われる。

「……トワ、僕は、このままです」

先ほど決意したことを言葉に出す。沙良さんとトワが僕の顔を見た。安心させる為に笑顔を浮かべ、二人と視線を交叉させた。

「僕が全部片付けるから、だから何も心配しないでください」

最初は巻き込まれただけだった。流されるまま、美少女清掃員として戦ってきた。でも今は違う。自分が、自分の意思が望んでいる。守るべきものを見つけたから。だから、戦える。

ガタリ、と玄関から物音が聞こえた。沙良さんとトワがはっと緊張して身体を強張らせた。僕も同様に。ピリピリとした緊張感に空間が張り詰める。

居間の扉が開く。顔を出したのはあさひだった。

「あさひ！ 大丈夫ですか!？」

僕が駆け寄ると、あさひが気まずそうに微笑みを浮かべた。

「ごめんね、追いかけたんだけど見失っちゃったの。とりあえず報告だけはしておかなくちゃって思ってた」

あさひが現れたことにより、緊迫していた空気は緩んだ。懸念していたことが少しでも取り払われたことに、ほっと安堵のため息が漏れた。

沙良さんが今度は肩を怪我しているあさひの治療をはじめた。しばらく誰も言葉を発さず、黙々と治療だけが続いていた。

「三人とも疲れただろう。今日はもう休みな」

沙良さんが全員に向けて言ってくる。確かに心身ともに疲れ果てている。頭を空っぽにして身体を休息させることが必要に思えた。

「うん。じゃあ、今日のところは寝ます。おやすみなさい」

僕はいち早く宣言し、居間から立ち去ろうと腰を上げた。先ほどまでしていた話を少しでも拭い去りたい気持ちが強かったのかもしれない。

「ね、煌ちゃん。今日わたし泊まっていてもいいかな」

あさひが去ろうとした僕の背を追いかけてきて、言った。振り向き、自分よりも小さい女の子を見下ろす。

「もちろんです」

頷くとあさひが微笑みを浮かべた。やはりこの笑顔に癒されるなあ、と僕もつられて微笑む。

「今日是一緒に寝よう」

「!？ ……えっ、つとお ……」

笑顔のまま言い放ったあさひに、僕は動揺が隠せずに視線が泳ぐ。一緒に寝るのはさすがに理性が保てる自信がない。助けを求める為に沙良さんを見遣った。沙良さんはニヤニヤしているだけだった。意地悪。

「いいんじゃないかな」

「……トワ？」

突然に、トワが言い放った。驚いてトワの顔を見る。いつもの飄々とした表情で、僕の方を見ている。先ほどまであった出来事など全部なかったかのように。やはりトワは精神力が強いのだ、と思う。

「ボクは今日沙良さんと一緒に寝るから。だから、二人も一緒に寝るといいよ」

「でもだってそれは」

「行こう煌ちゃん」

あさひが僕の手を取り、告げる。僕は頬が熱くなっていくのを感じながら、それでもこれ以上の抵抗は無駄に感じた。

「うん」

頷くとあさひが笑顔を見せた。すごく安心した。今僕が、誰よりもあさひと一緒に過ごしたいと思っていたことを、トワに見透かされてしまっていたのかもしれない。

あさひと二人でさつさとパジャマに着替え、照明を消してベッドへと潜り込んだ。時間は夜更け。本来ならベッドに入った瞬間バタンキューなんだけど。

まさかこんな状況になるなんて。安心感もあつたけれど、隣にいるあさひを意識しすぎて、眩暈の方が強い。

無理矢理にでも眠ってしまおうと目を瞑った。心臓の音、うるさい。あさひに聞こえてしまうのではないかと心配になった。それでも。

雪が降っている外の寒さが信じられないくらい、この場所は暖かで、安らかだ。

あさひは何も言葉を発さない。規則的な息遣いだけが耳に届いてくるので、もう眠ってしまったのかもしれない。

目を瞑ってじっとしていた僕を同様に眠っていると思ったのか、あさひが少しだけ身を寄せてきた。

「……………」

息が止まりそうになる。こんな状況で眠るなんて、無理だ。

人肌のぬくもりが近く、熱が伝わってくる。ぎゅっと瞼を下げ続け、自分の中の何かを追い払う為に必死に葛藤する。ほぼ抱きかかえられている格好で、あさひは、僕の髪の毛を撫でた。

「……………」

頭を、何度も何度も。

あさひだつて疲れているはずなのに。怪我してるのに。それでも、あさひはずっと撫で続けてくれた。時折梳くように、時折触れるように。

時間の経過と共に……自然に、涙が溢れてきていた。

彼女は大宮煌が深く傷ついたのを知っている。だから、こうして慰めてくれている。僕は、大宮煌じゃない。内倉永久なのに。それでも、それでも自分の心が解けていくのを感じた。漏れそうになる嗚咽を必死に堪える。とめどなく、閉じた瞳からすると涙が流れ落ちていく。

必死に普通に振舞っていた。僕が弱さを見せたら、みんな崩れてしまいそうだったから。

でも、今だけは泣いていいのだろうか。

あさひの優しさに甘えていいのだろうか。

僕は煌を救う為に、あさひへの恋心を抱く内倉永久を捨てようと思っただ。

僕は煌を救う為に、心から大好きな友人を討たなければいけないと思っただ。

でも、でも。

身が切られるような、切なさに見われた。

全てを捨てるということは、どうしようもなく辛いんだ。

幕間・2

客間の畳の上に布団を二つひいてくれて、ボクはそのままの恰好で転がった。

息を吐き出す。

ボクの小さなおばあちゃんは、何一つ言わないで、何一つ聞かないで、照明を消し、ボクの横に敷いた布団へと潜り込んだ。

暗闇だった。

安心する、闇の中で、ボクは胎児のように身体を折り曲げる。

「……ねえ、おばあちゃん。ボクはもう、リフューズになってしまったんだ。自分でもわかる。闇がボクを呼んでいる」

既に手首にまで達してきている黒い痣を触りながら、ボクは小さく呟いた。

「そう、かい」

おばあちゃんはそう答えただけだった。

「でも、元に戻れば、永久くんの魂だったら、この身体をリフューズの墮とすことはないんでしょう？」

「……」

おばあちゃんは何も言わない。

外も、静かだった。

今日あった何もかもが、嘘だったみたいに。静寂に満ちていた。冷えた布団を引き寄せ、ぬくもりを探す。でも、ボクの身体は冷

たくて冷たくて、ちつとも温かくならなかった。

「聞いてくれるかな、おばあちゃん」

ボクは闇に向けて呟く。

おばあちゃんはじつと動かない。闇の中では起きているのか、寝ているのかすらわからない。

でも、ボクは紡ぐ。

「ボクね、今日永久くんの為にご馳走を作ったんだ。照れ臭くて言えなかったけど、永久くんに心から感謝してて、頑張って作った。イブと一緒に過ごせるのが、嬉しいと思ってた。特別な日だから、可愛い恰好してきてなんて言ってさ。ボクにとつての彼は救いそのものになっていて、ずっと一緒にいたいと思ったんだ。でも、こんな気持ちをはじめで、永久くんどう接すればいいのかわからなくて、ぎこちなくなっちゃった。ちゃんと言えればよかったなあ」

吐き出す。

「彼が刹那くんに向けて、大宮煌が好きなのは、刹那くんだって言っただ。なんだか、すごく悲しかったんだ。彼の口から、そんな言葉を聞きたくなかったんだ。違うんだって、でも、言えなくて。自分でも分からないんだ。あんなに刹那くんを見てたはずなのに」

笑みがこぼれる。

「……完璧な清掃員がこの世からいなくなれば、永久くんはもう刹那ちゃんと戦わなくて済むよね。刹那くん、見逃してくれるんじゃないかなって思っただ」

「最初からそのつもりで、言ってきたんだね」

バカみたいだ、と思う。

何もかもを捨ててでも、完璧な清掃員の力を手にしたかったのに。なんでボクは、その力を前にして、それ以外のものを手にしようとしているんだろうか。

ボクは仰向けに転がり、腕で目を覆う。

瞼に込み上げる熱いものが、頬を伝っていく。じわり、とシーツに沁みこんでいく。

「ボク、彼を助けたいんだ、おばあちゃん」

バカみたいだ、と思う。

ボクは全てを捨てて、彼が生きられる道だけを選び取ろうとしている。

バカみたいなのに、心から願っていた。望んでいた。

「……知ってるよ。でも、私はお前の祖母だ。お前が命を投げ打つようなマネを、させるわけにはいかない。お前の行く道が、たとえリフューズだったとしても、だ。完璧な清掃員とか本当はどうでもいいんだ。ただ、お前を失いたくない。そして、私はそのことを永久君に決して話せない」

おばあちゃんが苦しげに、言ってきた。

「一番卑怯なのは、私だ」

違うよ。おばあちゃんは、全力でボクを守ろうとしてくれているだけ。

言おうとしたのに、出てきたのは嗚咽だけだった。

「なあ煌、お前さんの持つている感情をなんていうのが分かるかい？」

ボクは無言で首を振った。おばあちゃんには見えないうけど、ボクはもう止まらなくなってしまうた涙で、言葉が出なくなってしまうていたから首を振った。

分からない。分からないけど。

胸が熱かった。

体温なんて殆どなくて、寒くて冷たいはずなのに、胸だけが熱かった。

「そういうのを、愛っていうんじゃないのかな」

おばあちゃんが言った。

ああ、そうかもしれない。

ボクはただ、そう思った。

最終話 永久に煌け 美少女清掃員？

美少女清掃員の心得の巻（ラストです！）

『完璧な強さを得る為には、全てを捨ててください』

三十一日。今日まで予想外に平和な日々を過ごして、気付けば一年の終わりの日だった。

刹那はクリスマスイブの夜に消えたきり、どこにも姿を見せない。携帯電話も通話不能になっていた。本当に刹那がリフューズと関係していたのだろうか。ヒトガタを統治する者？ 完璧な清掃員となった僕を片付ける？ まるで現実味がなくて、悪夢でも見ていたのかとそんな気持ちにもなってくる。

だって刹那は、僕の大切な友達なんだ

窓からのぞける切り取られた空は高く、それこそ磨き上げたみたいにきれいな青色だった。

「何ばーつとしてるの！ キリキリ働きなさい！」

姉の鋭い言葉が飛んできて、僕は反射的に身を引き締めた。持っている雑巾を素早く窓にこすりつけ、スライドさせていく。長く垂らしたおさげ髪が合わせて揺れた。

「まったく！ こんな調子で今日中に終わるのかわかったもんじゃないわ！」

三角巾にエプロンを装着してずっと掃除させられている僕は、シンデレラにでもなった気分だ。

シンデレラの意地悪な姉かというと、やはりエプロンに三角巾装

備で、リビングのローテーブルやサイドボードを拭いている。表情は険しい。

内倉家にて現在、昼下がり。

大掃除の手伝いに駆り出された僕は、姉とともに家中を隈なく掃除させられている。雑巾が標準装備。

トワはというと、自室の方を掃除中だ。トワは姉からの攻撃をいっただってうまく避けている。

「何もそんなに隅々まで全部キレイにしなくたっていいんじゃないですか？」

「へえ、あんた私に口答えするつもりなの？」

姉の言葉に、心臓がヒヤリとした。

「口答えする暇があるなら、さっさと窓をキレイにしちゃいなさい！そこに窓ガラスがあるのが分からないくらいにピカピカに磨き上げるのよ！」

なんで僕が。正直、清掃はこりこりだ。

と、文句を言いたいところだが、姉が僕の意見を聞き入れてくれる筈もない。

こんなにも姉が年末大掃除に気合を入れている理由も、理解できる。

お正月に合わせて、僕らの両親が海外から帰省してくるのだ。姉としては大好きな両親を綺麗な家で迎え入れたい気持ちでいっぱいなのだろう。僕だって普段会えない父さんや母さんとキレイな家でお正月を過ごしたい気持ちは一緒だ。

……そこまで考えて、窓ガラスを擦る手が止まってしまった。そういえば今度のお正月に、僕はいない。何せ僕は火宮煌として

生きていく決心をしたのだ。お正月は当然沙良さんと過ごすことになる。

僕は全てを捨てる決意をしたのだ。僕の両親だって、これからは僕の両親と思っちゃいけないくて

「さぼるな」

姉がいつのまにか至近距離、横に立っていた。姉の冷たい瞳に晒された身がゾクゾクと震えるのを感じた。

「窓拭きが終わったら、床よ。休む暇なんてないから」

「は、はい!」

僕は姉の言葉に従い、キリキリと窓拭きに精を出す。こつやつて身体を動かしている方が余計なことは考えずにすむし。

「お正月、アンタも来ていいから」

「……え？」

眩きが聞こえて、姉の方を振り向く。姉は僕の方を見ずに、作業を続けている。

「いつも永久がお世話になっている女の子として、両親に紹介してあげるわよ。こんな時ぐらいしか親には会えないし」

「あ、ありがとうおねえちゃ」

「黙れ喋るなさっさと働け!」

僕は窓に向き直り、ゴシゴシと雑巾を動かす。俯かせた顔は、自然に笑みが浮かんでしまっていた。

あらかた窓拭きを終え、一度水を替えてこようとバケツを持ち上げた。普段からキレイにしているつもりでも、一年の最後にこうして大掃除をしていると汚れはたまっているものだ。細腕にはバケツいっぱい溜まった水は重い。よろめきながら、両腕でそれを運んでいく。

廊下に出ると、階段から降りてきたトワとタイミングよく鉢合わせた。

「あ、トワ」

「頑張ってるね大宮さん」

トワは笑顔を向けてきた。あの日のことなどなかったかのような、いつも通りのトワだ。足の怪我もひどくならしく、足取りも軽やかだ。

「トワの方はもう終わったんですか？」

僕が聞くと、トワは笑顔のままで頷いた。トワが何故か背中に両手を隠していることに、その時になって気付いた。なんだその可愛らしい仕草は。

「ねえ、これって何？」

トワが隠していた両手を前に差し出してきた。楽しげに言いながら僕の前に差し出してきたものは。

「はわっはわわわああああ！」

光速でトワの手から奪い取った。

なんてことだ！ 最近内倉永久が自分の中で全く消えていてきたせいですっかり忘れていた！

手を離れたせいでバケツが廊下に落ち、水をぶちまけてしまった。ぐわっしょん。しまった、と思うよりも羞恥の方が勝っている。顔面から火、噴出。

「み、見てないですよええ！？」

僕はその手帳を背中に隠しながら、言う。毎度のことながら、なんでトワは平然としているんだ！

「パラパラと見たけど理解ができなかったんだ。で、何なの？」

「いえいえなんでもないですよアハハ」

とんでもない棒読みで僕は告げる。トワが内倉永久の自室で見つけた手帳は、僕の学習机のひきだしの奥底に入れていたものだ。鍵もかけてあったはずだ。でもよく考えてみれば、鍵も自室に置いてあるんだから、ひきだしを突破されてしまう事態も起こって当たり前じゃないか。僕の馬鹿馬鹿馬鹿。

その分厚い手帳は、僕の妄想力が程よく暴走した結果の、あさひとの将来計画を綴ったものだった。その長さ、十七歳から百歳まで気持ち悪いくらいこと細かく綿密に書いた。自分でも気持ち悪い。

トワがにこつと笑った。

「大切なものなんだね。しまっておくからちょうだい」

「……えっ？」

手を差し出してきたトワに、僕は驚愕。

「だってそれ、ボクのものなんでしょう？」

なんてことだ。コイツ、絶対読み直す気だ。それをネタに脅す気だ。……どうする？ トワの顔は貴様に拒否権はない、と語っている。僕は今猛烈にシリアスな表情をしているに違いない。

「……はい」

差し出した。咄嗟に閃き、いつも持ち歩いている大宮煌の手帳と背中ですりげなく入れ替えて。ラッキーなことに、装丁や厚さまで似通っていた。

トワはあまり確認もせずにそれを受け取って、シャツの胸ポケットに仕舞った。イエス！

この妄想手帳は今度すりげなく焼却しよう、と心に誓う。全てを捨てることを誓ったのだ、僕は。

「とっくん」

一つの山場を越えた安堵の間もなく。おどろおどろしいトーンの姉の声が、背後から耳に届いた。

振り返ると、怒りに肩を震わせている姉が立っていた。

「なあんてことを、してくれたのよおお！」

廊下はびしょびしょ。先ほど掃除したばかりだったに、汚い水でその美しさは跡形もない。僕は今更その事実に関心して青ざめる。

「うわあごめんなさいごめんなさい！」

「殺す！ 殺すわ！」

姉の般若ばりに恐ろしい形相に、僕は命の危機を感じ取った。その場から逃げ出す。猛然と追ってくる姉。これほどの恐怖が、かつてあっただろうか。

姉との追いかっことで、ドタバタと家内を駆け巡り中だった。リフューズの産声が、耳に届いた。

耳に慣れてしまったその雄叫びに、自然に気持ちが切り替わる。

「トワ！」

トワの方へと戻る。廊下を拭いてくれていたらしいトワも身体を起こし、厳しい表情で頷いた。

「行こう。本当の、清掃の時間だ」

僕もしっかりと頷き、二人で揃って玄関へと走る。

「あ、ちよつと永久に煌！ 二人とも逃げるなんて卑怯よ！」

玄関から姉の声が聞こえたが、構っている余裕はない。僕らは振り返らずに全速力でその場から離れていく。

……後で姉の逆襲が待っていることは、今は考えないようにしよう。

変身を終えてから、家に程近い空き地で遭遇したりリフューズをあ

っさりと清掃した。相手はトラガタだったけど、ヒトガタでも簡単に片付けられる今の僕には敵じゃない。……ちよつと強がつてるけど。

消え去ったトラガタを見届け、僕は胸を撫で下ろす。後ろに立つトワも、ほつと息を吐いたのが聞こえた。これで一段落だ。

「清掃 完」

僕がその言葉を紡ぎかけた時。

ぐわああああ

うおおおおお

がああああアアッ

「え!？」

空を仰ぐ。澄み切った青空に轟く咆哮が耳に届いて。しかも一つだけじゃない。幾つも重なって、大音量が鼓膜をうわんうわんと震わせた。

「な、なんで……?」

僕は、周囲に視線を巡らせながら、街の大通りへと出た。年の瀬には街を往来している人の数がいつも多い。道路を走る車も混み合っている。僕の派手なオレンジ作業着（スカート仕様）と金色の髪に奇異な眼を向けてくる人々。その痛々しい視線には慣れたけれど。それどころではない。何が起こっている？

トワを振り返った。トワは厳しい表情を浮かべながらも、ただ首を振る。

「ボクにも何が起こっているのかわからない。リフューズがこんなと同時に現れたことなんて今まで一度もなかった」

「とりあえず、行くしかない、ですよね」

僕は呆然としながらも、なんとかトワに向けて告げる。リフューズがまた現れたということは、美少女清掃員である僕の仕事は終わっていないということだ。

「そうだね、うん。行こう」

トワが言い、率先して駆け出す。僕もその背中を追った。

その間にも。次から次に増えていく、リフューズの声。幾数にも重なった産声に、街全体が揺れているようだった。途切れてはまた生まれ、途切れてはまた生まれる。肌があわ立つ。なんでこんなにも。一体、どこから

その答えは、僕たちの行き着く先で見た。

「星霜学園……」

横に長く建ち並ぶ校舎が、僕らの前にある。年末で誰もいないはずの僕らの学園から、溢れ出てきているたくさんのリフューズの姿が目飛び込んできた。おぞましい光景が、ひろがっていた。

周囲に人気はない。本来なら、冷たい風だけが吹いている静かな空間。

僕とトワの耳には、悲鳴のような怒号のようなりフューズの声が聞こえている。

動物の容を影だけ映したような、黒い何かが校舎の窓から、玄関から、見える。

僕は呆然と浅く呼吸を繰り返し、不意に感じ取った何かに、校舎

の上を仰ぎ見た。

屋上にぼつんと人が立っているのが見えた。
どくん、と鼓動が一際激しく脈打つ。

人間じゃない あれは、ヒトガタ。

「刹那くん……」

横にいるトワも気付いたのか、頭上を仰いで眩きを漏らした。その横顔を見ると、苦しげに眉を顰めていて、嫌でもトワの気持ち伝わってくる。

胸が痛くて、僕はトワから視線を外してもう一度刹那を見上げる。無表情に僕らを見下ろす刹那の唇が、動いた。

『コ、イ、ヨ。オ、オ、ミ、ヤ、キ、ラ、リ』

とうとう、この時が来てしまった。

僕はモップを持つ右手を、強く、握り締め直した。

最終話 永久に煌け 美少女清掃員？

僕は学園内に踏み込み、手当たり次第にリフューズを清掃していた。
った。

次から次に、教室から、窓から、階段から、絶え間なくリフューズが僕に襲い掛かってきた。

一人の力では限界がある。一体どれだけ出てくるっていうんだ……！

各種様々な容をしたリフューズを、いくつもいくつもいくつも清掃していく。そのうちに、息が切れて呼吸が乱れ、肩が大きく上下する。額に浮かぶ汗を、走りながら拭う。それでも立ち止まるわけにはいかない。僕がここで止めないと、学園から街へとリフューズたちが行ってしまう。

何度もモップを振り回しているうちに、腕が痺れていきっていた。手先が震えて、モップを落としそうになってしまった。

「はぁ、はぁ、はぁ」

言葉も出てこない。それでもリフューズはまだまだ減る気配がない。

屋上で待つ刹那の元へと、向かわなければいけないのに。少しも前に進めない。それどころか、リフューズの猛勢におされて後退してしまっている。

僕は靴を履いたままの踵を廊下に踏みしめ、凄まじい速度で襲い掛かってきたカラスガタをモップで叩き落した。喘ぐ間もなく、カラスガタが消えていく。

「あれ、トワ……？」

いつの間にか、一緒に走っていたはずのトワの姿が見えない。見渡す限りに存在するのは、大量のリフューズと僕のための学園。

「ぐわあああつ」

「……っ！」

少しの間集中が途切れていたことによって、至近距離までライオンガタのリフューズが迫って来ていた。僕に向けて鋭利な爪を振り下ろし

「くっ、はあっ」

きりさかれ、弾き飛ばされた。

僕の身体が廊下にバウンドし、衝撃に息が止まる。

なんとか肩膝をつき、壁にもたれながら身を起こした。切り裂かれた作業着の胸部分が大きく開き、浅く赤い線が白い胸の上部に走っていた。ぐらぐらと視界が揺れる。酸欠で眩暈を起こしかけている。

立ち上がる力もない。それでも僕に向かってくる、多くのリフューズの姿。

もうダメだ、と泣き言を漏らしかけた。
その時。

「ピカピカ掃除機ー！」

「！？」

可愛らしい声が、場に響き渡った。

僕はハッとして、聞こえてきた声の方へと首を振り向かせた。ま

さにその瞬間、白い作業着姿のあさひがピンク色の掃除機にリフューズを吸い込んでいた。

僕のいる廊下の奥へと、あさひが猛然と迫ってきている。

そのあさひを自転車の後ろにのせて、走ってきているのは、

「助けに来たぞおお大宮ああああ!!」

自転車を猛然と漕いでいる友枝だった。後部席に、美少女清掃員姿のあさひが掃除機を持って立っている。

あさひの掃除機にすばすば飲み込まれていく、雑魚のリフューズたち。

「友枝、君!？」

友枝は目隠し布を巻いていた。僕の姿にも気付かないで、そのまま僕の前を通り過ぎていく。

「とおっ」

あさひがかけ声と共に、自転車を飛び降りた。目隠ししている友枝は、そのまま突き当たりの壁に激突していった。

「煌ちゃん、大丈夫!？」

走り寄ってきたあさひを見て、僕は心の底から安堵の息を漏らす。

「助けにきて、くれたんですね……」

「うん、トワ君から連絡があって! ちょうどいっちゃんと一緒にいたから、話聞かれちゃって。いっちゃんも行くって聞かなくて。」

でも変身見られるのはまずいから、途中から目隠ししたの」

友枝は廊下の突き当たりで、自転車と共に倒れ伏している。

トワがあさひを呼んでくれたのはありがたいけど、余計なおマケまでついてきてしまったということか。僕は嘆息する。

「ゆっくり話してる暇はないみたい！」

あさひが鋭い声を放ったので、僕も身を固くして周囲に視線を巡らせた。

あさひは素早く姿勢を低くした反動で、跳んだ。

「ピカピカキーク！」

迫ってきていたライオンガタに、弾丸のような飛び蹴りをめりこませた。

ライオンガタが廊下の反対側まで吹き飛ばされていく。

「ここはわたしがなんとかするから、煌ちゃんは他のところをお願い！」

僕を振り返ったあさひが、輝く笑顔を見せてくれた。ゲンキンにも僕の身体に力が漲ってきた。

「ありがとうあさひ！」

とにかく先に進むんだ。刹那の待つ、屋上へ！

僕は廊下を駆け出す。背後であさひが戦っていてくれる気配を感じた。なんという百人力。怖いものなんて何もない。

階段を駆け上がっていく。屋上に続く階段は、あとは三階の廊下

を突っ切ればいいだけだ。

僕は走った。何も考えないようにして、全速力で走った。

屋上への階段の目前、廊下の曲がり角から、突如現れたリフューズに意表をつかれた。

慌ててモップを翳す。その光る毛束が届く前に。

目にも止まらぬ速度で、銀色の何かがリフューズに衝突。リフューズが弾き飛ばされていく。

「えっ!？」

「こんなことで手間取ってちゃ、完璧な清掃員は務まらないねえ」

聞き慣れた声が、僕の耳に届いた。

「美少女清掃員、サラサラ 推参」

落ち着いた声音。水色の作業着。ストレートに足元まで伸びる、美しい銀色の髪。

僕の前に立つのは、美少女清掃員（幼女バージョン）の沙良さんだった。

「沙良さん、弱いのに助けに来てくれたんですか!」

「弱いは余計だ!」

沙良さんが振り向いて言うてくる。愛くるしく小生意気そうな顔立ちで、キツと僕を睨み上げてきた。

「煌に頼まれてしまったからな! 先に行くんだ永久君!」

沙良さんが前へと向き直り、空間からハタキを生み出した。

「トワが……沙良さん、ありがとうございます！」

どうやら姿が見えないトワは、僕を助ける為に色々走り回ってくれているらしい。こんな時だけど、嬉しさがこみ上げてきた。

僕には、あさひという強い味方がいる。沙良さんという頼りになる存在がいる。

そして、トワがいる。

大丈夫、負けるはずなんてない。僕は瞳に強い光を宿す。

沙良さんがウシガタのリフューズへと瞬間で迫り、連続ハタキ攻撃を見舞っている。

しかしウシガタの角が、沙良さんをあっけなく弾き飛ばしてしまっただ。

「ぐうつ」

「沙良さん！」

僕は壁に叩きつけられた沙良さんの元へと、駆け寄っていく。

「雑魚に構うな！ お前さんは行くべき場所へ行くんだ！」

厳しい言葉が飛んできて、僕の足がピタリと止まる。

沙良さんの鋭い眼が、僕を真っ直ぐに見つめていた。

「ヒトガタを、止めてくれ……！」

僕は沙良さんの切実な訴えを受け、表情を引き締める。そうだ、僕が行くべき場所は、一つだけだ。

僕はもう振り返らずに、走った。がむしゃらに階段を駆け上がった。

屋上に続く扉を、押し開く。

その場所に出ると、傾いた陽がその場を赤く染め上げていた。想像以上に長い時間、リフューズとの戦いに費やしていたようだ。リフューズの産声も徐々に少なくなってきた。

冷たい風が吹きつけてきて、僕の金色の髪がなびく。

荒い息を吐き出して、モップを下ろした。

……あさひは、友枝は、沙良さんは、トワは無事だろうか。

そして佇む僕の真正面、数メートル先の場所に。

「ども、大宮さん」

刹那が、立っていた。

僕と刹那の影が、屋上のタイルに長く伸びている。

刹那は無表情だった。軽く手を上げて、言い放ってきた。僕は再びモップを持ち上げ、刹那を強く見据えた。

「刹那……！」

「会いたかったよ」

こんな時なのに、刹那の言葉に鼓動が跳ねた。ぎゅっと唇を噛み締めた。

切なくて、悔しくて、狂おしくて、どうしようもなくて。

「刹那アアアッ！」

慟哭のように僕は叫び、駆けた。

刹那が瞬時に手の中に生み出した剣と、僕のモップが衝突した。

モップの毛束が揺れ、光の粒子が僕らに降り注ぐ。刹那は光の粒に眉根一つ動かさない。剣を持つ手に力を徐々に加えていく。

ぐぐ、と押され、僕の踏みしめていた踵がずり下がる。なんて力だ……！

僕は一度後ろへ跳んだ。

更に速度を上げ、二度、三度、刹那と衝突を繰り返す。

刹那はどんな速度にも、簡単についてくる。

屋上に、数十回に及ぶ僕らの衝突によって、大量の光の粒子が雪のように舞っている。

「俺を産まれたばかりのヒトガタと一緒にと思うなよ」

剣先の向こう、刹那が唐突に言い放ってきた。

剣をおもむろに引いてきた。刹那の剣へと全力でモップを向けていたので、僕の身体がよろめいた。そこに放たれた、容赦ない蹴り。

「っ」

腹を蹴られ、吹き飛んだ僕の身体が地面を滑る。ガリガリと膝がすり剥けた。うつ伏せに倒れ、腹と膝がズキズキと痛んだ。それでも感情は昂ぶったままで、僕は肘を地面にたて身体をすぐさま起こした。

「知ってるか？ 俺ぐらいのヒトガタになると自在にリフューズを生み出すことだってできるんだ。かなり消費するから、俺はもうヘトヘトだけどな」

刹那は肩をすくめて立っている。僕など相手にならないといった風に、剣をだらりと下ろして。

「僕を狙う為にあんなまわりくどいマネをしたのか!？」

「多勢で行けば、完璧な清掃員にだって勝てるかなって。でも無駄だったな。やっぱり俺がやらなきゃ駄目か。面倒くさいな」

刹那は欠伸をしながら、後頭部をかいている。

「……許さない。大宮煌を傷つけて、その身体まで奪おうとしているお前を、僕は絶対に許さない!」

僕が怒鳴りつけても、刹那は表情を変えない。軽く息を吐いただけだった。

「仕方ないな。さつさと殺すことにするか」

刹那が気付けば、眼前だった。

「せ、」

「悪いな。今の俺は、本気なんだ」

その動きは、初めて見たヒトガタと同様のもの。いや、それ以上。生気の感じられない影が、気配もなく眼前だった。至近距離にある、刹那の感情のない空洞のような眼。

本当に刹那がリフューズと関係していたのだろうか、なんて甘い考えは。

簡単に、粉々に、破壊された。

「うあああつ」

頬を殴られ、飛ばされていく。凄まじい衝撃に、目の前が暗くな
っていく。再び地に転がされ、圧倒的な力の差を思い知らされる。
仰向けになった身体をぐしゃり、と踏みつけられた。

「ぐ、うう……！」

何度も蹴られて嘔吐感がこみ上げる。容赦なく、機械のように、
何度も、何度も、何度も。

白濁とする視界に、意識が朦朧になっていく。身体中いたるとこ
ろを、凄まじい力で蹴りつけ、踏みつけられる。
痛みすらもう、感じられない。

「そろそろかな」

僕の耳に、刹那が紡いだ言葉が届いた。僕は思考がうまく働かず
に、刹那の方を薄く開けた瞼で見ることにしかできない。

刹那の背後、伸びている影が見える。……そこから。

ヒトガタがのそり、と産まれた。産まれ出たリフューズが歓喜の
産声を上げる。鼓膜が振動し、脳が揺すぶられる。

「……な、んで」

あんなに清掃したのに。みんなで、戦って、ここまできたのに。
こんなにも、簡単に。

ヒトガタがのそりのそりと僕に近付いてくる。

「この世界は負の感情で溢れている。リフューズなんていくらだっ
て産み出すことは可能なんだよ。ただ気まぐれに産まれてくるリフ
ューズたちを今までは放置してたけどな。今回ばかりはやらなきゃ
いけないから、ちよつと俺も本気出して頑張ったんだぜ？ ヒトガ

タを一体産み出すのは、かなりの労力なんだぞ」

刹那が慈しむように僕を見下ろして、初めて笑顔を見せた。

「ただ殺すのは惜しいから、ヒトガタに食わせてその身体を手に入れることにした」

僕は信じられない言葉を吐いた刹那を見上げる。

何を、何を言ってるんだ、刹那は。

ヒトガタが僕の手首を掴み、身体を持ち上げてくる。

僕は抵抗すらできず、ヒトガタの大きく開かれた口を前にしていた。

ヒトガタの口の中に見えるのは、絶望だけだった。

「仲間になろうぜ、俺たち」

「嫌だ」

刹那は完全に油断していた。

僕は一方的な暴力により、完全に打ちのめされていたから。でも、まだ心の中にある光は、消えてない。

「僕はリフューズにはならない！」

喉を振り絞り、やき切れるかと思うほどの痛みを堪え、吠えた。

僕は手の中に自在にモップを生み出すことが可能で。

だから、腕が上がらなくても。足が動かなくても。僕は手の中にモップを生み出して、それを思い切り前に突き出せばよかった。

「キラキラ、モッ、プ……ファイ、ナル」

渾身の一撃だった。その一撃に、全部を込めた。
ヒトガタが大量に光の波に吞まれて、消えていく。
僕はその場に崩れ落ちる。一矢報いたことに、笑みがこぼれた。

「は、はは……」

もう何も出来ない。その場に転がったまま、指先一つ動かすことすらできなかった。

刹那が、僕をのぞきこんでいた。その表情がはじめて歪んでいた。

「じゃあ死ねよ」

直後　ズブリと腹部に違和を感じた。

衝撃、だけだった。

「せ、つ、な……」

「仲間になれたら、楽しかったのにな……っ!？」

刹那の声が遠い。激しい動悸で、耳元がどくんどくと鳴っている。浅い呼吸しか繰り返せない。

もう、何も感じない。

何も見えない。

視界が、消えていく

閉じきる前にトワの顔が見えた。まぼろしかもしれない。

「ごめんなさい、永久くん、本当に、ごめんなさ……っ」

なんでトワは泣いているんだろう？

謝らなくてもいいのに。僕は、君に感謝してるのに。君に会えてよかったと思ってるんだ。入れ替わって、よかったって。

君の強さが、僕を変えてくれたんだ。僕を、限りなく強くしてくれたんだ。

パタパタと頬に水滴があたるのを感じた。

「救ってくれて、ありがとう」

下ろした瞼とともに、視界が完全に消えうせた。

それでも、トワの穏やかな声は聞こえた。

頷く力すら残されてないけれど。伝えたい。

意識を手放す前に、柔らかな感触が唇に伝わってきた。

僕も、伝えたいんだ。君に。

全身に巡っていた筈の痛みが消えていた。意識もクリアになっていた。

僕はその場に立ち尽くしていた。

「え……?」

何が起こったのか、把握ができない。

急速に取り戻した感覚に、世界が眩む。

「逃げるぞ永久君!」

その僕の耳に届いたのは、沙良さんの声だった。視界が少しずつひろがっていく。

沙良さんと、あさひもいた。まだ二人とも美少女清掃員の姿のま

まだった。ああ、そうか。二人が助けに駆けつけてくれたのだと、思い当たる。あさひが掃除機を振り回し、刹那と戦っていた。

トワは？

僕は意識を手放す前にトワの顔を見た、はず。夢じゃなければ。沙良さんが猛スピードで僕の前に来て、手を取った。

「ぐずぐずするな！ 来るんだ！」

友枝もいた。友枝、何も事情を知らないのに、こんなとこまで来ちゃって大丈夫なのかな。なんてどうでもいい感想が僕の脳内を占める。

友枝はいつもみたいにふざけた様子じゃなくて、似合わない真剣な表情なんかつくってた。そして、何かを背中に抱えていた。

沙良さんが強く僕の手首を引く。刹那とあさひが戦う反対方向へと連れていこうとする。

「でもあさひが……」

気になってあさひの方を見遣る。刹那が忌々しそうに舌打ちをしていた。

「邪魔するなよ清掃員！ さっさとトドメをさしたいんだよ俺は！」

「そんなことさせない！」

僕は沙良さんに手首をぐいぐい引かれてるのに、その場から動けない。

「永久君、ここは任せて早く逃げて！ お願い！」

振り返ったあさひと目が合った。その必死な言葉を受け、僕はようやく正気に返って頷く。

とりあえず、逃げなきゃいけないのは伝わったから。

何もかもがうまく考えられないまま、沙良さんと友枝の背中を追う。

なんであさひは、僕のことを永久君と呼んだのだろう？

なんで友枝に背負われている大宮煌は、目を開かないのだろう？

最終話 永久に煌け 美少女清掃員？

僕は内倉永久の身体に戻っていた。

そのことに気付いたのは、大分時間が経過した後だ。その頃には陽が落ちて、街全体が薄暗闇に覆われていた。

友枝、沙良さんと共に大宮医院までたどりついた。息を切らしながらも沙良さんは休むことなく、煌の身体を診療台へと寝かせた。ありったけの医療器具をひっぱり出してきて、煌の腹部から流れ出る血を止めようとしている。友枝が何か喚んでいるけど、何を言っているのか僕にはわからなかった。

僕はただ、呆然とこのなりゆきを見守っていた。見守っているというか、うまく現実を受け止められずに、逃避していた。

これは夢なんじゃないだろうか、と。

目の前にいる大宮煌は、顔色も蒼白で、唇も青くて、全く生気を感ぜられない。

僕が刹那に刺された直後、おそらくみんなが駆けつけた。あさひと沙良さんが刹那と対峙しているその少しの間に、トワは僕にキスをしたんだ。

命の危機が訪れた時、キスをすれば入れ替わることができる。それは最初に煌と入れ替わった時から知っていた。

「なんで、なんでそんなこと、したんですか……」

僕の口からぽつりと眩きが漏れた。その声は、耳に馴染んだ自分のものだった。

僕の、内倉永久の身体だった。それなのに、ちっとも嬉しくなかった。

『救ってくれて、ありがとう』

彼女は僕に向けてそう言った。穏やかな声で、満たされて震えてしまっている拳を、ぐっと握った。

僕は、そんな言葉が欲しかったわけじゃない。

僕は、大宮煌を助けたかったんだ。

でも実際に救われたのは自分。痛めつけられて、瀕死の重傷を負った身体を自ら請け負ったのは、煌の方だった。

「沙良さん、煌は助かるんですか……？」

汗を浮かべながらも、治療行為を続ける沙良さんの横顔に声をかける。

「……」

沙良さんが無言で、くしゃりと表情を歪めた。それだけで、わかっってしまった。

自分の孫が息絶えそうな現場に、平気ではいられないのだろう。それでも気丈に動き、煌の止血を続けている。

もう手遅れなのに。全部、終わってしまったのに。

僕は耐え切れず、診察室の扉を開き、廊下へと出た。

友枝がいつの間にか診察室を出て、ちょうど廊下を走っていく背中が見えた。

「友枝君、どこに行くんですか？」

僕はぼんやりとしたまま、友枝の背中に声をかける。

友枝は首を振り向かせてきた。真剣な表情だ。

「どこって、あさひを助けに行くに決まってるだろうが！」

「……っ」

刹那の圧倒的な力は、完璧な美少女清掃員ですら全く敵わなかった。刹那は煌にとどめをさす為に、まだ向かってくる気だった。その刹那を止める為に、あさひが戦っている。なんで僕はそのことを忘れていたんだ。

友枝に言われて、頭を思い切りガツンと殴られた気分になった。

「わけわかんないけどな！ 大宮は絶対に助かるんだよ！ 俺の大好きな女の子は完璧な美少女なんだよ！ だからこんなことで死ぬわけないしな！ アイツは、あさひはけっこう間抜けだから、誰かが助けてやらないと……だから、行くんだよ！」

そうだ。

何一つ、終わってなんかいない。

僕はこんなところで何をやっているんだ。

「友枝君、お願いがあります。沙良さんを、手伝ってあげてほしい」

「は？ 何を」

僕は友枝に向けて、深く頭を下げた。

「手伝いの手が必要だと思うんです。煌を助けたいんでしょう？ だから、沙良さんとここに残ってほしいんです」

僕は頭を下げ続ける。

「あさひはどうなる」

友枝の真剣な声が降ってくる。僕は顔を上げて、友枝を見た。

「僕が刹那を止めます。あさひを助けます」

「お前が……？」

「必ず、助ける。全員、助けてみせる。綺麗事だと思われてもいい。僕は、みんなを助けたいんです！」

友枝を強く見据えた。暫く、沈黙があった。

「……わかった。じゃあ、お前に託す。全員救ってこいよ、必ず」

「ここは頼みます！」

僕は言い放ち、駆け出した。大宮医院を飛び出し、僕は走った。全速力で走り続けた。今までの大宮煌の身体とは歩幅が違って、いつもよりも景色が早く流れていった。

僕ができることは、

僕が内倉永久に戻ってできることは、大好きな人たちを救うことだけだから。

目的の場所までたどり着くと、僕は血眼になって地面を見つめ、視線を忙しく動かした。

照明が全くなって、暗闇に染められているので凝視したところで殆ど何も見えない。

それでも僕は這いつくばって、長い間探し続けた。

明かりになるのは、ビルとビルの隙間から僅かに差し込む、星の

輝きだけ。

「……あつた」

奇跡かとも思う。僕はそれを見つけることができた。

いつかに捨てたペンダント。

ちぎれた鎖もそのまま、残っていた。僕はペンダントを拾いあげて、手の平の中に包み込む。

できる。僕になら、できる。

リフューズになりかけているこの身体。それに美少女清掃員の変身も、武器も、心得も、全て習得してきた。だから、この姿でも、きつと。

手のひらの中の星が、応えるように熱を帯びた。

息を吸い込み、僕は前だけを強く見据えた。

「清掃開始！」

最終話 永久に煌け 美少女清掃員？

僕は星霜学園の屋上まで戻ってきた。時間は経過していたけれど、不穏な空気は変わらずにその場を支配している。

遠目に白い作業着を発見した。いそいで駆け寄っていく。

「あさひ！」

作業着がズタズタに裂かれ、薄桃色の髪の毛は乱れている。周辺には血溜まりが幾つも出来ていた。武器の掃除機ももう壊れてしまっていた。ボロボロになっているあさひは、それでもまだかろうじて立っていた。僕の呼びかけに振り返る。

「永久、君……？」

「永久？ ……驚きだな」

刹那もやはり、いた。あさひとの長い戦いに傷一つ負った様子もない。あさひに続き、刹那も動きを止めた。現れた僕の姿に目を丸くしている。

あさひが限界だったのか、その場に膝を折る。僕はあさひの前に立ち、刹那と向き合った。

僕は、黒のつなぎ作業着姿。髪の毛の色は変わらず、黒だった。髪型も普段通り。やっぱり中途半端にしか変身できなかったけど。でも変身したのならば、光の力は使えるはずだ。

「刹那、もうやめてくれ」

僕は刹那を見つめながら、手に光を収束させていく。

敵に対して、負けないという強い気持ち。そして勇気と愛。僕の中に変わらずにある。

全部、煌が教えてくれたんだ。

武器を出す為に、精神を集中させた。瞬き、自分の手に生まれ出たものを確認。

「……それでどうするつもりだよ、永久」

刹那の突っ込みに、僕はがくりとうな垂れた。

雑巾で。ハタキよりひどい。これ、もしかして姉の呪いだろうか。全く役に立ちそうにない雑巾を僕はぐしゃ、と握り締める。

「これで戦うんだよお前と！」

僕は刹那へと駆けていく。雑巾だろうとなんだろうと、戦うしかない。

「なんで邪魔するんだよ」

拗ねたように刹那が言い放ってきた。僕は刹那へと詰め寄り、その両肩を掴んで押し倒した。拍子抜けするくらいに、刹那はあっさりとその場に崩れた。

「刹那……？」

掴んでいる刹那の肩が小刻みに揺れている。呼吸は浅く、顔色は紙のように白い。

刹那は……消耗している。

表情は変わらないままだったけれど、長い戦いで確実に蝕まれていた。多くのリフューズを産み出し、何度も光の粒子を注がれて。

こんな僕に簡単に押し倒されてしまうくらい。

「刹那、もうやめよう。こんなことしたって……」

「無理だ。俺はリフューズだからさ、清掃されるまで止まらない」

見下ろす刹那の瞳は、感情を含まないもの。だけれど、僕を見ている。瞳に僕が映っている。やっぱり僕と刹那の間に嘘なんて一つもない、なんて思ってもいいのかな。

歯を食いしばっても涙が止まらなくて、刹那の頬へとパタパタ降り注いだ。

なんでだろう、なんでこんな時になって気付いてしまったんだろう。

「戦いたくない……」

「お前は本当に、甘えた奴だな」

刹那が呆れたように言い放つ。それでも、それでも。

僕は刹那を清掃することが、できない。あれほど心に誓っていたはずの決意は、刹那を前にしてあっさりと崩れ落ちた。

僕は何一つ、捨てることなんてできてなかった。

結局完璧な強さなんて、手にすることができないんだ。

僕は、戦えない。ここまで来て。変身までしたのに。

刹那の手が伸びてきて、力が抜けてしまった僕の首を簡単に掴んだ。刹那の力を持ってすればそのままへし折ってしまうことだって簡単に出来てしまうんだろう。

でも、もうそうなくても、いいのかもしれない。

大宮煌は失われようとしている。だったら、僕も一緒に消えてしまっても

「永久君！ 永久くううん！！」

遠くで悲痛な叫びが聞こえてきた。

動くこともままならない、傷だらけのあさひだった。

必死になって、僕の名前を呼び続けている。

「諦めちゃダメだよおつ、そんなの、ダメなんだよお！！」

首を絞める力が強まっていく。呼吸が困難になってくる。

僕が見下ろす刹那の表情は、苦しそうだった。

ああ、そうか。

リフューズだから、ヒトガタだから、止まらない。でも本当は、
本当は。

「今度はボクが救う番だ」

その声が聞こえたのは、世界が静止してしまったかのように、
静寂に包まれていた時だった。

僕の首を絞める、刹那の手が緩む。

僕は刹那の横に崩れ落ちる。

刹那の動きは速かった。瞬時、身体を起こして跳躍し、僕の視認
できる位置から消えうせた。

次の瞬間に、刹那のいた場所に膨大な光の波が押し寄せた。

屋上のコンクリートが、強力な一撃によって抉られる。

ゆっくりと光が集束していく。モップのかたちへと。彼女の、姿
へと。

「き、らり……？」

僕の前に、守ってくれているように立っているのは、光に包まれた美少女清掃員だった。

滅茶苦茶に殴られて蹴られて傷だらけだったはずの少女は、全ての傷が消えうせて、金色の髪の毛を揺らし、力強く地面を踏みしめていた。

幻なんかじゃない。確かな実体が、僕の目の前にある。

確かに、大宮煌だった。完璧な清掃員に、覚醒した、大宮煌だった。

「なんで覚醒を？ どうして、どうやって」

僕の疑問に応えず、煌はモップを横にして持ち、自身の前へと構える。

「煌！」

僕は彼女の横に並び、彼女の名前を呼ぶ。

煌は前だけを見ていた。給水塔の上に立つ、刹那だけを見据えていた。

「もう永久くんは、戦わなくてもいいんだ。ボクが、全部、終わらせるから」

煌は瞳に光を宿らせ、跳んだ。

モップを構えなおし、毛束を刹那へと向けて高く高く跳躍する。

「うわぁああぁー！！」

「どこまでしつこいんだよ清掃員がぁぁー！！」

刹那が吠えた。

空間に剣を、数十、どころじゃない、数百と生み出し、その剣先を全て煌へと向けていた。

数百の剣が豪速で煌へと向かっていく。

それでも煌は引かない。光の弾丸となって、刹那に向かっていく。

僕は何かを考える前に、無意識に身体が動いていた。

地を蹴り、駆けていく。

数百の剣先が向かっていく煌へと。自分の身体じゃないみたいに、速く動けた。

そして、煌の前に立ちはだかるように、跳び上がった。

「永久く　！？」

僕は雑巾を前に翳す。

瞬間、自身から光が溢れていくのを感じた。

雑巾だったものは、巨大な光の壁になった。数百の剣が、全て光の壁に阻まれて、跳ね返り、地へと落ちていく。

「行けえええええ！！　煌いいいい！！」

僕は叫んでいた。あらん限りの力を振り絞って、叫んでいた。

だって、刹那は、本当は

僕の肩に足をのせ、煌が更に高く跳躍した。

僕は落下していく中で、その光景を見ていた。

時間が、スローモーションになったかのように、ゆっくりと流れているように思えた。

落下していく僕を、一度だけ煌が振り向いてきた。

「　だよ、永久くん」

僕に向けて何かを、言ってきた。聞き違いかと思う。

煌の翳っていたトップが、巨大な槍の容に変化した。その空を覆わんばかりの大きな光の槍とともに、刹那へと向かっていく。

刹那は目を見張り、ただそれを見ていた。

だって、刹那は、本当は、止めてほしいと、思ってるんだ。

光の波が押し寄せ、二人を包み込んだ。

爆発でもしたかのような閃光に、何も見えなくなった。

闇だった空が、瞬間で昼間のように明るくなった。

光の渦はそれでも止まらなかった。

長い時間、光は暴れまわるようにうねり、何もかもを真っ白にしていた。

洗い流されていく。全てが。

僕は目を瞑る。地に落ちた身体に衝撃が走ったけれど、それすらも全て消えていくような、光の渦だった。

全ての光が消えうせ、闇夜が戻ってくる。

その場にはもう、

大宮煌も、辻刹那もいなくなっていた。

「永久君……」

あさひが怪我を負っている身体をひきずりながら、僕へと歩み寄ってくる。僕は呆然と立ち上がり、あさひを見た。

「二人とも、一緒に消えちゃうなんて、ヒドイ光の力ですよ……」

「……それが、完璧な美少女清掃員の、真の力ってことなのかな」

ぼつりとあさひが呟いた。

僕が手にできなかった、完璧な清掃員の力を煌は行使したんだ。僕を救う為に。

涙が止まらなくて、こんなところを好きな女の子に見られたくなかった。

でもやつぱり、どんなに痛めつけられている状態でも、苦しくても、悲しくても。

あさひはくしゃくしゃに泣きながら、笑顔を向けてくれた。

「清掃　完了」

僕はあさひに向けてくしゃくしゃな顔のまま、告げた。

同時に十二時を報せる鐘がどこから、聞こえてきた。新年を迎えたことを知る。元の姿に戻って、僕はシャツの胸ポケットに何か入っていることに気付く。

手帳だった。

「あ……」

そうだ。今日僕はトワに渡したじゃないか、この手帳を。ポケットからそれを取り出す。

何度も目を通した美少女清掃員について書かれた手帳を、パラパラと捲っていく。内容は完全に覚えてしまっていた。でも、最後のページに見覚えのない走り書きを見つけて。

目を留めた。

美少女清掃員の心得の巻（ラストです！）

『完璧な強さを得る為には、全てを捨ててください』

その一文の下に、書き足したのであろう走り書き。

『ボクは、捨てられないキミが、大好き』

いつ書いたのだろうか。きっと煌は元に戻ることを決めていたから、このメッセージをここに残したんだろう。

やっぱり、振り向いた彼女が言ってきたのは、僕の聞き違いなんかじゃなかったみたいだ。

大好きだよ、永久くん。

なんて。彼女は、消えていく前に僕に向けて言ってきたんだ。

「卑怯じゃないか……」

僕は、君に、結局何一つ伝えられてない。

言いたいたことがたくさんあったのに。

伝えたいことが溢れているのに。何一つ聞かないで、自分の気持ちだけ全部伝えて消えちゃうなんて。

僕は宙を見上げ、星に向けて、呟いた。

エピローグ

寒さに震えていても、容赦なく新学期はやってくる。

僕は休みボケしてしまっている身体をなんとかベッドから起こし、のそのそと学校へ行く準備をはじめた。

朝食を済ませてから、洗面所で顔を洗って歯を磨き、髪の毛を軽く整える。

鏡の中に見えるのは、見慣れた内倉永久の顔だ。

なんだか少しだけ大人っぽくなった。と、思いたい。

「遅刻しちゃうわよ煌ちゃん！」

姉が洗面所へと顔をのぞかせ、言い放ってきた。

僕は姉に急かされて、急いで制服へと着替えた。

三十一日を境に、僕は太宮煌じゃなくなったんだけど。実は姉にまだその真実を話していなかったりする。

あの日から　姉は僕への怒りを募らせ、逆襲に燃えていた。姉の様子があまりにも恐ろしくて、言いそびれてしまった。一度言いそびれると、なかなか言い出すキツカケを見つけれられない。それでもそろそろ言わなきゃいけないんだろぅなぁ、と憂鬱になっている今日この頃。

「煌ちゃん、今日学校で永久と会つかしら？」

背中にかけられた姉の言葉に、ドキリとした。

三十一日にあった何もかも、姉には話していない。だって僕の姉は、本当は優しいって知ってるから、話したらまた泣かせてしまいそうなんだ。

「……さ、さあ？ どうでしょうね？」

「永久に会ったら、学校の帰りに家に寄るように言っておいてね？
アイツ、お正月も結局来なかったんだから！」

「は、はい……」

僕はこくり、と頷いた。

「ふふ、会つのが楽しみ。絶対にとくんのこと許さないんだから。
久しぶりにいっぱい、虐めちゃうんだから」

……やっぱり本当のことを言うのは暫くやめておこう。

僕は久しぶりの緊張感を胸に、教室へと踏み込んだ。

クラスメイトたちがワイワイと友達同士ではしゃいでいる。僕は
入ってすぐにキョロキョロと目を走らせ、教室内を見渡す。
いるわけなんてないのに、探してしまっていた。

「そうですよね……」

ぼつり、と呟く。何度も思い知ったのに。年末のあの日、大宮煌
は消えてしまった。だから、こんなところにいるわけなんてないの
に。

それでも、ひょっこりいるんじゃないか、なんて期待してしまっ
ている僕がいて。

僕は肩を落しながら、自分の席に向かう。

向かう途中で、信じられないモノを見た。信じられなくて、二度
見た。

刹那がいた。何故にいる。

自分の座席で、机に頭をのせ、寝ている。日常で見慣れた光景だった。

「ちょ、ちょ、ちょっと刹那あああ！？　なんで生きてるんですかあああ！？」

僕は寝ている刹那の席まで走り寄っていき、無理矢理に刹那の腕を持ち上げて立たせる。

平和そうな寝顔でこんこんと眠っている。僕の呼びかけにも全く起きる気配がない。実は刹那、寝顔がすごく可愛くなるということ、は、僕だけしか知らないんじゃないだろうか。

「ってそんなことはどうでもいい！　起きろおお！！」

「……あ？　なんだ、永久か」

ガクガク揺すぶると、やっと刹那が目を開けてくれた。半分だけだけ。

「なんで生きてるんですか！　あの時清掃されたんじゃないんですか！？」

「うるさいな。喚かなくても聞こえてる。確かに俺は清掃されたけどな、あの時。光の力が完璧じゃなかったんじゃないか？　ほぼ力なんて全部奪われちゃったけど、俺はかろうじて生きてた」

信じられない。僕は刹那を凝視してしまう。

刹那は面倒そうに欠伸を漏らし、まだうとうとしている。

「全てを捨てる事が出来なかったんだろつよ、大宮煌も。それにしても力が奪われすぎたせいで俺のライフはゼロだ。しばらく清掃員の邪魔も出来そうにない。もう眠くて眠くて眠くて――」

寝た。

話しながら、寝てしまった。

僕はもう刹那に呼びかけるのを諦めて、その身体を机に寝かせてやる。

刹那はリフューズだし、強いし、負の感情に満ちているのかもしれないけど。やっぱり変わらずに、僕の友達だ。生きていてくれて、正直嬉しかった。それに――

「永久君」

僕の背中へかけられた呼びかけに、振り返った。

あさひが微笑んで、後ろ手を組んで立っていた。煌の身体でいた時よりも、少しだけあさひと絡む視線が遠くなったことに気付く。

こんな風に話しかけてくれることが、素直に嬉しい。僕とあさひは前よりずっと親しくなれている。

相変わらずあさひを見ると鼓動が高鳴って、頬が熱くなってしまっただけ。

「ね、気付いたでしょう？」

僕はあさひの明るい表情を見て、頷く。

「刹那君が生きてるってことは……」

単純かもしれないけど、僕の表情も嘘みたいに明るくなった。

「きっと、煌ちゃんも生きてる」

あさひからその事実を聞いて、今すぐにでも走っていききたい気持ちになる。煌を探しに行きたい気持ちになる。

「沙良さんにも話さなきゃね！今日の帰り、一緒に大宮医院に行こうよ」

「うん！そうですね！」

「いつちゃんも誘っていいかな！？」

「う、うん！そうですね！」

一瞬言葉が濁りかけたけど、僕はなんとか頷く。

友枝は別人みたいに机に顔をのつけて、メソメソ泣いている。

沙良さんもだけど、みんなひどい落ち込み様だったから。だから、みんなに早く話してあげないといけない。

煌は、絶対に生きてるって。

その気持ちに呼応するように。

リフューズの産声が、耳に届いた。

「あ、永久君」

「うん」

どうやら始業式はサボることになりそうだ。

「行こう」

ふんわりと微笑み、あさひが手を差し出してきた。

僕はその手を取って、二人で教室を飛び出した。

大宮煌がいなくなってしまうって、僕は彼女に代わって清掃員として清掃業を続けることになった。だから、リフューズの産声が聞こえてきたら行かなきゃいけない。

でも流されているわけじゃなくて。僕は、自分の意思で清掃業を続けて行こうと決めたんだ。

僕らは校庭を駆け抜け、校門を出てリフューズの姿を捜す。

しばらく走って、細道に入ってリフューズの産声が近くなったのを感じる。

そろそろ変身しなければいけない。ポケットに入れてあったペンダントを握り締めて確かめる。

熱を帯びた星を、ポケットの中に感じた。

僕が変身する前に。

リフューズに立ちほだから、背中を見つけた。

僕は片手で自分の口を覆う。

嗚咽が漏れてしまいそうだった。堪えきれない涙が、頬を伝っていった。

輝く金色の髪を揺らし、凜と立つ美少女清掃員。

「美少女清掃員、キラキラ参上！」

彼女が紡ぐ。

僕は口を開く。

伝えたいことが、たくさん、あるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341q/>

入れ替わるトワトキラリ

2011年3月31日15時21分発行